
おジャ魔女どれみドッカ～ンレジェンド！！

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おジャ魔女どれみドッカ〜ンレジェンド!!

【Nコード】

N4930A

【作者名】

ユーリ

【あらすじ】

どれみ達の前に現れた、5人の女の子。彼女達は魔女見習いで、ある魔女を追っていると言い、どれみ達に協力を持ちかける・・・「瀬川おんぷ誘拐事件」「おジャ魔女SOS!!!」の続編。第18の呪文以降から、お話にYes!プリキュア5GoGo!の要素が入ります。

第01の呪文：新たな魔女見習い、その名は和久のぞみ！（前書き）

このお話は、おジャ魔女どれみナ・イ・ショ（も〜っと！の時期）からおジャ魔女どれみドツカ〜ン！につながるお話です。ナ・イ・ショ第12話で登場した和久のぞみが、もし生きていて、どれみ達の前に現れたら・・・と考え、制作したお話です。長々となりましたが、本文へどうぞ。

第01の呪文：新たな魔女見習い、その名は和久のぞみ！

私の名前は春風どれみ。

ひよんな事から魔女見習いになっちゃった、小学6年生の女の子。

仲間には、藤原はづきちゃん、妹尾あいこちゃん、瀬川おんぶちゃん、飛鳥ももこちゃん、そして私の妹のぽつと、赤ちゃんから6年生になっちゃったハナちゃんがいるの。

私達はこれまで3年間、必死で魔女修行を続けてきた。

この3年間で、私達の絆はより深まっていたのである。

いつものようにMAHO堂で涼んでいたマジヨリカは、聞き慣れた歌声にゾツとした。

マジヨリカ

「ララ、ワシは隠れる！後は任せた！」

そう言って、マジヨリカは隠れようとしたが・・・遅かった・・・

ドバン！！

デラ

「マジヨリカ！失礼ね！今日は支払いじゃなく！情報を持ってきた！デラデラ！よ！」

この、いつも歌を歌いながら登場する彼女こそ、問屋魔女・デラである。

ララ

「今日は支払いじゃないって、どういう事？」

デラ

「総元締めのマジヨドンさんに聞いたんだけど、なんでも最近、超スゴ腕の魔女見習いが現れたそうよ。」

マジヨリカ

「スゴ腕の魔女見習い？」

デラ

「どれみちゃん達のように飛び級はしてないんだけど、9試験、全てパーフェクトなの！しかも全部の試験クリアに要した期間は、わずか半年！！」

マジヨリカ

「わずか半年じゃと！！？」

ちなみに、人間界にいるどれみ達は笑う月の晩しか魔女界には行けないので、試験の期間が延びるのだが、元から魔女界にいる魔女の場合、話はちがうのである。

デラ

「そろそろMAHO堂にも来るらしいわよ。それじゃ〜ね〜」

そう言って、デラは消えた。

マジヨリカ

「新しい魔女見習いか・・・どれみ達を少しハメてみるとするか・・・」

ララ

「それよりマジヨリカ、この紙！」

マジヨリカ

「ん？じよ、情報料だとく！！？」

ババ

「ちゃっかりしとるズラ・・・」

そんな事とはつゆ知らず、美空小学校のどれみ達は・・・

小竹

「おい、どれみ、聞いたか？今日このクラスに転校生が入ってくるんだってよ！」

どれみ

「転校生？」

ハナ

「どれみのクラスって、転校生がよく来るよね。」

ももこ

「あいこちゃんでしょ、おんぶちゃんでしょ、私でしょ、ハナちゃ

んでしょ・・・ホントだ、これで5人目・・・」

小竹

「今度はどんな子が来るかな？矢田、オマエはどんな子だと思う？」

矢田

「さあな・・・案外、ガリ勉タイプのムツツリ君かもよ？ま、オレは興味ねえけど・・・」

どれみ

「矢田君、はづきちゃん一筋だもんねー！」

矢田

「は、春風！」

ハナ

「ねえ、もも、一筋って何？」

ももこ

「1人の子だけを、純粹に好きって事だよ。」

ハナ

「じゃあ、はづきと矢田君は両想いなんだ！」

関

「席について！転校生を紹介するよ！さ、入ってきて！」

関先生に言われ、1人の女の子が教室に入ってきた。

のぞみ

「和久のぞみです。前の学校では、のんちゃんって呼ばれてました。早くなじみたいと思うので、皆さんよろしくお願いします。和久だけにワクワクしてます。テヘッ！」

サラサラのグリーンのウェーブヘアにライムグリーンの目の彼女は、とてもかわいらしかった。

のぞみの挨拶に、クラス中が歓声を上げる。

さっそく杉山と小倉が、漫才で自己紹介した。

普通の女の子なら、寒すぎて引いてしまうはずだが、彼女は・・・

のぞみ

「アハハハハ！あなた達って、おもしろい！！アハハハ！」

見事に大笑いした。

どうやら、のぞみの笑いのセンスは、はづきやもここに似ているようである。

関

「じゃあ、和久の席はどこにしようか・・・」

関先生が見渡す前に、のぞみが声を出した。

のぞみ

「あそこが空いていますね。あそこの席に行きます。」

のぞみはそう言うと、スタスタ歩いて行ってその席に座った。

その席とは、どれみの前の席だった。

のぞみ

「あなたが春風どれみちゃんだね。それと飛鳥ももちゃん、ハナちゃんだね。よろしく。」

どれみ・ももこ・ハナ

「よ、よろしく・・・」

なぜ、のぞみは空いている席がすぐにわかったのだろう。

千里眼か？と、どれみは思っていた。

小竹

「どうしたんだ、どれみ？」

どれみ

「あ、何でもないの・・・」

のぞみ

「あなたが小竹君だね。どれみちゃんの事が好きなのかな？」

小竹・どれみ

「え！？」

小竹とどれみは、一瞬にして顔が赤くなった。

ももことハナも、のぞみの異様なオーラを感じていた。

学校が終わり、どれみ達はMAHO堂にいた。

今日もたくさんアクセサリーが売れた。

どれみ

「たくさん売れたねー。」

あいこ

「今日はもう閉めた方がええんとちゃう？」

どれみ達がMAHO堂を閉めようとしたまさにその時、和久のぞみが入ってきた。

どれみ

「あ、のんちゃん、いらっしやい！」

のぞみ

「ねえ、いきなり質問しちゃうけど、いい？」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ハナ・ぽっぷ
「・・・？」

どれみ

「いいよ！のんちゃん！」

のぞみ

「じゃあ単刀直入に聞くね。あなた達って、魔女だよね？」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ハナ・ぽっぷ
「え!？」

のぞみ

「なんなら、もっと正確に言っ
てあげようか。ねえ……魔女見習
い……さん？」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ハナ・ぽっぷ
「ええええええーっ!?!？」

のぞみの発言に、どれみ達は驚愕した。

どれみ

「ど、ど、どうしよう!?!」

はづき・あいこ・おんぷ

「このままじゃ私達……」

ももこ・ぽっぷ・ハナ

「マジョガエルになっちゃうよー!?!」

どれみ達は慌てふためいたが、次の瞬間、ハッとした。

どれみ

「あ……」

はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ・ハナ

「あれ……?」

なんと、どれみ達は全員、マジョガエルになっていなかったのだ!!

どれみ

「な、なんで？どうして！？」

その時、奥から声が聞こえた。

マジヨリカ

「ハッハッハ！！オマエ達はマジヨガエルにはならんよ！」

どれみ

「マ、マジヨリカ！？」

店の奥から、マジヨリカとララ、そしてババが出てきた。

はづき

「どういう事！？」

見ると、和久のぞみがどれみ達のようなすを見て、クスクス笑っている。

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ・ハナ
「????？」

マジヨリカ

「ハハハハハ！！正体を教えてやれ、和久のぞみ！！」

のぞみ

「はい！」

そう言うと、のぞみはあるモノを取り出した。その、あるモノとは・

・

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ・ハナ
「コ、コロンタップ!!」

のぞみを取り出したモノは、どれみ達も持っているコロンタップだった。

驚愕しているどれみ達の前で、のぞみはすばやく変身した。

のぞみ

「プリティウィッチーのぞみっちー」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ・ハナ
「なああああああゝっ!!?」

どれみ達は、またも驚愕した。

どれみ達の目の前に立っていたのは、グリーンの魔女見習い服を着た魔女見習い姿ののぞみだったからだ!!!

第01の呪文：新たな魔女見習い、その名は和久のぞみ！（後書き）

どれみ「新たな魔女見習い、登場かー！！」

はづき「なんか、シヨツパナから波乱の予感がするわ・・・」

あいこ「まあ、いつものこっちゃがな・・・」

おんぷ「このシリーズって、基本的に波乱物よね。」

ももこ「それを言っちゃあオシマイよ！」

ぼつぷ「今回は「謎だらけ！のぞみと仲間は嵐の予感！！」だよ！」

ハナ「やっとのぞみの目的が見えてくるよー。」

のぞみ「ま、そんなワケで次回も、パウラピラルペル静やかに！！」

第02の呪文：謎だらけ！のぞみと仲間は嵐の予感！！（前書き）

のぞみ達の簡単な紹介です。

和久のぞみ - どれみのクラスにやって来たカワイイ女の子。探偵になるのが夢。魔法の呪文は『パウラピラルペルパウピウレ』静やかに〜。パーソナルカラーはグリーン。

京極さつき - のぞみの友達の1人。やさしいけれど、1人で悩みをため込みがち。魔法の呪文は『ライライロンフォイリラリラフー』しとやかに〜。パーソナルカラーはグレー。

風戸ほのか - のぞみの友達の1人。熱い正義の心の持ち主で、怒りっぽい。魔法の呪文は『フレムクフルクファイアリフォルン』うららかに〜。パーソナルカラーはライトブルー。

初音りずむ - のぞみの友達の1人。魔女界のトップアイドルで負けず嫌いな子。魔法の呪文は『キラリンリルンラミラミラー』つややかに〜。パーソナルカラーはブラック。

春日みすず - のぞみの友達の1人。とても面倒見がよく、看護婦になるのが夢。魔法の呪文は『フェルタンフェットンファラリラポン』あざやかに〜。パーソナルカラーはホワイト。

第02の呪文：謎だらけ！のぞみと仲間は嵐の予感！！

どれみ達の目の前には、グリーンの魔女見習い、のぞみが立っていた！

どれみ

「の、のんちゃんも魔女見習い・・・！？」

のぞみ

「どれみちゃん、驚かしてゴメンね。」

はづき

「それはいいのよ。」

あいこ

「そやけど、のんちゃんの師匠魔女はどこにおるんや？」

「ここにいますぞ！」

その声が聞こえると、どれみ達の前にマジョハートが現れた。

おんぷ

「マ、マジョハート先生！！」

ももこ

「じゃあ、のんちゃんの師匠魔女はマジョハート先生？」

ハナ

「だったら、マジョハートもマジョガエルになっちゃってるはずだ

よ！」

マジヨリカ

「だから言っただろう？オマエ達はマジヨガエルにはならん、と・・
」

マジヨハート

「のぞみは、もともと魔女の子供なのだよ・・・」

どれみ

「どういう事！？」

のぞみ

「私ね、幼稚園までは普通だったの。でも、小学生になって魔力が開花して、それからは魔女界の学校に通ってたの。でも、ある日・・
」

回想・・・

マジヨボルト

「ハハハハハ！！最強の光の魔女といわれたマジヨライトも、もう
終わりだなあ！！」

マジヨライト

「くっ・・・のぞみ、オマエだけでも逃げなさい！」

のぞみ

「うん！」

タタタ・・・。

ドオン！！

のぞみ

「お母様ーっ！！！！」

ドン！

のぞみ

「あっ・・・」

マジョボルト

「フッフ・・・オマエも楽にしてあげるよ。」

のぞみ

「うっ・・・」

マジョボルト

「イヤ・・・もっといい方法があるぞ。コイツの魔女としての記憶を奪ってやろう。そうすれば、コイツが私に逆らう事はできん・・・」

「

キュイイイ・・・

のぞみ

「うっ・・・」

ドサッ。

マジヨボルト

「あばよ、和久のぞみ！」

のぞみ

「それで、アタシはその時の記憶を消されたの・・・」

どれみ

「それって、禁断の魔法じゃない!？」

おんぷ

「私も一度使って、100年の眠りに付きかけた事があるけど・・・」

「

あいこ

「そんなヒドい魔女がおるんかいな!？」

マジヨリカ

「ああ・・・ソイツはマジヨボルトだろう・・・かつて、元老院の魔女だったヤツだ・・・」

マジヨハート

「マジヨボルトは、『自分にはやるべき事が見つかった』と言って、突然消えてしまったんだ。その後の消息は、つかめていなかった。」

のぞみ

「アタシはお母様のカタキを討つために、マジョボルトの行方を探しているの。」

ハナ

「どれみ、私達も協力しようよ！友達が困ってるのをほってはおけないよ！」

どれみ

「そうね！」

おんぷ

「やりましょ！」

マジョボルト

「目覚めよ・・・忘れ去られ、極地に封印されし魔女達よ・・・今、私の元へ！！！」

ガッ！！！！

ズズズズズズ・・・

マジョボルト

「目覚めたか・・・秋風ソラミ・・・秋風リップ・・・林原ミヅキ・・・瀬能アイリ・・・江川ソング・・・そして朝香ナナコ・・・ハハハ・・・ハハハハハ！！！！」

小竹

「よう、どれみ！」

どれみ

「小竹！おはよ！」

小竹

「どれみ！聞いたか？また転校生が来るんだってよ！」

どれみ

「え？また？」

矢田

「このクラスと隣の2組、合わせて4人来るらしいぜ。」

ももこ

「4人も！？」

ハナ

「ホント、どれみのクラスって転校生がよく来るね。」

のぞみ

「ハナちゃん、それ2回目だよ・・・（なぐんちゃって、実はアタシ、転校生が誰か知ってるのよね。京極さつきちゃん、風戸ほのかちゃん、初音りずむちゃん、春日みすずちゃん。そう、アタシのク

ラスメイトで、一番の大親友達・・・」

6年1組

関

「今日は転校生を紹介する！さあ、自己紹介してくれ！！」

京極さつき

「京極さつきです。よろしく！」

風戸ほのか

「ウチは風戸ほのか！よろしくな！！」

6年1組一同（のぞみ以外）

「よろしくー！！」

さつきはももこの前の席に、ほのかはハナの前の席に座った。さつきとほのかは、特にオーラを発していなかった。

一方、6年2組でも転校生の自己紹介があった。

初音りずむ

「アタシは初音りずむです。よろしく！」

春日みすず

「アタシ春日みすずー！仲良くしてねー！！」

6年2組一同

「よろしくー!!」

りずむは、おんぶの前の席に座ると、彼女を見てクスツと笑った。

おんぶ

「え？」

りずむ

「あなたが有名なチャイドル、瀬川おんぶね。アタシ、負けないから。」

はづきの前の席に座ったみすずも、はづきとあいこを見てクスクス笑っている。はづき・あいこ・おんぶは、2人の異様なオーラを感じていた。

どうも、のぞみ、りずむ、みすずの3人は、さつきやほのかとはちがって、雰囲気が自然に出るようだ。

学校が終わり、どれみ達はMAHO堂に向かっていた。

どれみ

「みんな、MAHO堂に行こう!」

はづき

「そうね!」

あいこ

「のんちゃんも来るやる?」

のぞみ

「もちろん行くわよ。この子達も一緒にね!」

のぞみの後ろから、さつき、ほのか、りずむ、みすずの4人が出てきた。

おんぷ

「じゃあ、この子達も・・・」

ももこ

「魔女見習い?」

さつき

「テヘツ、バレちゃったか・・・」

ほのか

「ま、いずれバレると思うてたけどな!」

ハナ

「あなた達も魔女界から来たの?」

りずむ

「そつよ!」

みすず

「アタシ達5人、とっても仲良しの同級生だったの!」

ぽっぷ

「お姉ちゃん、早くMAHO堂に行こう！遅れたらマジヨリ力怒るよ！」

どれみ

「それもそうだね！」

MAHO堂に入ると、のぞみ達5人はタップを取り出し、変身した。

ほのか

「プリティーウィッチーほのかっチー♪」

りずむ

「プリティーウィッチーりずむっチー♪」

さつき

「プリティーウィッチーさつきっチー♪」

みすず

「プリティーウィッチーみすずっチー♪」

のぞみ

「プリティーウィッチーのぞみっチー♪」

ほのかはライトブルー、さつきはグレー、りずむはブラック、みすずはホワイト、そしてのぞみはグリーンの魔女見習い姿になった。

続いて、どれみ達も変身した。

あいこ

「プリティーウィッチーあいこッチー」

おんぷ

「プリティーウィッチーおんぷッチー」

はづき

「プリティーウィッチーはづきッチー」

ももこ

「プリティーウィッチーももこッチー」

どれみ

「プリティーウィッチーどれみッチー」

ぽっぷとハナも変身した。

ぽっぷ

「プリティーウィッチーぽっぷッチー」

ハナ

「プリティーウィッチーハナちゃんチー」

あいこはブルー、おんぷはパープル、はづきはオレンジ、ももこはイエロー、ぽっぷはレッド、ハナちゃんはホワイト、そしてどれみ

はピンクの魔女見習い姿になった。

マジョリカ

「おお、来ておったかどれみ！」

ララ

「あら、さつきちゃん達じゃない！」

さつき

「こんにちは！」

ほのか

「ウィッス！」

りずむ

「お久しぶりです。」

みすず

「元気そうだなによりだよ！」

どれみ

「なんだ、知り合いだったんだ・・・」

マジョリカ

「どれみ達、明日から夏休みじゃろう？」

はづき

「そうですけど・・・」

ララ

「たまにはお店休みにして、旅行に行かない？」

あいこ

「骨休めかいな・・・」

「その通り！」

どれみ達が振り向くと、そこにはマジョルカがいた。

おんぷ

「マジョルカ！？」

マジョルカ

「おんぷ、せっかくの夏休みじゃ、オマエもどれみちゃん達と一緒に遊びたいじゃろ？お休みをとっておいたぞ！」

ももこ

「気がきくんだね、マジョルカ・・・」

「遅くなりました！！！！！」

どれみ達が声のする方に向くと、FLAT4が立っていた。

暁

「やあ、どれみちゃん。」

どれみ

「暁君！学校は？」

フジオ

「ボクらの学校も、夏休み期間に入っただです。なので、MAHO堂のみんなと一緒に旅行に行こうかと思いついて。あ、そうだとばかりちゃん、トランプペットも持ってきましたよ。」

はづき

「そ、そう・・・」

レオン

「あいちゃん、今度は修学旅行の時のようにはいかないよ!」

あいこ

「ハハハ・・・また返り討ちにしたらわ!」

トオル

「おんぷちゃん、ボク、やっとこの間オーディションに合格したんだよ!」

おんぷ

「へエー、おめでとう!」

ももこ

「あれ?そういえばオヤジデは?」

暁

「おんぷちゃんと一緒に行けるって、楽しみにしてたんだけど、カゼをこじらせちゃってね・・・」

ぽっぷ・ハナ

「ハハハ・・・」

のぞみ

「どれみちゃん、この人達誰？」

どれみ

「あ、そっか。のんちゃん達は知らないんだね。暁君、自己紹介して！」

暁

「オッケー！」

暁達は、自己紹介を始めた。

フジオ

「フジオの『F』！」

レオン

「レオンの『L』！」

暁

「暁の『A』！」

トオル

「トオルの『T』！」

暁・フジオ・レオン・トオル

「我ら、人呼んで、『FLAT4』！！よろしくー！！！」

ほのか

「なんやそれ・・・」

さつき・りずむ・みずず

「しょうもなー・・・」

さつき、ほのか、りずむ、みずずの反応はうすい。だが、のぞみは・
・

のぞみ

「アハハハハ！！あなた達、最高〜！！アハハハハ！！」

思った通り、爆笑していたのであった・・・

オマケ・・・クラス紹介

6年1組

――宮前空・林野まさと・山本けいこ――

萩原たけろう・岡田ななこ・横川信子・丸山美保・万田じゅんじ

奥山なおみ・岡島小太郎・中島正義・森川だい・平野いちろう

伊藤こうじ・小倉けんじ・杉山豊和・佐藤なつみ・島倉かおり

玉木麗香・（風戸ほのか）・浜田いとこ・木根ひろこ・工藤むつみ

(和久のぞみ)・巻機山花・(京極さつき)・菊池はじめ・長谷部
たけし

春風どれみ・小竹哲也・飛鳥ももこ・長門かよこ・矢田まさる

6年2組

宮本まさはる・伊集院さちこ

高木まなぶ・柳田すすむ・樋口まき・山内信秋・小山ゆうこ

谷山将太・飯田かなえ・花田志乃・渡部みちあき・中山しおり

梅野ゆかり・小泉まりな・加納のり子・中田こうじ・万田ようこ

松下あや・佐藤じゅん・太田ゆたか・佐川ゆうじ・木村たかお

飯塚けんた・林りょうた・天野こうた・初音りずむ・春日みすず

吉田かずや・和田みんと・妹尾あいこ・瀬川おんぷ・藤原はづき

第02の呪文：謎だらけ！のぞみと仲間は嵐の予感！！（後書き）

どれみ「次回は暁君達と旅行か・・・楽しみだな・・・」

はづき「でも、また何かイヤな事が起こる気がするのは私の気のせいかしら・・・」

あいこ「たぶん、当たってるな・・・」

ももこ「何か起こるって事ね。」

おんぷ「それは実はね・・・むぐっ！！」

のぞみ「ダメよおんぷちゃん、ネタばらししちゃおもしろくないですよ？」

おんぷ「モゴモゴ・・・」

ハナ「次回は『旅行先は無入島！？伝説のお告げがある予感』だよ！」

さつき「次回も必ず見てくださいね！それでは、ライライロンフォイしとやかにー！！」

第03の呪文：旅行先は無入島！？伝説のお告げがある予感！！

どれみ達一行は、旅行先の無人島にたどり着いた。

どれみ

「空気がおいしー！！」

はづき

「ホントね！」

あいこ

「アタシらの他に誰もおらんのか？」

おんぷ

「マジヨルカの話じゃ、私達の貸し切りだそうよ。」

ももこ

「じゃあ、早く荷物別荘に置いて、海で泳ごうよ！」

一同（のぞみ達5人・FLAT4以外）

「さんせーっ！！」

暁

「じゃあ、ボク達は昼ごはんの支度をしてるよ。」

フジオ

「楽しんできてください！」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ハナ・ぼっぷ

「はい！」

どれみ達は別荘に行き、それぞれの部屋に荷物を置き終わると、それぞれのパーソナルカラーの水着に着替えて海に遊びに行った。

同じ頃、別荘の上空には、マジョボルトとマナ、そして謎の少女6人の姿があった。

マジョボルト

「愚か者共め・・・袋の鼠だわ・・・」

マジョボルトはクククと笑うと、杖を振りあげた。

マジョボルト

「私のカワイイペット達よ・・・この島の各地に飛び散って、おジャ魔女を襲うがよい！！」

マジョボルトは呪文を唱え終わると、少女達の方を向いた。

マジョボルト

「秋風ソラミ、秋風リップ、林原ミヅキ、瀬能アイリ、江川ソング、朝香ナナコ。オマエ達は手下を連れて、おジャ魔女のようすを見張っている。」

ソラミ・リップ・ミヅキ・アイリ・ソング・ナナコ

「ハッ！！！」

ソラミ達が各地に散らばると、マジョボルトはまた笑い声を上げて

いた。

そんな事とはつゆ知らず、どれみ達は海で遊んでいた。

どれみ

「それー！」

はづき

「あいちゃん、えい！！！」

あいこ

「冷たー！」

ももこ

「それぞれ！」

おんぷ

「やったわねー！」

どれみ達は、楽しそうに遊んでいる。

しかし、なぜかハナちゃんは動かない。

ぽっぷ

「ハナちゃん、どうしたの？」

ハナ

「さつきから、何か妙な感じがするんだ・・・危ないモノが近づいているような・・・」

ハナちゃんがそう言い終わらないうちに、何かがおんぷの体に巻きついていた。

おんぷ

「キヤアアッ!!」

どれみ

「おんぷちゃん!!」

おんぷを捕まえたモノの正体は、タコのような生物だった。

ハナ

「あ、あれは、タコール!？」

ぽっぷ

「ハナちゃん、何それ!？」

ハナ

「魔女界の海に生息してる、タコの姿をした怪物だよ!でも、なんでこんな所に・・・!？」

どれみ

「それより、早くおんぷちゃんを助けなきゃ!!」

どれみ達はタップを取り出そうとしたが、その前にタコールの足に巻きつかれて、持ち上げられてしまった。

どれみ・ぽっぷ

「あああ！！」

はづき

「うぐうう！！」

あいこ

「く、苦しい・・・」

ももこ・ハナ

「ダメ・・・」

おんぷ

「ううう・・・」

どれみ達、絶体絶命かと思われたその時、空から呪文が聞こえた。

ほのか

「フレムク〜フルク〜ファイアリ〜フォールン！！タコールの足よ、燃えろ！！！」

ほのかの呪文が轟き、タコールの足を焼き尽くした。

続いて、のぞみ、さつき、りずむ、みすずが飛び込み、どれみ達をキャッチした。

しかし、おんぷは間に合わず、海に転落した。

ザパン！

おんぷ

「ううん・・・」

おんぷが目を覚ました時、彼女の目の前に2人の大きな魔女が現れた。

おんぷは、一瞬だけ身構えた。

おんぷ

「ここはどこ？あなた達は誰！？」

マジヨシルバー『紫の魔女よ、よく来た。恐れる事はない。そなたの体は海によって守られている。今そなたの心だけが、未来を告げるこの場所にたどり着いたのだ。』

マジヨゴールド『私達は、魔女見習いの究極の姿だ。1人1人が仲間を思いやる気持ちを最大限に高めた時に、6人が1人に変身し最高のパワーを手に入れるのだ。マジヨボルトを倒すための。和久のぞみ、京極さつき、風戸ほのか、初音りずむ、春日みずす、？？？の6人が、賢者の道に行く。マジヨシルバー』になり、春風どれみ、藤原はづき、妹尾あいこ、瀬川おんぷ、飛鳥ももこ、春風ぼつぷの6人が私、戦士の道に行く。マジヨゴールド』になるのだ。』

マジヨシルバー『瀬川おんぷよ、覚えておくが良い。みなで力を合わす事によってのみ、勝利を得る事ができるのだ。さあ、紫の子よ、さらばだ・・・』

おんぷ

「待って！もっと聞きたい事が！」

気がついた時、おんぷは浜辺に打ち上げられていた。

どれみ

「もう平気よ、おんぷちゃん。タコールはのんちゃん達が倒してくれたわ。」

おんぷ

「どれみちゃん！今スゴいモノを見たの！」

どれみ

「話は後よ。暁君が他の子達を呼び集めてる。すぐに行かなくちゃ。」

「

どれみとおんぷは、別荘に向かって走り出した。

別荘にたどり着いたどれみとおんぷは、あいこ達と合流した。

暁

「みんなも気づいてると思うけど、ボク達だけの貸し切りになっているハズのこの無人島に、魔物の気配があちこちにいる・・・」

フジオ

「おそらくアイツらは、マジョボルトが放った刺客でしょう。」

レオン

「ボク達が一同に会しているこの状態は、ヤツらにとっては好都合ってワケだ・・・」

トオル

「ヤツらの目的は、おそらくボク達を倒す事にあるんだろうね。今なら油断しているから、楽にたたみかけられると踏んだんだろう。」

マジヨリカ

「もちろん、そんな事はさせん。ワシらの真の力を、ヤツらに見せつけてやるんじゃない！」

マジヨルカ

「とは言っても、固まっただけはヤツらの思うツボじゃぞ、マジヨリカ・・・」

マジヨリカ

「そうじゃな・・・よし！何人かのグループに分かれて、ヤツらを迎え撃とう！！」

マジヨリカとマジヨルカはクジを作り、どれみ達はクジを引いた。

グループのメンバーは、以下の通り。

Aグループ - どれみ、暁、のぞみ

Bグループ - はづき、フジオ、さつき

Cグループ - あいこ、レオン、ほのか

Dグループ - おんぶ、トオル、りずむ

Eグループ - ももこ、ハナ、みすず、ぽっぴ

どれみ達はそれぞれのグループに分かれて、行動を開始した。

どれみ

「どんなヤツが潜んでいるんだろう・・・あれ？」

どれみはなんと、暁達とはぐれてしまった！

どれみ

「暁く〜ん！のんちゃ〜ん！」

どれみは叫び声をあげた。

しばらくすると、足音が聞こえてきた。

どれみ

「暁君？」

しかし、その足音は暁達ではなかった。

何人もの足音が、ガサガサとどれみの方に近づいてくる。

どれみ

「あ・・・あ・・・」

どれみは、怖くてしゃがみ込んだ。

・・・と、その時・・・

どれみ

「うぐっ!」

どれみは口を塞がれ、引きずり込まれた。

しかし、その引きずり込んだ主の顔を見て、どれみはホッとした。

どれみ

「暁君・・・のんちゃん・・・」

暁

「シッ!」

のぞみ

「黙って!」

暁とのぞみが、どれみを黙らせる。

しばらくすると、足音の主が姿を表した。

どれみ

「あ、赤い・・・」

その人物は、どれみによく似た女の子だった。

赤い服を着て目は緑色をしており、ポロンのような武器を2つ持っていて、彼女と同じ姿をした粘土人形を数人引き連れている。

のぞみ

「アイツは・・・秋風ソラミだわ・・・」

暁

「今から突撃した方がよくないかな？」

暁は、攻撃を仕掛けようとしたが、のぞみがそれをさえぎった。

のぞみ

「ダメよ、ほっといた方がいいわ。」

どれみ

「で、でも・・・」

のぞみ

「まあ、見てて・・・」

ソラミは、辺りをキョロキョロし始めた。

秋風ソラミ

「おかしい・・・さっきまで確かに、春風どれみの気配がしてたのに・・・もう遠くへ逃げたかな・・・ちくしょう！！ムカつく！！」

ソラミはそう叫ぶと、信じられない行動にでた。

なんと、自分の手下達に攻撃を始めたのだ。

どれみ

「な、な、な・・・」

暁

「どついつ事だ!？」

どれみと暁は、驚いている。

のぞみは2人を連れ、ソラミに気づかれないようにその場を立ち去った。

ソラミは、まだ手下に攻撃をし続けている。

もう、数十人の粘土人形が壊れていた。

ソラミ

「あゝ、ちくしょう!!」

ソラミが叫びながら手下を壊しまくっていると、そこに何者かが現れた。

「何やってるのよ、ソラミ・・・」

ソラミ

「ああ、ミヅキか・・・」

そこに現れたのは、ソラミの仲間の1人、林原ミヅキだった。

彼女は青い服とブルーヘアに、イエローの目をしている。

彼女も、自分と同じ姿をした粘土人形を数人引き連れていた。

林原ミヅキ

「ソラミ、あなたね、標的が見つからないからって手下を攻撃する

クセなおしなさいよ・・・」

ソラミ

「いいじゃない！いくらでも作れるんだから・・・」

ミヅキ

「あなたが暴走するたびに、私達があなたを止めなきゃいけないのよ？こっちの身にもなってよね！」

ソラミ

「ごめんなさい・・・ところで、収穫は？」

ミヅキ

「ここらを徘徊してる魔物数体に、私の魔法をかけて忠誠させたところよ・・・今頃、熱心に標的を探し回ってうるついているわ。捕まるのも時間の問題でしょ。」

ソラミ

「そう・・・じゃあ、行きましょ。」

ソラミとミヅキは、手下達を連れ、その場を後にした。

第03の呪文：旅行先は無人島！？伝説のお告げがある予感！！（後書き）

どれみ「大変な事になったね。」

はづき「なんだか、すごく強そうな敵だわ・・・」

あいこ「のんちゃん達やFLAT4もおる事やし、がんばらなな！
」！

おんぷ「次回には、敵の情報集がオマケにつくらしいわよ。」

ももこ「次回は「謎の敵！新たな刺客は危険すぎ！？」だよ！」

ほのか「次回もファイト一発やで！ほな、またな！フレムクフルク
うららかに〜！！」

第04の呪文：謎の敵！新たな刺客は危険すぎ！？（前書き）

ソラミ達の簡単な紹介

秋風ソラミは、もっともすばやく、手下を多く引き連れて狩猟する事を好むが、標的が見つからないと手下に対して攻撃するようになる。

林原ミヅキは、動きやすい小規模グループで行動する事を好み、追いかけるスリルを楽しむために標的を追いかける事で知られている。

容赦ない瀬能アイリは疲れを知らず、標的を追跡する上で、必要とあれば地獄の果てまで獲物を追いかける。

パワフルで短気な江川ソングは、じつくりと時間をかけて標的を探し出すよりも、全域を攻撃してしまう事を好む。

巨大で力強い朝香ナナコは、問題を解決する時はいつも力ずくであり、たいてい最後まで残って立ちほだかっている。

すばやくこうかつなソラミの妹秋風リップは、いつも追跡するもののすぐ後ろにいる。

第04の呪文：謎の敵！新たな刺客は危険すぎ！？

どれみ達がソラミ、ミヅキを発見した頃、あいこ、レオン、ほのかも1人の敵に遭遇していた。

ほのか

「フレムク〜フルク〜ファイアリ〜フォールン！アタシ達よ、透明になれ！！」

ほのかが呪文を唱えると、あいこ達の体は一瞬にして消えた。

あいこ

「ほのかちゃん、なんでアタシら、隠れてなきゃいけないの？」

レオン

「そうだよ、隠れるのはヤツらの方なのに！」

ほのか

「シッ、黙って！アイツは、ちょっと手ごわいヤツなんや……」

そして、そこに少女が現れた。

ブラックの髪型で、ライムグリーンの目をしている。

ポロンのような武器を2つ持ち、数人の手下を引き連れていた。

ほのか

「アイツは……瀬能アイリや……面倒なヤツが来たな……」

レオン

「どのぐらい面倒だ？」

ほのか

「見てればわかるわ。」

ほのかはそう言うと、小声で呪文を唱えた。

ほのか

「フレムクゝフルクゝファイアリゝフォールン！ラジコンカーよ、出てこゝい！！」

ほのかが呪文を唱えると、足下にラジコンカーが現れた。

ほのかはリモコンを持ち、操縦を始めた。

ブイイイイイイ！

瀬能アイリ

「！！」

アイリは、すぐにラジコンに気づいた。

アイリ

「手下達、追うわよ！」

そう言うと、アイリと手下達は走り出した。

その上から、あいこ達がホウキに乗って追跡する。

しばらく進んだ時、信じられない事が起きた。

アイリ

「パメルク〜ラルク〜ラリロリ〜ポップン！！雷よ、ラジコンを壊せ！！！」

アイリと粘土人形の一斉攻撃により、ラジコンはバラバラに大破した。

アイリは、手下を引き連れてその場を去った。

レオン

「な・・・なんてヤツらだ・・・」

ほのか

「ヤツは6人の魔女の中で、もっとも容赦なく、疲れ知らずなのよ。どこまでも獲物を追い続けるわ・・・」

だが、あいこはそれどころではなかった。

その瀬能アイリは、ありえない事をしたのである。

そう・・・

アイリが唱えた呪文は、あいことまったく同じ呪文だったのだ……
!!!!

その頃、おんぷ、トオル、りずむの3人は、江川ソングに遭遇していた。

といっても、りずむの声で空に逃げ、空から見ているだけなのだが、ソングはグリーンの髪に、赤い目をしていて、手下を数人引き連れていた。

りずむ
「アイツはかなり危ないヤツよ。空から見ていた方がいいわ。」

トオル
「なぜ？」

りずむ
「まあ、見えて……」

3人が見ていると、ソングはポロン型の武器を振り回し、呪文を唱えた。

江川ソング

「プゝルルンプルンファゝミファゝミファ―！！全域よ、燃えろ！！！」

ソングの呪文によって、森は一瞬のうちに焼き尽くされた。

トオル

「な、なんて火力なんだ……りずむちゃんが危険だって言った理由が、やっとわかったよ……」

りずむ

「そうよ……江川ソングは、標的をじつくりと追跡するよりも、その標的が隠れているであろう全域を破壊する性格なの。しかも、アイツの得意魔法はとんでもない威力だから、離れていた方がいいのよ……」

しかし、おんぷは開いた口が塞がらなかった。

トオル

「どうしたの、おんぷちゃん？」

おんぷ

「今、ソングが唱えた呪文って……私の呪文『プルルンプルンファミファミファ―』と同じじゃない！！」

トオル

「そういえば、そうだ……なぜ！？」

りずむ

「それは、みんなが集まってから説明する事になるでしょうね。とにかく、今は逃げるわよ！キゝラリンリルンラゝミラゝミラー！！」

アタシ達を、別荘に送って!!」

りずむの呪文で、おんぶ達は別荘にワープした。

一方、ももこ、ぽっぷ、ハナ、みすずは、朝香ナナコに遭遇していた。

ナナコはブラウンヘアに、青い目をしている。

朝香ナナコ

「やっと見つけたわ、逃がさないわよ!おとなしく捕まりなさい・・
」

みすず

「そうはいかないわよ!フェル〜タンフェットンファリラポン!
!火柱よ、上がれ!!」

みすずが呪文を唱えると、ナナコの目の前に火柱が上がった。

みすず

「これなら、コイツを少しの間足止めできる・・・」

しかし、ナナコはポロン型の武器を振り回し、前にかざした。

ナナコ

「ペル〜タンペットンパリラポン!!」

ももこ・ぽっぷ

「え！？」

ナナコ

「落雷よ、落ちろ！！」

ナナコの呪文で、落雷が落ちてきた。

みすず

「みんな、アタシのそばに来て！！フェル〜タンフェットンファラ
リラポン！！アタシ達を守って！！」

ドオオオオオオオン！！

ナナコ

「やったみたいね・・・」

ナナコは、手下を引き連れて去っていった。

ももこ

「ぽっぷちゃん、ハナちゃん、無事？」

ぽっぷ

「うん、アタシ達は無事・・・」

ハナ

「でも、みすずちゃんは・・・」

ももこ

「み、みすずちゃん!!」

みすずは、右手から大量に血を流していた。

ももこ

「みすずちゃん!!」

ももこは、みすずに駆け寄った。

みすず

「ぐう・・・少し・・・ムリをしすぎた・・・わ・・・」

そう言って、みすずはドサツと倒れた。

ぽっぷ

「どうしよう・・・」

ハナ

「ケガを治すのは禁断の魔法だし・・・」

ももこ

「じゃあ、マジヨリカ達に手当てしてもらおう!ペル〜タンペットンパラリラポン!私達を、別荘へ!!」

ももこの呪文で、4人は別荘に飛んだ。

その頃、はづき、フジオ、さつきは、秋風リップを発見し、追跡し

ていた。

リップはホワイトヘアに水色の目をしている。

さつき

「アイツは秋風リップよ。彼女は逃亡者の一步先を読む力があるのよ。つまり……」

フジオ

「彼女の目的を突き止めるには、彼女を尾行すればいいって事ですね。」

さつき

「そういう事よ。はづきちゃんもフジオ君も、はぐれないようについてきて!」

はづき達は、リップの追跡を続行した。

第04の呪文：謎の敵！新たな刺客は危険すぎ！？（後書き）

マジヨボルトとその弟子達

マジヨボルトの弟子とは、かつてマジヨリカの弟子だった6人の女の子の事である。邪悪な魔法ばかり扱っていたためにマジヨリカに破門され、その恨みから魔女界を滅ぼそうとたくらんだが、女王様と12人の元老院魔女達によって、長い間封印されていた。ところが、マジヨボルトの手によって、ついにその封印が解かれてしまう。

秋風ソラミ マジヨボルトの弟子の1人で、春風どれみと同じ呪文が使える。何事にもすばやく動き、恐れを知らない女の子。ソラミは手下の戦闘員と共に待ち伏せをして、相手が気づく前に標的を取り囲んでしまう。けれども標的が見つからないと、ソラミは戦闘員を攻撃しはじめてしまう。彼女の暴走を止めるために、ミヅキ達仲間が出動しなければならないほどののだ。ソラミの武器は「指令の魔法」で、これにやられると犠牲者は自分の意志を失い、魔法の効力がうつするまで数時間のあいだ、彼女にしたがうようになってしまう。妹にリップがいる。

林原ミヅキ マジヨボルトの弟子の1人で、藤原はづきと同じ呪文が使える。マジヨボルトの弟子達の中でももっともずるがしい女の子。ミヅキは手下の戦闘員と共に少数グループですばやく動きまわり、相手を追いかけまわすのを好む。ミヅキの使う「忠誠の魔法」は、犠牲者に働きかけ、熱心に敵を探し出して彼女に引き渡すようにしむけてしまう。

瀬能アイリ マジヨボルトの弟子の1人で、妹尾あいこと同じ呪文

が使える。アイリはマジョボルトの弟子達の中で、もっとも容赦なく疲れ知らずな女の子で、どこまでも標的を追い続ける。アイリの持つ「存在の魔法」にやられると、犠牲者はそうとは気づかぬまま、ずっと言動を彼女に監視されてしまう。

江川ソング マジョボルトの弟子の1人で、瀬川おんぶと同じ呪文が使える。他の仲間達とちがい、ソングは敵を追いかけまわすのがそれほど好きではない女の子らしい。捕まえないといけない相手がいれば、ソイツを捕まえるまで、その全域を破壊してしまうのだ。ソングの必殺武器「消去の魔法」は信じられないほど強力で、相手の頭脳を一時的に止めて、体が動くだけの状態にしてしまう。意識を失ったままさまよい歩く不幸な犠牲者の姿は、彼女や彼女の手下達の周りでよく見かけられる。

朝香ナナコ マジョボルトの弟子の1人で、飛鳥もこと同じ呪文が使える。ナナコは大きくて力が強く、動きもすばやい女の子だ。恐れ知らずで、無謀だという仲間もいる。戦いに真っ先に突入してきて、最後まで残っているのがナナコと彼女の手下達だ。ナナコの持つ「暗示の魔法」は、犠牲者に数時間にわたって暗示をかける事ができる。

秋風リップ マジョボルトの弟子の1人で、春風ぼつぷと同じ呪文が使える。ソラミの妹であり、彼女の自慢の女の子だ。リップは追跡をする時、不確定な要素を排除する。そして不思議な能力で逃亡者の一歩先を呼んで、先回りするのだ。リップの武器は「混乱の魔法」で、これ以上自分達の邪魔をしないよう、相手の時間と場所の観念を一時的に混乱させてしまう。今自分がどこにいて何をしているのかわからないまま、辺りをさまよい歩く犠牲者を見かける事は、彼女の周りではけっしてめずらしくないのだ。

のぞみ

「今回は、アタシ達がレポートします!」

さつき

「さすがに、敵は強そうね・・・」

ほか

「でも、アタシらは負けへんで!」

みずず

「次回は「大ピンチ!」奪われたどれみ達の魔法!」だよ!」

りずむ

「次回もお楽しみにね!キラリンリルンつややかに!」

第05の呪文：大ピンチ！！奪われたどれみ達の魔法！！

敵である秋風リップを発見したはづき、さつき、フジオは、彼女を追跡していた。

リップはさつきから、キョロキョロと辺りを見回している。

はづき

「さつきちゃん。彼女、私達の尾行に気づいたのかしら？」

木に隠れながら、はづきが小声でさつきに話しかける。

さつき

「そんな事はないはずよ。今はアタシがかけた魔法で、足音を消してある。大声でも出さない限り、彼女には見つからないはずだわ。」

その時、はづきとフジオの肩に何かが落ちてきた。

モゾモゾ・・・

フジオ

「でええゝ！？」

はづき

「ケ、ケムシゝー！！」

さつき

「はづきちゃん、フジオ君ダメ！！大声を出しちゃ・・・」

秋風リップ

「わかってるわよ、そこにいる事は!!」

いつのまにか、リップが振り向いていた。

さつき

「あっちゃっ……やっぱり見つかったよぉ……」

リップ

「藤原はづき、フジオ、そして京極さつきね？あなた達を見つけしだい、捕まえるとのこと命令よ。覚悟しなさい。」

さつき

「ちえっ……こうなったら、戦うしかないようね……」

そう言うと、さつきはポロンを取り出した。

リップ

「あら、アタシとやる気？」

さつき

「勝負よ、秋風リップ!!」

リップ

「望むところよ、京極さつき!!」

さつきとリップはポロンをかざし、身構えた。

さつきはポロンを左手に持ち代えると、呪文を唱えた。

さつき

「ライライロ～ンフォイリ～ラリ～ラフー！！薬夾体よ、出てこい！！」

さつきが呪文を唱えると、薬夾体（棒型の武器の事を指す）が出現した。

さつき

「ライライロ～ンフォイリ～ラリ～ラフー！！薬夾体よ、放て！！」

ドドドドン！！

しかし、リップは表情を変えない。

リップ

「ピピット～プ～リット～プリタ～ンペ～ペルト！！カービング・フリーズ『氷の光線』！！！！」

ビュオオオ！！

リップ

「こんなつまらん技、簡単に相殺してやる！！」

さつき

「薬夾体よ、弾けなさい！！」

バツ！！

さつきが右手の握りを解放すると、薬夾体が次々と弾けた。

ドバババババン！！

リップ

「何！？」

バゴン！

ドゴン！

ドカン！

さつき

「ぐっ！！（彼女の魔法、死んでない！！突き抜けてくる！？）」

はづき

「まずいわ！フジオ君！！2人でさつきちゃんをサポートよ！！」

フジオ

「ええ！！」

はづき

「パイパイポーンパイプーンワプーンワプー！！炎の盾よ、出て！！」

ゴフオオオ！！

フジオ

「はづきちゃんの盾よ、強化せよ！！」

バシュン！！

ドゴオ！

はづき

「な！？」

フジオ

「くっ．．．！！」

ドシャアアア！！

さつき

「大丈夫？」

はづき

「な、なんとか．．．」

フジオ

「くそっ、炎の力が段違いだ．．．」

ツー．．．

リップ

「ちっ．．．アタシの顔に傷をつけるとは．．．やるわね、あなた達．．．」

はづき

「そ、そんな！！」

フジオ

「あれだけの攻撃を受けて、ダメージはあれだけか！？」

リップ

「今度はこっちの番よ・・・ピピット～プ～リット～プリターンペ
～ペルト！！超巨大・氷放射！！！」

ビュゴオオオオ！！！！

さつき

「ヤバイ！あの魔法、彼女の最大魔法だわ！！！」

フジオ

「マジカルステージで協力して、弾くんです！！！」

はづき

「パイパイポ～ンポイしなやかに～・・・」

さつき

「ライライロ～ンフォイしとやかに～・・・」

フジオ

「強固な盾よ、出でよ！！！！！」

ゴン！！！！

ドン！！

はづき

「く・・・」

さつき

「あ．．．」

ドシャアアア！

リップ

「フー．．．」

はづき

「さつきちゃん！！」

さつき

「ぐ．．．ああ．．．」

リップ

「さつきは倒れた．．．終わりよ！！」

フジオ

「ぐ．．．」

その時、空から呪文が聞こえた。

のぞみ

「パウラピ〜ラルペル〜ペルパ〜ウピウレ！．．霧よ、はづきちゃん達を隠して！．．！」

シューウウウ．．．

リップ

「ぐ．．．」

シュワァァ・・・

リップ

「いない・・・逃げたか・・・まあ、最初の目的は達成したわ・・・マナちゃんに報告に行きましょうか。」

そう言うと、リップは杖をひと振りし、シュンツと消えた。

第05の呪文：大ピンチ！！奪われたどれみ達の魔法！！（後書き）

のぞみ「今回も、アタシ達がリポートします！！それにしても、ソラミ達の使った呪文には驚いたわね！！」

さつき「ええ、どれみちゃん達と同じ呪文を持っていたなんて、驚きだわ。」

ほのか「なんかヤバい感じやけど、絶対にマジョボルトは倒すでえ！！」

りずむ「今回は「恐ろしい魔女、マナ！！」よ！！」

みすず「次回も必ず見てね！フェル〜タンフェットンあざやかに！！」

第06の呪文：恐ろしい魔女、マナ！！

別荘では、さつきとみすずの治療が行われていた。

ほのか

「フレムク〜フルク〜ファイアリ〜フォールン！包帯よ、出てこい！！！」

ボウン！！

りずむ

「キ〜ラリンリルンラ〜ミラ〜ミラー！包帯よ、さつきちゃんの体に巻き付け！！！」

シュルシュルシュル・・・

のぞみ

「パウラピ〜ラルペル〜ペルパウ〜ピウレ！包帯よ、みすずちゃんの体に巻き付いて！！！」

シュルシュルシュル・・・

マジヨリカ

「これですばらく安静にしておれば、よくなるじゃろう・・・」

マジヨルカ

「魔法でケガを直せん以上、包帯などだけでも魔法で出さねばならんからな。」

ぽっぷ

「さつきちゃんとみすずちゃん、大丈夫かな・・・」

フジオ

「微妙なトコですね。」

トオル

「でもさ、なんか疑問が残らないか？」

レオン

「ホワイ？なぜ？」

暁

「なぜその侵入者達は、逃げるさつきちゃん達やみすずちゃん達を追わなかったのか・・・だろ？」

トオル

「ああ。」

りずむ

「おそらく、一度アタシ達に大ダメージを与えて弱らせるのが、第一の目的だった・・・そう考えれば、つじつまがあうわ。」

のぞみ

「なるほどね・・・真綿でジワジワと首を絞めるように、少しずつ苦しめていこうって腹かしら・・・」

ほのか

「卑怯な事を考えるもんやな・・・」

りずむ

「どれみちゃん達7人は、この別荘から動いちゃダメよ。」

どれみ

「な、なんで!？」

あいこ

「大勢で出ていったところで、ヤツらの思っッボや・・・」

おんぷ

「のぞみちゃん達は、私達の事を心配して言ってくれているのよ。」

はづき

「どれみちゃん、ここは先輩であるのぞみちゃん達の命令に従いましょう。」

ぽっぷ

「お姉ちゃん!」

どれみ

「わかった・・・のぞみちゃん達に任せるよ・・・だけど・・・絶対に・・・やられないでね。」

のぞみ

「ええ。」

ほのか

「任しとき!」

りずむ

「本当にヤバくなった時は、助けに来てって合図を送るわ。」

のぞみ

「じゃあ、ほのか、りずむ。行くわよ。」

ほのか・りずむ

「了解！」

バシユン！！

マナ

「マジョボルト様の言う通りだわ・・・ヤツら、3人だけでアタシ達に勝負を挑む気・・・クッククック・・・無謀ね・・・」

キュイイイ・・・

マナ

「秋風ソラミ、林原ミヅキ、瀬能アイリ、江川ソング、朝香ナナコ、秋風リップ！聞こえる？和久のぞみ、風戸ほのか、初音りずむが別荘を出たわ。2人1組になって、彼女達を迎え撃つのよ！！」

ソラミ・ミヅキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ

「ラジャー！！」

マナ

「クッククック・・・おもしろくなってきたわ・・・」

和久のぞみVS秋風ソラミ&秋風リップ

のぞみ

「出たわね・・・秋風姉妹・・・ここで会ったが百年目・・・勝負よ!!」

ソラミ・リップ

「フフフ・・・望むところよ・・・」

風戸ほのかVS林原ミヅキ&瀬能アイリ

ほのか

「さつきちゃんの仇、とらしてもらおうで・・・」

ミヅキ

「クックククツ・・・」

アイリ

「かかってきなさい・・・」

さつき

「アタシはまだ死んでません!!」

初音りずむVS江川ソング&朝香ナナコ

りずむ

「あなた達が何を企んでるかは知らないけど・・・悪人を野放しに
はできない・・・覚悟しなさい!!」

ソング

「フン・・・」

ナナコ

「あとで後悔すんなよ?」

ソラミ

「ピ〜リカピリラポポリナペペルト!!」

リップ

「ピピット〜プ〜リット〜プリタ〜ンペ〜ペルト!!」

ソラミ・リップ

「ブツク・キルよ、出てこい!!」

ドバアアアア!!

ソラミ・リップ

「殺れえ!!」

ブツク・キル『ガアアア!!』

ガバア!!

のぞみ

「パウラピ〜ラルペル〜ペルパウ〜ピウレ!! ウィンディ・スプラ
ツシュ『四方八方の風柱』!!!!」

ドドドドドン!!!!

ボシュアアア!!

ソラミ

「な!？」

リップ

「一瞬で消え去った!？」

のぞみ

「今度はこっちの番よ!! パウラピ〜ラルペル〜ペルパウ〜ピウレ
!! 風神雷神・怒りの風雷波!!!!」

ドシャアアアン！！！！

ソラミ・リップ

「キャアアアア！！」

のぞみ

「終わりね。」

バシュン！！

ミヅキ

「パイパイポーンポイプーンワプーンワプーン！！立て、氷柱！！」

ドン！

アイリ

「パメルクーンラルクーンラリロリーンポップン！！落ちよ、水柱！！」

ドン！

ミヅキ・アイリ

「行け！！」

ドドン！！

ほのか

「ウチもナメられたもんやな・・・フレムクゝフルクゝファイアリゝフォールン!!!ファイアリブルーム『熱風のホウキ』よ、出でよ!!!」

バシッ!

ほのか

「ハアアッ!!!」

ズバアアアン!!!

ミヅキ

「ウソ!?!」

アイリ

「効いてない!!!」

ほのか

「とどめや!!!」

ドンッ!!!

ほのか

「フレムクゝフルクゝファイアリゝフォールン!—打粉碎に怒喝の心力を込め、万物を叩き割る剛剣の刃を生み出さん!!!」

ドカカカカ!!!

ほのか

「ヴァン・バギヤム・ソルドオン!!!!!!」

ザガアアアア！！！

ミヅキ・アイリ

「キャアアアア！！」

ブスス・・・ブスブス・・・

ほのか

「ゆっくり眠つとけ！！」

バシュン！！

ソング

「ハアハア、ハア・・・」

ナナコ

「ぜんぜん歯が立たない・・・」

りずむ

「キ～ラリンリルンラ～ミラ～ミラー！！冷気の風よ、ソングとナナコを凍らせろ！！！」

ビュゴオオオオ！！

ソング・ナナコ

「キャアアアア・・・！！！」

ガキイイン！！

りずむ

「しばらくそこで頭を冷やしなさい！！」

バシユン！！

のぞみ、ほのか、りずむは、空中で合流した。

のぞみ

「ほのか、りずむ！！倒せたみたいね！」

ほのか

「楽勝やったで！」

りずむ

「準備運動にもならなかったわね。これなら、魔女見習い試験の方がまだ歯ごたえあったわ。」

のぞみ

「ハハ・・・言うわねえ。」

「クツクツクツ・・・ソラミちゃん達を倒しただけで、調子に乗ってるようねえ・・・」

のぞみ

「え!？」

ほか

「だ、誰や!？」

りずむ

「どこにいるの!？」

マナ

「ポゝロリンピュアリゝンハナハナゝピー!!触手よ、3人を縛り上げる!!」

シュルルルル・・・

のぞみ

「ああっ!!」

ギユルルルル・・・

ほか

「し、しもたっ!!」

グルグルグル・・・

りずむ

「動けな・・・い・・・」

マナ

「捕まえたわよ。和久のぞみ、風戸ほか、初音りずむ・・・」

のぞみ

「うぐうう・・・!!」

ほのか

「苦し・・・い・・・」

りずむ

「た、助けて・・・」

マナ

「アッハッハッハ!!」

第06の呪文：恐ろしい魔女、マナ！！（後書き）

のぞみ「今回は、このアタシ、和久のぞみがリポートします。久しぶりの更新で、覚えてない方もいるのではないのでしょうか。さてさて、さっそく大ピンチになってしまったアタシ達3人！正直言つて、少し油断してましたね・・・まあ、まだ魔女見習いですし、多少の失敗はありますが、マジョボルト達は必ずやっつけますので、皆さん応援の方よろしくお願いします！次回、おジャ魔女どれみドッカ〜ン！『絶体絶命！？死なないで、FLAT4！！』ピュアピュアドリーム、デッかくそ〜だて！！」

今回のリポーター：和久のぞみ

声：林原めぐみ

第07の呪文：絶体絶命！？死なないで、FLAT4！！

のぞみ、ほのか、りずむの3人は、マナが出した触手に捕まり、締め上げられていた。

ギリギリギリ・・・

のぞみ

「ああっ・・・！！！」

ほのか

「く・・・苦し・・・い・・・！！！」

りずむ

「誰か・・・助け・・・て・・・！！！」

パチッ・・・

さつき

「・・・！！！」

みすず

「ん・・・」

ムク・・・

どれみ

「ダメだよさつきちゃん、みすずちゃん、寝てなくちゃ・・・」

さつき

「そうもいかないのよ!」

みすず

「今、のぞみちゃん達からSOSの信号が届いたの・・・」

どれみ

「ええ!？」

はづき

「じゃあ、3人ともやられたの!？」

さつき

「今はまだ、無事みたい・・・」

みすず

「触手らしきものに巻かれて、締め上げられてる・・・」

ぽっぷ

「お姉ちゃん、助けに行かなきゃ!」

どれみ

「そうね!」

暁

「ボク達も行きます!」

あいこ

「ほなら、行こか!!」

マナ

「フッフッフ・・・いくらあなた達でも、3人だけじゃアタシの魔力には勝てないようね。」

のぞみ

「バ、バカね・・・アタシ達3人だけだとも思ってるの?」

マナ

「何!？」

どれみ

「ピリカピリラポポリナペペルト!!」

はづき

「パイパイポーンポイプゥワプゥワプー!!」

あいこ

「パメルクゥラルクゥラリロリゥポップン!!」

おんぷ

「プゥルルンプルンファゥミファゥミファァー!!」

ももこ

「ペルゥタンペットンパラリラポン!!」

ぽっぷ

「ピピット〜プ〜リット〜プリタ〜ンペ〜ペルト!!」

ハナ

「ポ〜ロリンピュアリ〜ンハナハナ〜ピー!!」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ・ハナ
「のぞみちゃん達を・・・助けて!!」

どれみ達が放った魔法が、のぞみ達を救い出した。

あいこ

「これで形勢逆転やな!!」

おんぷ

「さあ、覚悟しなさい!!」

マナ

「それはどうかしら？ポ〜ロリンピュアリ〜ンハナハナ〜ピー!!
巨大なカエルよ、出てこい!!」

マナの魔法で、巨大なカエルが出てきた。

マナ

「さあ、あの子達を襲いなさい!!」

『シャ〜!!』

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ・ハナ
「キ、キャ〜ッ!!」

どれみ達は、方々へ逃げ出した。

のぞみ達も、後を追う。

マナ

「フフフ・・・逃げられると思わないでよ。」

まず真っ先に追いつかれたのは、どれみとはづきだった。

『シャ〜!〜!』

カエルは、巨大な舌を伸ばしてくる。

どれみ

「わ、わ、わ!〜!」

どれみは必死に避けた。

はづき

「どれみちゃん、後ろ!〜!」

どれみ

「え?」

カエルが、巨大な球を放ってきた。

どれみ

「キャアッ!〜!」

ドオン！

どれみのホウキが破壊された。

どれみは、真つ逆さまに落ちていく。

はづき

「どれみちゃん！！」

はづきは急降下し、どれみを受け止めた。

はづき

「どれみちゃん、大丈夫？」

どれみ

「はづきちゃん、ありがと・・・」

ニユルルルル！！

どれみ・はづき

「！！！」

グルグルグルグル！！

どれみ・はづき

「キャアアアア！！！」

どれみとはづきは、カエルの舌に巻きつかれた。

どれみ・はづき
「ううっ・・・」

パクッ！

ゴクン！

どれみとはづきは、カエルに飲み込まれてしまった。

その後、あいこ、ももこ、ぽっぷ、ハナと次々に捕まった。

おんぷも最後まで魔法で応戦したが、けっきょく飲み込まれてしまった。

そしてどれみ達は、カエルの腹の中で舌に巻かれ、締め上げられていた。

ソラミ

「アタシ達の出番だよ。」

ミヅキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ
「オーケーー！！」

ソラミ達は、カエルを攻撃しようとしていた。

暁

「そうはさせませんよー!!」

暁達4人が、ソラミ達の前に立ちはだかった。

ソラミ

「フン・・・FLAT4か・・・」

その頃、さつきとみすずは、のぞみ達と合流した。

みすず

「ハ、やっと追いついた・・・」

さつき

「のぞみちゃん、どれみ達ちゃんがピンチだわ。」

のぞみ

「どれみちゃん達を助けるには、あれが必要だわ。」

ほのか

「久しぶりにやるか!」

りずむ

「腕が鳴るわね。」

ソラミ達6人と、FLAT4の4人が向き合っていた。

ソラミ

「ピリカピリララ憎らかに……」

ミヅキ

「パイパイポインポイ荒らかに……」

アイリ

「パメルクラルク暗らかに……」

ソング

「プルルンプルン冷やかに……」

ナナコ

「ペルタンペットン安らかに……」

リップ

「ピピットプリット醜くやかに……」

ソラミ・ミヅキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ

「ダークネス・マジカルステージ!!」

ソラミ達6人が、暗黒の輝きを放った。

暁

「パプリルパプリラパプラルガ!!」

フジオ

「オーレリオーレラオーラルガ!!」

レオン

「イエロルイエロライエーガー!!」

トオル

「グリーリグリールグリラルガ!!」

暁・フジオ・レオン・トオル

「ウィッチ・ファンタジア!!」

暁達4人の体が、光の輝きを放つ。

ソラミ・ミヅキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ

「カエルを爆破せよ!!!」

暁・フジオ・レオン・トオル

「どれみちゃん達を・・・守れ!!!」

2つの魔法は激しくぶつかり合い、カエルが爆発した瞬間、ソラミ達の魔法が消えた。

フシュウウウ・・・

ソラミ

「そ、そんな・・・」

ミヅキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ

「アタシ達の魔法が・・・負けた・・・」

どれみ達7人が、真つ逆さまに落ちてきた。

FLAT4の4人が、それを受け止める。

どれみ

「あ、暁君・・・」

暁

「どれみちゃん、大丈夫か？」

どれみ

「う、うん・・・」

はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ・ハナ
「大丈夫・・・」

暁

「そ、そうですね・・・」

フジオ・レオン・トオル

「よかつ・・・た・・・」

ドサツ・・・

暁達は倒れた。

どれみ

「ど、どうしたの暁君!？」

はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ・ハナ
「しっかりしてー!!」

マナ

「魔法を使いすぎたのよ・・・」

どれみ達が上を見上げると、マナが現れていた。

マナ

「ソラミ・・・あなた達、何をやってるの？」

ソラミ・ミヅキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ

「ギク・・・!!」

マナ

「こんなヤツらすら倒せないとは・・・恥を知らなさい!!」

ソラミ・ミヅキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ

「も、申し訳ありません!!」

マナ

「でもまあ、あの子達はもう動けないみたいだし・・・」

マナはFLAT4を見ると、クククと笑った。

マナ

「あなた達、終わりね・・・」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ・ハナ

「くっ・・・」

「まだ終わってない!!」

マナ

「な、何!？」

のぞみ達5人が、そこに現れた。

のぞみ

「どれみちゃん達を苦しめた罪・・・」

さつき・ほのか・りずむ・みすず

「この場で償ってもらいます!!」

のぞみ達5人は、ポロンをかまえた。

のぞみ

「パウラ〜ピラルペ〜ル静やかに〜・・・」

さつき

「ライライロ〜ンフォイしとやかに〜・・・」

ほのか

「フレムク〜フルク〜麗らかに〜・・・」

りずむ

「キ〜ラリンリルン艶やかに〜・・・」

みすず

「フェル〜タンフェットン鮮やかに〜・・・」

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず

「ミラクルステージ!!」

のぞみ達5人の体が、7色に輝きだした。

カアアアア・・・

マナ

「ヤ、ヤバ・・・」

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず

「マナ達7人を・・・懲らしめて!!」

強烈な魔法が、マナ達に向かって放たれた。

マナ

「チイツ・・・このままで済むと思わないでよ!!」

マナはそう言うと、ソラミ達と共に消えた。

どれみ

「ああっ!!」

はづき

「逃げられちゃった・・・」

あいこ

「もうちょいやったのに!!」

おんぷ

「それにしても、スゴい魔力だったわね・・・」

ぽっぷ・ハナ

「うんうん・・・」

ももこ

「あれ？どうしたの？のぞみちゃん達・・・」

のぞみ

「どれみちゃん達・・・」

さつき・ほのか・りずむ・みすず

「アタシ達・・・みんなに話さなければいけない事があるの・・・」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ・ハナ

「話さなければいけない事？」

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず

「うん・・・続きは別荘で・・・」

第07の呪文：絶体絶命！？死なないで、FLAT4！！（後書き）

さつき「どうも皆さん、京極さつきです。今回は、アタシがリポーターを勤めさせていただきます！それにしても、マナもソラミ達6人も、恐ろしい魔力の持ち主達ですね。FLAT4の4人をあそこまで追いつめてしまうなんて・・・間一髪助かりましたけど、アタシ達にはまだまだ危険が降り懸かりそうです。がんばりますので、皆さん応援してくださいね！次回、おジャ魔女どれみドツッコン！『ソラミ達の秘密！危険すぎた魔女見習い達！！』！！観ないと、お仕置きしちやいますよー！！」

今回のリポーター：京極さつき

声：岩井由希子

第08の呪文：ソラミ達の秘密！危険すぎた魔女見習い達！！

別荘にたどり着いたどれみ達は、FLAT4の4人をベッドに運び込んだ。

マジョルカ

「今魔女界に連絡して、マジョハートが来てくれる事になったぞ！」

あいこ

「そうか・・・」

ハナ

「暁君達、大丈夫かな・・・」

マジョリカ

「大丈夫じゃよ！少し魔法を使いすぎたんじゃ。安静にすれば、すぐによくなる。」

はづき

「そう、よかった・・・」

ももこ

「無事で何よりだよ！」

おんぷ

「そういえばのぞみちゃん達、話があるって言ってたよね？」

のぞみ

「あ、うん・・・」

どれみ

「よければ、ここで話してくれない？」

さつき

「わかったわ。」

ほのか

「マジヨリカ達は、奥に行つといて！」

マジヨリカ

「うむ、わかった。」

マジヨリカ、マジヨルカ、ララ、へへ、ババは奥に消えていった。

りずむ

「それじゃ、そろそろ話しましょうか・・・」

みすず

「ソラミ達6人の、恐ろしい秘密を・・・」

シュツシュツ！

のぞみ

「プリティーウィッチーのぞみっちー！パウラ〜ピラルペ〜ルペル
パ〜ウピウレ！！人数分の座布団よ、出てこい！！」

ボウン！

のぞみが魔法を使うと、12人分の座布団が現れた。

のぞみ

「さ、みんな、座って。」

どれみ達は、座布団に座った。

のぞみ

「それでは、今からソラミ達の秘密を語るわ。みんな、心して聞いてね・・・」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ・ハナ

「ゴクッ・・・」

のぞみ

「すべての始まりは、2年前までさかのぼるわ・・・どれみちゃん達がハナちゃんを無事に1年間育て上げ、魔女界にハナちゃんを帰し、一時普通の小学生に戻った頃・・・」

さつき

「アタシ達6人は魔女界のある地域で、死闘の真っ最中だったわ・・・」

どれみ

「ろ、6人って・・・」

はづき

「もう1人いたの？」

ほのか

「そや。」

あいこ

「けど、この場にはおらんな？」

りずむ

「それにも、ちゃんと理由があるのよ・・・」

みすず

「アタシ達は、危険な毒グモの魔物、ヴィゾラックに襲われたの。」

おんぷ

「ヴィゾラック！？」

ハナ

「その名前なら、園長先生のマジヨミラーから聞いた事がある・・・
いくつもの魔女界を破壊しながら、さまざまな魔物や魔獣を恐れさせ、逃げ惑わせる怪物が昔、魔女界の南の地域にいたって話を・・・」

さつき

「ええ、それがヴィゾラックよ。」

りずむ

「別名は『命を盗む者』・・・」

ほのか

「彼らの繭に捕らえられると、運の良い者は永遠に繭の中で眠り続ける・・・」

みすず

「しかし運の悪い者は彼らの毒を体に打たれ・・・」

さつき

「見るも無惨な姿で出てくるといわれているわ。」

ももこ

「それで、のぞみちゃん達は一度その犠牲に？」

のぞみ

「そうよ。アタシ自身の自惚れ（うぬぼれ）のせいで、アタシ達はそこに着くなり、彼らに捕まってしまった。そして繭の中に閉じ込められ、ヴィゾラックの毒を打たれて、半分魔女で半分野獣のマジヨゴディカに変貌してしまったのよ・・・6人のマザガが死の淵から救ってくれなければ、アタシ達の命はそこで尽きていたでしょう。死んだ方がマシだ・・・アタシ達の中にはそう思う者もいたわ。でもアタシ達は彼らの助けを借りて解毒の知識を持つシートングという魔物を探し出し、無事元の姿に戻る事ができた。そこまではよかったのよ・・・」

さつき

「ところが、アタシ達が魔女界に戻ってきた途端、とんでもない事が起きていたわ・・・」

ほのか

「あまりに危険すぎて、マジヨリカから破門された魔女見習い・・・秋風ソラミ達が、魔女界に舞い戻ってきたんや!!」

ぽっぷ

「ええっ！？アイツら、元々はマジヨリカの弟子だったの!？」

りずむ

「そうよ。マジヨリカの下で、修行を続けていた魔女見習いだっ
たのよ。」

ももこ

「でも、それがなんで破門されたの？」

みすず

「危険な魔法ばかり使うからよ。人の心を操る禁断の魔法さえ、平
気で使っていたわ。」

のぞみ

「それで、彼女達をこのままにしておけないと考えたマジヨリカは、
彼女達を追放し・・・二度と魔女界に戻れないようにしたはずだっ
た・・・」

さつき

「しかし、甘かった。彼女達は6人で手を組み、邪悪なマジカルス
テージを放って、門を壊してしまったの。」

ほのか

「ほんで、ウチらは戦いに駆り出された・・・」

ソラミ・ミツキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ
「ハアハア、ハアハア・・・」

のぞみ

「ついに追い詰めたわ・・・みんな、行くわよ!!」

さつき・ほのか・りずむ・みすず・夜空星美

「はい!!」

ソラミ

「くっ・・・ここままで済むと思うな!!」

ソラミ・ミツキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ

「ダークネス・マジカルステージ!!のぞみを眠らせろ!!」

ドシュッ!!

のぞみ

「!!」

さつき

「のぞみ!!」

ほのか

「アカン!!」

りずむ

「もう・・・」

みすず

「間に合わない!!」

のぞみ

「くっ・・・」

星美

「危ない、のぞみ！！！」

ドオン！！

のぞみ

「星美！！星美しっかりして！！」

星美

「う・・・」

のぞみ

「星美・・・もう、許さない！！」

バシイイイイン！！！！

ソラミ・ミヅキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ

「キャアアア！！」

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず

「ミラクルステージ！！！」

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず・マジョドン・マジョサ
リバン・マジョリード・マジョバナラ・マジョスローン・マジョハ
ート・マジョミラー・マジョプリマ・マジョライト・マジョハーブ・
マジョニン・マジョスラー・マジョリン・魔女界の女王様『ソラミ
達6人を・・・封印せよ！！！！』

ボシューウウウウウ・・・

のぞみ

「アタシ達は星美の犠牲と引き替えに、ソラミ達を封印した・・・あれで、すべて終わったはずだったのに・・・」

どれみ

「それで、その夜空星美さんは・・・どうしてるの？」

さつき

「永遠の眠りにっているわ・・・」

はづき

「そ、そんな・・・」

あいこ

「解く方法はないの？」

ほのか

「2つしかあらへん・・・」

りずむ

「呪いをかけた本人が解くか・・・」

みすず

「術者自身を殺すかのどちらかよ。」

おんぷ

「封印した時に、呪いは解けなかったの？」

のぞみ

「無理だったのよ。アタシ達は6人そろって、初めて強力なミラクルステージを使う事ができる・・・」

さつき

「その上、元老院の魔女達もみんな魔力と体力を消耗して、魔法が使えなかったのよ・・・」

ほのか

「ウチらが彼女達を倒すチャンスは、もう残り少ない・・・」

りずむ

「今年のうちに彼女達を倒さないと、星美は永遠に眠り続ける事になるわ・・・」

みすず

「本当は、去年のうちにケリをつけたかったんだけど、どれみちゃん達やハナちゃんの事もあって、アタシ達は今年まで待つ事にしたの・・・」

ももこ

「だから最初、元老院魔女達は反対してたんだ・・・」

のぞみ

「この話はここまで。そろそろFLAT4も目覚める頃よね。」

第08の呪文：ソラミ達の秘密！危険すぎた魔女見習い達！！（後書き）

りずむ「こんにちは、皆さん。魔女界のトップアイドル、初音りずむです。テヘツ、今回は、アタシがリポートを勤めます！ついに判明したソラミ達の秘密！アタシ達は彼女達をなんとしても倒さなければいけません！！そうしなければ、大切な仲間が永遠の眠りにつかされてしまうのですから・・・ソラミ達はかなり強いし、マナやマジョボルトもいて大変だけど、アタシ達は必ず彼女達を倒し、お友達を救ってみせます！！次回、おジャ魔女どれみドツカ〜ン！！」
見えてきた！ソラミ達の目的と野望！！」アタシ達を応援してくださいね！！」

今回のリポーター：初音りずむ

声：折笠愛

第09の呪文：見えてきた！ソラミ達の目的と野望！！

のぞみ達が話を終えた頃、FLAT4の4人が目を開けた。

暁

「う・・・」

フジオ

「どうやら、無事みたいですね・・・」

レオン

「しぶといね、ボク達も・・・」

トオル

「ま、簡単にくたばってしまっても困るけどね。」

マジョハート

「それくらいの憎まれ口が叩けるなら、もう大丈夫だろう・・・」

暁

「マジョハート先生ですか？」

マジョハート

「うむ、そうだ。」

フジオ

「わざわざ診ていただいて、ありがとうございます。」

マジョハート

「なに、困った時はお互い様だ。どれみ達が心配している、安心させに行ってやれ。」

フジオ、レオン、トオルの3人は、ベッドから降りると、部屋を出た。

しかし、暁は動かない。

マジョハート

「どうした、オマエは行かないのか？」

暁

「マジョハート先生・・・ボク、マジョハート先生経由で女王様に伝えてほしい事があるんです。」

マジョハート

「なんだ？」

暁

「魔法使い界の王様が、魔女界の先代の女王様との賭ポーカーに負けて、魔法使い界が衰退したのはご存じですよね？」

マジョハート

「ああ。」

暁

「ですが、原因はそれだけではないんです。」

マジョハート

「な、何！？」

暁

「その後、魔法使い界に5人の魔女が侵入し、魔法使い界で戦争が起きたのです・・・」

マジョハート

「じゃあ、その時の魔女が・・・」

暁

「ええ・・・秋風、林原、瀬能、江川、朝香・・・ソラミ達の先祖です・・・」

マジョハート

「な、なんという事だ・・・」

3時間後・・・

どれみ

「暁君達、無事で何よりだよ!」

暁

「心配かけたね、どれみちゃん。」

その時、薄桃色の鳥が入ってきた。

ボウン！

どれみ達の前に、マジヨリンが現れた。

はづき

「マジヨリンさん！」

あいこ

「そういや、この別荘って魔女界の所有物やったっけ・・・」

おんぷ

「マジヨリンさん、どうしたんですか？」

マジヨリン

「どれみちゃん達、女王様が魔女界でお待ちです。」

どれみ

「あーっ！！」

ももこ

「どうしたの、どれみちゃん？」

どれみ

「確か女王様に会う時は、謁見用のマントがいるじゃない！」

はづき

「そうだった！」

あいこ

「アタシら、マントもうないで！」

おんぷ

「どうしよう!?!」

のぞみ

「心配ご無用!さつき、ほのか、りずむ、みすず!—いくわよ!—!」

さつき・ほのか・りずむ・みすず

「うん!—!」

のぞみ

「パウラ〜ピラルペ〜ル静やかに〜・・・」

さつき

「ライライロ〜ンフォイしとやかに〜・・・」

ほのか

「フレムク〜フルク〜麗らかに〜・・・」

りずむ

「キ〜ラリンリルン艶やかに〜・・・」

みすず

「フェル〜タンフェットン鮮やかに〜・・・」

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず

「ミラクルステージ!—どれみちゃん達とアタシ達に謁見用マントを出して!—!—!」

のぞみ達がミラクルステージを使うと、どれみ達7人とのぞみ達5人に謁見用マントがかぶさった。

どれみ

「じゃあみんな、行くよ!！」

はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぼっぷ・ハナ・のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず

「うん!！」

魔女界

魔女界の女王様『よく来てくださいましたね、皆さん。実は今回皆さんをお呼びしたのは、魔女界にマジョボルトが帰ってきたからなのです・・・』

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぼっぷ・ハナ・のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず

「なんですって!？」

マジョリン

「マジョボルトは相棒のマナ、手下達6人を連れて現れ、『人間界に不幸をもたらしてやる』と告げ、去っていったのです・・・」

どれみ

「そんな事したら・・・」

はづき

「ますます人間界と魔女界の交流が途絶えてしまっわ!!」

あいこ

「許されへんな!!」

おんぷ

「そんな事、絶対にさせません!!」

ももこ

「必ず、マジョボルト達を倒してみせます!!」

魔女界の女王様『ありがとう、皆さん・・・ではマジョリン、例の物を。』

マジョリン

「かしこまりました。」

マジョリンの持ってきた物は、どれみ達には見覚えのある物だった。

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ・ハナ

「えっ？パティシエ・インカム・・・？」

魔女界の女王様『これはパティシエ・インカムに改良を加えた、P
robation Incomeです。』

さつき

「りずむちゃん、英語得意だね？どっという意味？」

りずむ

「確か、『見習い』って意味があつたはずよ。」

魔女界の女王様「そうです。そしてこれを使うと、離れていてもお
ジャ魔女同士で話ができるのです。」

のぞみ

「でも、相手も変身してないと使えないんでしょうか？」

魔女界の女王様「心配いりません。タップが震えてわかるようにな
っています。」

ほのか

「携帯のバイブみたいや・・・」

魔女界の女王様「これで皆さんいつでも連絡を取り合つて、頑張つ
て下さい。マジョボルト達は、いつどこからあなた達を狙ってくる
かわかりません。くれぐれも、警戒をおこたらないようにしてくだ
さい。」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぼっぷ・ハナ・のぞみ・
さつき・ほのか・りずむ・みすず

「はい！！私達は、絶対に負けません！！！！」

第09の呪文：見えてきた！ソラミ達の目的と野望！！（後書き）

みずず「こんにちは、皆さん！今回のリポーターはこのアタシ、春日みずずです！さーて、いよいよソラミ達の目的がハッキリしてきましたね！せっかくどれみちゃん達ががんばってきたのに、それを台無しにしようとするマジョボルト達・・・こんなヤツらを野放しにはできませんね！アタシ達は必ず彼女達を倒しますので、皆さん応援してくださいね！！次回、おジャ魔女どれみドッカ～ン！『助けなきゃ！さらわれたほのか！』次回も、必ず見てくれよな！！（コナン風）」

今回のリポーター：春日みずず
声：高山みなみ

第10の呪文：助けなきゃ！さらわれたほのか！！

どれみ達が魔女界の女王様からプロベーション・インカムを受け取ってから、数日がたったある日の事。

その日さつきは、MAHO堂で頼まれたカレーの材料を買いに行っていた。

さつき

「野菜も買った、お肉も買った・・・よし、お買い物終了！って・・・重いし・・・」

材料の量が半端なかったため、さつきはヨロケながら歩いていた。

しばらく歩いたその時、突然それは起こった。

突然遠くから、女の子の悲鳴が聞こえてきたのだ。

「キャーッ！！」

さつき

「今の声、まさか！？」

さつきがヨロケながら急いで向かうと、急に黒いワゴン車が飛び出して来た。

ワゴン車はいったん止まったが、すぐに猛スピードになり、黄色信号の交差点を乱暴に曲がって行った。

その瞬間、窓からうつすらと青色の髪が見えた。

さつき

「ほ、ほのか!？」

さつきは叫んだが、時すでに遅く、もう車は走り去っていた。

さつきが車と遭遇する前・・・

ほのか

「フゝ、あつゝゝ!！」

ほのかはセンスであおぎながら、MAHO堂に向かっていた。

ほのか

「はよ戻って、麦茶でも飲も・・・」

そんな事を言っていたほのかの後ろに、怪しい黒のワゴン車が近づいてきていた。

そして、次の瞬間・・・

ガバツ!!

ほのか

「えっ!?!キ・・・キャゝッ!！」

ほのかは悲鳴と共に、ワゴン車の中に連れ込まれた。

こういうワケである。

しかし、さつきはさつきの一瞬の間に車のナンバーを覚えていた。

さつき

「吹田68に72-43か・・・」

ナンバーさえ抑える事ができれば、あとは警察が何とかしてくれる・
・

さつきはそう思っていた。

だが、さつきはある物を見つけて、その考えを変えた。

さつき

「こ、これ・・・ほのかのコロンタップ!!」

なんと、ほのかのタップが歩道に落ちていたのだ。

さつき

「ほのかは今、魔法が使えない・・・!」

ほのかは、その性格からして犯人達相手に大人しくしているハズがない。

魔法が使えないほのかにとって、それは明らかに自殺行為である。

さつき

「警察じゃ遅すぎるわ・・・そうだ!」

さつきは近くのマンションの屋上に駆け上がった。

誰もいない屋上に風だけが静かに吹いている。

さつき

「ここなら、大丈夫よね・・・」

シュッシュ!

さつき

「プリーッウィッチーさつきっちー!」

見習い服と一緒に、新しくなったプロベーションインカムもセットされていた。

さつき

「(お願い! あいちゃん・・・気づいて・・・)」

ほのか

「このお、離しいや!...!」

案の定、ほのかは車の中で暴れていた。

「おとなしくしろや!！」

ほのか

「ナメんなや・・・いてこましたるで!！」

ほのかはポケットに手を突っ込んだが、その瞬間顔が青くなった。

ほのか

「(コロンタップがあらへん!!)」

なんと、変身に必要なコロンタップがなかったのだ!

ほのか

「(まさか、さっき落つことしたんか!?)」

ほのかが啞然としていると、ニヤリと笑った男が彼女に飛びかかってきた。

ほのか

「キャッ!！」

ほのかは座席に押さえつけられ、手足を縛り上げられてしまった。

同時刻、あいこは美空小にいた。

理科の小テストの結果が悪かったため、居残りだったのだ。

あいこ

「ほんま、カブトとかクワガタは頭こんがらがるで・・・」

テストの範囲はどうやら昆虫類だったようだ。

廊下を歩いていたあいこは、何か振動を感じた。

あいこ

「な、何や!？」

ポケットの中のタップが震えたのだ。

あいこ

「えっと・・・とりあえず変身やな!」

あいこは、そばの非常階段を駆け下りて校舎の裏に出た。

普段はこんな所に人は来ない。

あいこ

「誰もおらへんな・・・」

シュッシュ!

あいこ

「プリティ〜ウィッチ〜あいこっち〜!」

こちらにも、真新しいプロベーションインカムが誇らしげだ。

変身が終わった瞬間、そのインカムがさつきのインカムと繋がった。

さつき

「あいちゃん!よかった、わかったのね・・・」

あいこ

「さつきちゃんやないか!どないしたん?」

さつきの声から、あいこは何か起きた事を悟った。

さつき

「それが・・・ほのかが誘拐されちゃったの!」

あいこ

「何やて!?!」

さつき

「しかも、ほのかったらコロンタップを落っことしちゃって・・・」

あいこ

「それって・・・魔法が使えへんっちゃう事やんか!」

さつき

「うん、それでアタシ達が助けるのが一番早いと思ってね・・・」

あいこ

「せやな！」

さつき

「じゃ、美空公園の上空で待ってるわ！」

あいこ

「美空公園やな？すぐ行くで！」

数分後、公園の上空で2人は合流した。

あいこ

「で、どっちに行ったんや？」

さつき

「方向は大丈夫よ！ほのかの魔力を追っているから・・・」

あいこ

「わかるん！？」

さつき

「距離があるせいで正確じゃないけれど、だいたいはわかるわ・・・
南東の方よ！」

あいこ

「ほな、道案内頼むで！」

さつき

「任せて！」

2人は猛スピードで飛び始めた。

さつき

「ようっし、この速さだったら名神までには追いつけるわ！」

あいこ

「何でそこまでわかるんや？」

さつき

「あの車は高速に乗る事ができないもの！」

あいこ

「え？普通、逃げるんやったら速いほうがええやろ？」

さつき

「よく考えて！誘拐したほのかを乗せたままじゃ、料金所で係員に怪しまれるでしょう？料金所からは後部座席も少し見えるしね・・・」

「

あいこ

「・・・せやな！さつきちゃん頭ええなあ！」

さつき

「車のナンバーだって、ちゃんと覚えてるわよ!」

あいこ

「さすがやな!」

2人はさらに加速した。

ドギャン!!

2人はだいぶ遠くまで飛んできた。

さつき

「近い・・・近いわよ、ほのかの魔力!」

あいこ

「で、車はどんなやつた?」

さつき

「黒のワゴン車、吹田ナンバーの68 に 72よ!」

あいこ

「・・・とりあえずは黒いワゴンを探せばええんやな!」

2人は目を凝らして探したのだが、黒のワゴン車だけなら数が多い。
ぎる。

あいこ

「・・・アカン！黒ワゴンぎょうさんおるで！」

さつき

「落ち着いて！ほとんどが和泉ナンバーよ！」

あいこ

「そうやった！吹田ナンバーやもん・・・」

その時、1台のワゴン車がいこの目にとまった。

あいこはその中の青いポニーテールの影を見逃さなかった。

あいこ

「見つけたで！」

走り去っていくワゴン車を追って、あいこはホウキを急旋回させた。

さつき

「ちょっと、あいちゃん!？」

さつきもその後を追う。

問題のワゴン車の中は、スモークガラスのせいでよく見えない。

あいこ

「あれ、ナンバーがちゃう・・・」

さつき

「ほのかの魔力は感じるけど・・・」

ナンバープレートは『和歌山134 ま 689』で、最初に見た物とは違っていた。

さつき

「・・・そうか、そういう事ねえ！」

あいこ

「さつきちゃん？」

さつき

「あのナンバープレート、封印がないわ！」

あいこ

「封印？」

さつき

「軽自動車以外の全ての車の後部ナンバープレートには、必ず封印が施されるのよ。」

あいこ

「ふんふん。」

さつき

「それがないって事は、壊したに決まってるわ。つまり、ナンバープレートを付け替えたのよ!!!」

あいこ

「なるほどな〜！」

さつき

「アタシだけだったら、ナンバーに騙されて危うく見逃しちゃうところだったわよ！」

あいこ

「ほな、車が走ってる間は危ないから、どっかに落ち着いてから魔法で助けよか！」

さつき

「賛成！それじゃ、このままあの車についていけばいいわね！」

ワゴン車は山道を走り、山小屋に着いた。

あいことさつきも、そばの茂みに着陸した。

2人の男が、手足をロープで縛られ口をガムテープで塞がれたほのかを小屋の中に連れ込んでいた。

ほのか

「んゝ、んゝ・・・」

「まったく、少しはおとなしゅうせいや！」

「黙ってられへんのか・・・」

あいこ

「ほのかちゃんや！間違いないで！」

さつきは2人が中に入ると、車を観察し始めた。

さつき

「やっぱりね・・・」

トランクの中には、『吹田68 72-43』のナンバーが2枚、放ってあったのだ。

そのそばには、封印を壊すのに使ったであろうハンマーもあった。

さつきは、さらにすごい事に気がついた。

さつき

「ん？・・・キーシリンダーにこの傷・・・こじ開けたのね！」

あいこ

「こじ開けた？」

さつき

「これ、盗難車よ・・・」

あいこ

「ホンマか？」

さつき

「誘拐及び窃盗・・・断じて許せないわね！」

そう言うのと、さつきは魔法のポロンをかまえた。

さつき

「ライライロ～ンフォイリ～ラリ～ラフー！！アタシの竹刀よ、出てこおい！！！」

ボンッ！

すると、さつきが愛用している竹刀が出てきた。

さつき

「この京極さつきが成敗してやるんだから！」

いきり立つさつきを、あいこは何とかなだめようとした。

あいこ

「ほな、まずは中に忍び込もう！さすがに正面から入るワケにはいかへんやろ？」

さつき

「う、うん・・・でもどうやって？」

あいこ

「まあ、任しときー！」

そう言うのと、あいこは魔法のポロンをかまえた。

あいこ

「パメルク〜ラルク〜ラリロリ〜ポップン！2人共ハムスターになれえ！」

ボンッ！

2人は小さなハムスターになった。

さつき

「わわわっ、アタシ、ハムスターになったの！？」

動物に変身するのが初めてらしいさつきは、少しとまどっている。

さつき

「なんか変な感覚ね・・・体に合わせてアタシの竹刀まで小さくなってるし・・・」

それに比べると、あいこはやはり慣れている。

あいこ

「まあ、ゴキブリよりはマシやろ？」

さつき

「ゴ、ゴキブリ！？何それ！！？」

あいこ

「他にも、犬、猫、鳥、虫・・・思えばいろんなもんになったもんや・・・」

さつき

「虫は・・・気が進まないわね・・・アタシ達全員の苦手分野だし・・・」

あいこ

「話がズレてもたな・・・で、どこから入り込むかやが・・・」

見ると、壁に都合よくも穴が空いている。

さつき

「あそこの穴から入れそうよ!」

あいこ

「よっしゃ!行くで〜!」

さつき

「ええ!」

ハムスターになった2人は、柱をよじ登って梁はりの上まで来た。

下には、縛られたほのかと犯人の2人組がいる。

「もう後戻りできへんのやな・・・」

「戻ったかて、仕事に就けへんで飢えてまうだけや・・・」

「早う身代金もろて、国外逃亡して・・・」

「死なへんように生きるのは、ホンマつらいで・・・」

ほのか

「（あゝもう・・・こういう暗い話はイヤやなあ・・・）」

ほのかは縛られている事よりも、暗い話をされる事の方がイヤなようだ。

あいこ

「哀れなヤツらやなあ・・・」

さつき

「食い詰めたあげくの果てが、これかよ・・・」

あいこ

「そやかて、ほのかちゃんこのままにできへんし・・・」

さつき

「・・・でも、やっぱり犯罪には変わらないわよ!..!」

さつきはつまようじみたいな大きさになった竹刀で、梁を叩いた。

その時なんと、あいこのかけた魔法が解けた。

柱をよじ登るのに時間をかけすぎたため、魔法の時間切れになってしまったのだ。

ボンッ!!

さつき

「ええっ!?!」

あいこ

「アカン!!」

2人は、おジャ魔女の姿に戻ってしまった。

そしてまずは、ほのかが2人に気づいた。

ほのか

「（あいちゃん!? さつきも!?）」

さらに、犯人達も視線を上に向けてしまった。

さつき

「しかたないわ! 速攻よ!!」

「な、何やオマエら・・・」

さつき

「成敗っ!!」

バシーン!!

そう言い終わる前に、さつきの竹刀が犯人の頭にヒットした。

あいこも、さつきに続いて梁から飛び降りた。

あいこ

「やああああ!!」

そして、もう1人の犯人の脳天にかかと落としをお見舞した。

犯人達は不意をつかれ、気絶してしまった。

あいこ

「ふう、危なかったで・・・」

さつき

「ま、一瞬だけだったから顔は覚えてなさそうね・・・」

そして、2人はほのかを解放した。

ほのか

「プハ！助かったでー！！」

あいこ

「無事で何よりや！」

さつき

「さて、この2人は後で警察に連れてってもらうとして・・・」

さつきがそう言うと、ほのかがいきなり叫んだ。

ほのか

「アカン！話聞いてたやろ？しかたなかったんや・・・見逃してやるうや・・・」

あいこ

「ほのかちゃん・・・」

ほのかは目に大粒の涙を浮かべていた。

そんなほのかに、さつきは諭すように言った。

さつき

「ほのか・・・その気持ちはわかるけど、それでこの2人は幸せになれるかしら・・・？」

ほのか

「えっ・・・？」

さつき

「罪を背負ったままで、人は幸せかしら・・・？　どうかな？　ほのか・・・」

ほのか

「そやけど・・・そやけど死刑になってもうたら、どないすんねん？　幸せも何もないやろ！！」

さつき

「・・・確かにね。でも、この2人は死刑にはならないわよ。」

あいこ

「えっ？　どういう事や？」

さつき

「だって、立証できるのは車の事だけだもの！」

ほのか

「ほえっ？」

さつき

「ほのか、あなた警察の事情聴取って嫌いでしょう？」

ほのか

「・・・うん。嫌や！」

さつき

「誘拐された本人がこれじゃあ、誘拐は立証できないでしょ？」

あいこ

「そや！誘拐された人がおらへんねやったら事件にもならへんし！」

ほのか

「そっか！ほな、ウチは絶対名乗り出えへん！」

さつき

「・・・今回はほのかに免じて、大目に見てあげたんだからねっ！
！」

あいこ

「さつきちゃん、もっと素直になればええのに・・・」

さつき

「ア、アタシは・・・別に・・・」

ほのか

「さつき・・・！おおきにな！」

その後、さつきが匿名で警察に通報した。

押収されたワゴン車を引いたレッカー車に続いて、犯人達を乗せたパトカーが山道を下って行く。

あいこ達3人はホウキに乗って、その様子を上空から見ていた。

あいこ

「行つてしもたな・・・」

さつき

「執行猶予が付くと良いけどね・・・」

ほのか

「これで・・・これで良かったんやな・・・」

ほのかは袖で涙を拭きつつ言った。

ほのか

「・・・ほな、帰るか!」

あいこ・さつき

「・・・うん!」

夕日が明るく、そして優しく、あいこ達3人を照らしていた・・・

第10の呪文：助けなきや！さらわれたほのか！！（後書き）

ほのか「元気してたか、みんな！今回のリポーターはこのウチ、風戸ほのかや！！いやゝ、今回はウチ、大ピンチやったなあゝ・・・いきなり車に押し込まれて、抵抗しようとしたまではよかったんやけど、コロンタップ落としてしもてなあ・・・あつさり縄で手足縛られて、口を塞がれてしもたわ・・・あー、情けな・・・ま、助かったから結果オーライやし、あのオツチャン達もウチが名乗り出えへんおかげで窃盗罪で済むだけやし、まあ良かったんとちゃうんかな？『良くない！！（さつき談）』ウチはこれでよかったと思うで！！次回、おジャ魔女どれみドッカ〜ン！！『大阪の騒動！狙われたあいこ！！』次回も、応援よろしく頼むでゝ！！」

今回のリポーター：風戸ほのか

声：宮村優子

第11の呪文：大阪の騒動！狙われたあいこ！！

風戸ほのかの誘拐騒動から、数日がたったある日の事。

妹尾あいこは、母である岡本あつこがいる大阪に里帰りしていた。

あいこ

「久しぶりに帰ってきたなあ、大阪・・・早うお母ちゃんトコに行かな・・・」

その時、あいこの聞き慣れた声が聞こえてきた。

「あいこー！！」

あいこ

「こ、この声は・・・」

大声をあげて走ってきたのは、あいこの幼なじみのアンリマー（本名、有馬健一）だった。

彼については、おジャ魔女どれみナ・イ・ショ第10話（DVD第6巻に収録）を参考にしてほしい。

アンリマー

「あいこ！ここに帰ってたんやったら、連絡ぐらいしてくれや！」

あいこ

「アホ！なんでアタシがアンタに連絡せなアカンねん！」

アンリマー

「つれないなあ・・・フィアンセで、今はオレの彼女やる？あの時の約束、まさか忘れたとは言わさへんで・・・」

あいこ

「あ・・・」

そう、あいこはアンリマーが美空町にやって来た時、彼が帰る際に『阪神が優勝したらつき合う』と約束し、その数日後に阪神が優勝してしまったのだ。

あいこ

「ア、アハハ・・・」

アンリマー

「アハハやないやろ！約束通り、オレの彼女になってもらうからな！」

あいこ

「わかったわ。ほな、先にお母ちゃんトコ行くから、来いや！」

アンリマー

「おお！」

あいことアンリマーは、老人ホームに向かって走り出した。

その2人を、瀬能アイリが空から見つめていた。

アイリ

「ククク・・・おもしろい事になりそうだわ・・・」

あいことアンリマーは、あつこが働いている老人ホームにやって来た。

あいこ

「お母ちゃん！」

あつこ

「あいこ！久しぶりやねえ！それに健一君も・・・」

アンリマー

「お母さん！娘さんをボクにください！」

あいこ

「早いつちゅうねん！！」

ポカ！

あいこはアンリマーをこづいた。

あつこ

「まあまあ、健一君ったらオマセさんね・・・ええよ！」

アンリマー

「よっしゃあ！」

あいこ

「お母ちゃん・・・」

あつこと別れた後、あいことアンリマーは久しぶりに大阪を観光していた。

アンリマー

「うーん、やっぱりタコ焼きは本場の味に限るなあ・・・」

あいこ

「そやね!」

談笑している2人を、黄緑色の帽子をかぶった少女が見て、クスクスと笑っていた。

そう、この少女は和久のぞみだった。

しかし、あいこはそれに気づいていない。

アンリマー

「あいこ、ちょっとあの公園まで来てくれ!!」

そう言つと、アンリマーはあいこの手を引っ張った。

あいこ

「キャ!」

アンリマーはあいこを引っ張り、店を出た。

のぞみは人が来ない事を確認すると、コロンタップを体に吹きかけた。

シュツシュツ！

のぞみ

「プリティーウィッチーのぞみっちゃん」

のぞみはポロンをかざした。

のぞみ

「パウラ〜ピラルペ〜ルペルパ〜ウピウレ！アタシよネコに・・・なれえ！〜」

ポウン！！

のぞみは緑色のネコに変身すると、あいこ達の後を追った。

のぞみがやっと追いついた時、アンリマーとあいこが向き合っていた。

アンリマー

「あいこ・・・ここ、覚えてるか？」

あいこ

「覚えてるで。アタシが1年の時、アンタにプロポーズされた場所やろ？」

のぞみは、ベンチで寝ころんでいるネコのフリをして、2人の会話を聞いている。

のぞみ

「（なんか、いい雰囲気ね、あの2人・・・）」

アンリマー

「その事なんだけどさ・・・」

あいこ

「なんや？」

アンリマー

「あいこ！-！」

あいこ

「キャ-！！」

アンリマーはあいこを抱き寄せると、キスをした。

のぞみ

「（うわぁ、やるわね、あの子・・・）」

あいこ

「／／／／・・・／／／／／」

あいこは赤面した。

アンリマー

「あいこ・・・あつちの学校を卒業したら、こっちに戻ってきてほしいんや・・・オレ、あの時は正直勢いで告白したけど、今は真剣にあいこが好きなんや！！だから、オレと結婚してくれへんか？」

あいこ

「2回目のプロポーズやね、アンリマー・・・」

アンリマー

「それで、オマエの返事は？」

あいこ

「もうちょっと、考えさせて・・・1時間後、またここで落ち合うって事で・・・」

アンリマー

「ああ・・・ええ返事、待ってるからな！！」

アンリマーは走っていった。

あいこ

「ど、どないしょ・・・アタシ、どないしたらええんやろ・・・アタシも真剣にアンリマーの事好きや・・・今大阪に戻った方がええのか、それともまだ・・・」

「大阪に戻ればええやない・・・」

あいこが上を見上げると、瀬能アイリがホウキに乗って飛んでいる。

アイリはスタッと地面に降りた。

アイリ

「大阪に戻ればええやない、妹尾あいこ・・・」

あいこ

「瀬能アイリ！！アンタ、マジョガエルの呪いが怖くないんか？」

アイリ

「アタシかて呪いは怖いわ。でもあいにく、この周囲1キロメートル四方には誰もおらんで。アタシがさつきテレビ局のレポーターを操って、この一帯に地震が起きるってウソのニュースを流したからな。」

あいこ

「禁断の魔法まで使いおって・・・それを使ったら、災いが・・・」

アイリ

「残念でした。アタシら全員、マナちゃんに災いを跳ね返す魔法をかけられてるからね。ちつとも応えないんや。」

あいこ

「くっ・・・」

アイリ

「それより、大阪に戻っちゃいいな。正直言っと、1人でも減った方がアタシらにとって都合ええんよね。あの子達はこっちで工作するからさ、戻りなよ。」

あいこ

「ふざけるな！アンタの言いなりになんか、ならへんで！！」

アイリ

「だったら、力ずくで言う事を聞かしてやる・・・来いや！！」

シュツシュツ！

あいこ

「プリティーウィッチーあいこっちっ」

アイリ

「さ、勝負やで。」

あいこ

「パメルクゝラルクゝラリロリゝポップン！瀬能アイリの苦手な物、出てこーい！！」

ボウン！！

一冊の本があいこの手に落ちてきた。

あいこ

「誰でも笑い出すオヤジギャグ辞典・・・？」

アイリ

「プツ！オヤジギャグ・・・」

あいこは本を開いた。

あいこ

「日曜に遊園地連れてってくれないと許サンデー・・・?」

アイリ

「クククッ・・・サンデーと許サンデー・・・」

あいこ

「月曜雨でも学校休マンデー・・・」

アイリ

「アハハハハ!!」

あいこ

「火曜は彼氏とチューするで・・・」

アイリ

「ダハハハハ!!」

あいこ

「水曜は花を植えんずで・・・」

アイリ

「ハハハハハ!!」

あいこ

「木曜は傘をさーすで・・・」

アイリ

「アハハハハ!!」

あいこ

「金曜のおかずはフライデー……」

アイリ

「キャハハハハ！」

アイリはさっきから、腹をよじって爆笑しまくっている。

もちろん、笑いのツボが浅いのぞみも笑いたかったのだが、笑うと変身が解けてしまったため、笑うに笑えなかった。

のぞみ

「（クククツ……おもしろい……笑いたいけど……笑えないよー！！）」

あいこ

「土曜は嵐も去ったデー……」

アイリ

「アーハッハッハッ！！ハッ……」

アイリがハッとなると、あいこがきょとんとしていた。

アイリ

「ヤバイ！アタシとした事が……敵の術中にまんまと……」

あいこ

「アンタの笑いのツボの浅さ、マジョル力以上やな……」

アイリ

「く、くそ、よくもやってくれたな・・・生かして帰さんでー!!」

あいこ

「な、なんでそうなのよ・・・」

アイリ

「うつさい!うつさい!!パメルク〜ラルク〜ラリロリ〜ポップン!出でよ、スパイル!!」

ボウン!!

あいこ

「な、何やコイツは!?!」

アイリ

「魔女界に生息するクモ・・・スパイルや。」

あいこ

「生息つて、ポケモンかいな・・・」

アイリ

「ゴチャゴチャうつさい!!行きなさい、スパイル!あの子を捕まえなさい!!」

スパイダ『シャ〜!!』

あいこ

「わ〜っ!!」

スパイルは糸を吐いてきた。

あいこは、懸命にそれを避ける。

アイリ

「ウフフフ・・・いつまで逃げられるかな？」

あいこ

「そっや！空の上なら・・・」

あいこはホウキにまたがると、飛び出した。

アイリ

「ムダや。」

スパイダは糸を吐くと、ホウキを絡めとり、弾いた。

あいこ

「わっ！」

あいこが空中に投げ出される。

アイリ

「今や、スパイル！」

スパイルが吐き出してきた糸に、あいこはグルグル巻きに絡めとられてしまった。

あいこ

「キャアアアッ！！」

ドサッ！

あいこは地面に落ちた。

あいこ

「うゝん、うゝん！！」

あいこはジタバタともがいた。

アイリ

「ムダやで、あいこちゃん。」

そう言うと、アイリはガムテープをあいこの口に貼った。

あいこ

「んゝ、んゝ！！」

アイリ

「妹尾あいこちゃん、捕獲完了。さ、マナちゃんの所に行きましょうか？」

アイリはあいこを抱き上げた。

あいこ

「んむうゝ、んむうゝ！！（助けて、誰か助けてえゝ！！）」

アイリ

「もう、終わりやね・・・」

「そこまでよー!!」

アイリ

「え？」

あいこ

「!!」

アイリとあいこが向いた方向には、和久のぞみが立っていた。

あいこ

「ん、んむむうん・・・(の、のんちゃん・・・)」

のぞみ

「待つてて、あいこちゃん!すぐに助けてあげるから!!」

アイリ

「甘いな。スパイル、あの子も絡めとりなさ・・・」

のぞみ

「スパイルよ、燃えろ。」

ボン!!

スパイダはあっさり焼け死んだ。

アイリ

「ウ、ウソやる!!」

のぞみ

「たああああー!!」

アイリ

「キャッー!!」

飛び蹴りでアイリをひるませ、のぞみはあいこを救出した。

のぞみ

「大丈夫、あいこちゃん!」

ボン!

あいこは糸から解放された。

あいこ

「た、助かった・・・」

のぞみ

「さ、お返しするわよー!!」

あいこ

「ええー!!」

のぞみ

「パウラ〜ピラルペ〜ルペルパ〜ウピウレ!」

あいこ

「パメルク〜ラルク〜ラリロリ〜ポップン!」

のぞみ・あいこ

「雷よ、瀬能アイリに落ちよ!!」

ピツシャアアン!!

アイリ

「キャアアア!!くっ・・・覚えてろ!!」

アイリはそう言うと、杖を振って消えた。

あいこ

「ああ!!逃げてもった・・・」

のぞみ

「いいじゃない、無事だったんだから!」

あいこ

「そやな!」

それから1時間後

あいこ

「アンリマー・・・アタシ、まだ大阪には戻られへん・・・けど、絶対戻ってくるから・・・その時は・・・」

アンリマー

「ああ、じゃあな!!」

アンリマーはそう言うと、走っていった。

あいこ

「アンリマー……」

のぞみがネコの変身を解き、あいこに駆け寄った。

のぞみ

「あいこちゃん……」

その時、あいこの携帯電話がふるえた。

のぞみ

「あいこちゃん、携帯鳴ってるよ!」

あいこ

「あ、ホンマや。メール……?」

あいこは、メールを読んだ。

あいこ

「!?!」

『卒業式の日がわかったら、知らせてくれ。
オマエを迎えに行く。』

アンリマー』

あいこ

「ア・・・アホ・・・」

あいこは涙ぐんだ。

のぞみ

「あいこちゃん、よかったね・・・」

あいこ

「うん・・・」

あいこは、のぞみと一緒に美空町に帰っていった。

第11の呪文：大阪の騒動！狙われたあいこ！！（後書き）

のぞみ「今回はあいこちゃん、大ピンチだったわね。」

あいこ「助かったわ、のんちゃん。」

のぞみ「どういたしまして！」

あいこ「それはそうと、のんちゃんなんで大阪にいたんや？」

のぞみ「マジヨリカにタコ焼き用の千枚通しとワインオープナー買って来いって言われて、大阪まで買いに来たのよ。それで、記念にタコ焼き屋でタコ焼き食べてたら、あいこちゃんとあの子を見かけたから・・・」

あいこ「ちょ、ちよつと待って！ほんなら、アタシとアンリマーがキスしてたところも・・・」

のぞみ「バーツチリ、見ちゃいました！」

あいこ「／／／／えええ〜！！そ、そんなあ〜！！／／／／」

のぞみ「あなた達、ラブラブって感じだったわよ！妬けるわあ。」

あいこ「／／／／うう・・・恥ずかしいよあ・・・／／／／」

のぞみ「次回、おジャ魔女どれみドツカ〜ン！『危険なアイドル！ターゲットは瀬川おんぷ！』あいこちゃん、必ず幸せにな〜れ！！」

第12の呪文：危険なアイドル！ターゲットは瀬川おんぷ！！

その日、瀬川おんぷは、ドラマの収録日であった。

無事に撮影を終えたおんぷは、家に戻ってきてきていた。

途中、あいこから電話がかかってきて、例の魔女の手下が大阪にも現れた事を聞かされた。

そして、翌日・・・

いつものようにおんぷが美空小学校に登校すると、何だか2組が騒がしかった。

見ると、美空新聞を開いてその内容に見入っている。

おんぷ

「どうしたの？みんな・・・」

はづき

「あ、おんぷちゃん！」

あいこ

「とんでもないニュースがあるんや！」

おんぷ

「とんでもないニュース？」

あいことはづきに即され、おんぷも新聞をのぞき込んだ。

そこにはなんと、『美空小学校6年2組初音りずむ、ついに芸能界進出か!』という見出しの記事が載っていたのだ。

おんぷ

「りずむちゃんが芸能界デビュー? そんな事、マジョルカ昨日まで言ってなかったのに・・・」

その時、春日みすずと初音りずむが入ってきた。

りずむ

「みんな、おはよー!」

みすず

「ん? なんか様子がおかしいよ?」

次の瞬間、クラスメートがりずむに寄ってきた。

加納のり子

「りずむちゃん、ついに芸能界に進出するんだね!」

天野こうた

「楽しみだなあ!」

梅野ゆかり

「デビュー曲は何にするの?」

りずむ

「へ？へ？」

おんぷ

「りずむちゃん、私と一緒に仕事できるかもよ？」

りずむ

「ど、どういう事！？アタシ、そんなの知らないよー！！」

MAHO 堂にて

りずむ

「ど、どういう事よ、マジヨリカー！！」

マジヨリカ

「ああ、あの記事の事か？」

おんぷ

「やっぱり、マジヨリカ達が関係してるのね！」

マジヨルカ

「そうじゃよ。今まではおんぷだけでやってきていたが、せっかくりずむが来てるんだ。この機会に、オマエも人間界で芸能界デビューしたらいいと思ったんじゃないよ。」

マジヨリカ

「心配するな。契約金は高いし、歌声も申し分ない……こっちの

芸能界でも、充分やっていけると思うが・・・」

おんぷ

「ちよつと、2人とも・・・」

そういうおんぷがりずむの方を向くと、彼女は涙を流していた。

りずむ

「アタシに何も相談しないで、勝手な事しないでよ！！マジョリカもマジョルカも、大っ嫌い！！！」

そう叫ぶと、りずむは止めようとするおんぷを突き飛ばし、走って行ってしまった。

おんぷ

「り、りずむちゃん・・・」

のぞみ

「え？どうしてりずむが人間界で芸能活動をしてないかって？」

のぞみはおんぷの家に呼ばれ、相談を受けていた。

おんぷ

「うん。この前カラオケに行った時も歌とても上手だったし、私の歌も楽々歌えてた・・・りずむちゃんの力なら、こっちで芸能活動しても成功すると思うんだけど・・・」

のぞみ

「ああ、それね・・・実はりずむのお母さん、人間界の芸能活動にトラウマがあるの・・・」

おんぷ

「りずむちゃんのお母さんって、まさか・・・」

のぞみ

「そう、彼女の母親はマジョプリマよ。」

おんぷ

「でも、どうしてそれが・・・？」

のぞみ

「マジョプリマね、若い頃に芸能人として人間界にやって来た事があるのよ。その時に、人間達の芸能活動に対する態度を見て、人間達に失望したの・・・それからりずむが生まれて、数日がたったある日、りずむが人間界でアイドルになりたいと言い出してね。その時にマジョプリマ、『人間達は信用できない。芸能活動に対する気持ちが欠けている。だから、あなたには人間界でアイドルになつてほしくない』ってりずむに言ったのよ・・・」

おんぷ

「そうだったの・・・」

のぞみ

「でも、おんぷちゃん達との出会いや、FLAT4のトオル君のおかげで、マジョプリマも少しずつだけど人間達に対する気持ちを変えてきてる。でも、りずむはまだその事を引きずっているのよ・・・」

「

おんぷ

「そんな・・・かわいいそう・・・」

のぞみ

「でもアタシは、りずむがあのままでもいいとは思わない・・・アイドルなら、どんな修羅場もぐり抜けなければいけない・・・そう思ってる・・・」

おんぷ

「そうだよ・・・そうだよー！りずむちゃんを探しに行きましょう！」

のぞみ

「ええ！」

シュツシュツ！

おんぷ

「プリティーウィッチーおんぷっちー」

のぞみ

「プリティーウィッチーのぞみっちー」

おんぷ

「プールンプルンファ〜ミファ〜ミファー！りずむちゃんの居場所を、教えてー！！」

ヒュ〜・・・

カラン・・・

おんぷ

「これって・・・」

のぞみ

「尋ね人ステッキ？」

おんぷ

「とりあえず、使ってみよう。」

コト・・・

おんぷがステッキを立てると、ステッキは右斜めに倒れた。

おんぷ

「あっちみたいね・・・」

のぞみ

「行きましょ！」

おんぷとのぞみは、ホウキに乗って飛び出した。

美空山の中

りずむ

「クスン、クスン・・・マジョリカとマジョルカのバカ・・・」

ソング

「あらあら、こんな所で油売ってるなんて・・・ずいぶんと余裕じゃない？りずむちゃん・・・」

りずむ

「！！ソング！！」

ザッザッ・・・

ソング

「そんなにマジヨリ力達が憎いんだったらさ、アタシ達の仲間になりなよ。仲間になれば、どんな魔法でも思いつきり使えるんだよ！」

りずむ

「断るね。アタシはそんな事をするために、人間界に来たんじゃないんだから！」

ソング

「だったら、力づくでその気にさせてあげるよ。来なさい！」

シュッシュッ！

りずむ

「プリティーウィッチーりずむっちー」

ソング

「プールンプルンファ〜ミファ〜ミファ〜！人食いガエルよ、出てこい！！」

ボウン！

『ゲコゲコ・・・』

ソング

「この子に一度飲み込まれると、強力な胃液で溶かされるわよ。さあ、仲間になりなさい!!」

りずむ

「キ・・・キヤッッ!!」

のぞみ

「!りずむの声が聞こえた!」

おんぷ

「近いわ!急ぎましょ!」

ソング

「そらそらそら!!」

りずむ

「キヤッ、キヤッ、キヤッ!!」

りずむは猛スピードで、ソングとカエルから逃げている。

ダダダダ・・・

ソング

「逃げてばかりじゃ、アタシには勝てないよ！」

りずむ

「くっ・・・やるしかない！キ〜ラリンリルンラ〜ミラ〜ミラー！頑丈な壁よ、出てこい！！」

ズオオオ・・・

バリン！！

『ゲコ〜！！！』

りずむ

「わ〜っ、ぜんぜんダメだあ〜！！」

ヒュッ！

パシ！

カエルの舌が、りずむの右足を捕らえた。

りずむ

「！！！」

『ゲコオ！！』

りずむは引っ張られ、倒れ込んだ。

りずむ

「キャー!!」

ドタッ!

『ゲコゲコ・・・』

りずむ

「も、もうダメ・・・!!」

のぞみ

「りずむー!!」

おんぷ

「助けに来たわよ!!」

ザッ!

りずむ

「のぞみ!おんぷちゃん!!」

ソング

「チッ、余計な事を・・・カエル!さっさと片づけなさい!!」

『ゲコオ・・・』

スウウウ・・・

おんぷ

「カエルの姿が消えた!!」

のぞみ

「いったい、どこにいるの!？」

その時・・・

ニユルルル!!

おんぷ・のぞみ・りずむ

「えっ・・・キャアアアッ!!」

おんぷ達3人は、カエルの舌に巻かれてしまった。

おんぷ・のぞみ・りずむ

「ううっ・・・!!」

『ゲコオ!』

カエルは舌を巻きとり、おんぷ達3人を引き寄せた。

おんぷ・のぞみ・りずむ

「キャッ!!」

パクッ!

ゴクン!

カエルは、おんぷ達3人をペロリと飲み込んだ。

『ゲコオ
♪』

ソング

「さあ、その子達を痛めつけなさい!」

『ゲ・・・ゲコオ・・・』

ソング

「?何なの!?!」

おんぷ

「プゝルルンプルン涼やかにゝ・・・」

のぞみ

「パウラゝピラルペゝル静やかにゝ・・・」

りずむ

「キゝラリンリルン艶やかにゝ・・・」

おんぷ・のぞみ・りずむ

「マジカルステージ!!カエルよ、消え去って!!」

ピカア・・・

シュウウウウ・・・

ソング

「な!!カエルが消えた・・・!!」

おんぷ

「今度はこっちの番よ!プゝルルンプルンファゝミファゝミファゝ
!巨大な手よ、出てこい!!」

ボウン！！

のぞみ

「パウラ〜ピラルペ〜ルペルパ〜ウピウレ！巨大なバットよ、出るお！〜！」

ボウン！！

ガシッ！

ソング

「キャッ！？」

ブンッ！

ソング

「え！？」

ドカッ！

ソング

「キャ〜ッ！！」

パツカアアアン！！

ソング

「キャアアアッ！！覚えてなさい！！」

ソングはバットで打たれ、ふっ飛ばされていった。

のぞみ

「あら、飛ばしすぎたかしら・・・」

そしてその後・・・

おんぷ

「ねえ、りずむちゃん。マジヨプリマはもう、人間に対する気持ちを変えてきてるの。だからね、自分の道は自分で決めていいのよ。」

りずむ

「う、うん・・・」

ちょうどその時、トオルがドラマ撮影を終えて控え室に戻ってきた。

トオル

「おんぷちゃん、やっと終わったよ！」

おんぷ

「お疲れさま！今回もバツチだったよ！」

トオル

「まあね！あれ？りずむちゃんじゃないか・・・」

りずむ

「あ・・・」

おんぷ

「ね？魔法使いのトオル君も、こうやってアイドルやってるの。だからね、もうあなたもアイドルになっていいんだよ。」

りずむ

「うん！！アタシ、オーディション受けてみる！！」

そして、1ヶ月後・・・

テレビ画面には、仲良くドラマに出演しているおんぷ達3人の姿があった。

りずむ

「（おんぷちゃん達のおかげで、吹っ切れたわ・・・ありがとう！おんぷちゃん、トオル君！！）」

りずむは、満面の笑みを浮かべていた。

第12の呪文：危険なアイドル！ターゲットは瀬川おんぷ！！（後書き）

のぞみ「りずむ、アイドルになれてよかったね。」

りずむ「うん！アタシが吹っ切れたのは、のぞみのおかげでもあるのよ！」

のぞみ「りずむが元気になってよかったわ。」

りずむ「それにしても、今回もマジョボルトの手下が出てくるなんてね・・・」

のぞみ「マジョボルトか・・・『マジョボルト』って名前、どうも偽名のような気がするのよね・・・」

りずむ「え？」

のぞみ「あ、イヤ・・・何でもない・・・」

りずむ「そう・・・」

のぞみ「次回、おジャ魔女どれみドッカ〜ン！『狙いはアメリカ！ももこ激闘の時！』」

りずむ「世界を平和な未来に変えて！！」

第13の呪文：狙いはアメリカ！ももこ激闘の時！！

MAHO堂

どれみ

「え？ももちゃん、明後日アメリカに里帰りするの？」

ももこ

「イエース！今ちょうど連休だし、久しぶりにのんびりしたいと思
つてさあ！」

さつき

「でもさ、マジョボルトの手下がいつまたアタシ達を狙ってくるか
わからないよ？」

ほのか

「そうやなあ・・・あいちゃん、おんぷちゃんときてるから、次は
ももちゃんの番やで・・・」

ハナ

「どれみ、なんかいい考えない？」

どれみ

「うーん・・・」

のぞみ

「じゃあ、みすずに頼んでみる？」

で、翌日のMAHO堂

みすず

「いいよ！断然オツケー！」

ももこ

「ホッ・・・」

おんぷ

「じゃあ、久しぶりの里帰り、楽しんできてね！」

ももこ

「うん！」

そして、次の日

みすず

「じゃあ、そろそろ行きますか！」

シュツシュツ！

ももこ

「プリティーウィッチーももこっちー♪」

みすず

「プリティーウィッチーみすずっちー♪」

2人はホウキにまたがった。

ももこ・みすず

「アメリカへ、レッツゴー!!」

バヒュン!!

スッ・・・

ナナコ

「ヘエ、故郷に里帰りか・・・精一杯のおもてなしをしてあげなくちゃね・・・」

アメリカ

ももこ

「着いたー!!」

みすず

「前に来た時と全然変わってないなあ・・・」

ももこ

「え？みすずちゃん、ここに来た事あるの？」

みすず

「魔女小学校に上がるまでアメリカにいたし、ウチの学校は成績さえよければすぐに卒業できるからね。アタシ達みんな、4年で魔女小学校を卒業したのよ。」

ももこ

「そうだったんだ・・・」

みすず

「それに、ももちゃんとアタシ達には、決定的なちがいがあったわ・・・ももちゃんは、5年の時にどれみちゃん達に会ったのよね？」

ももこ

「うん・・・」

みすず

「アタシは小学校にあがってすぐ、のぞみ達に出会った・・・すぐに仲良くなれたよ・・・」

ももこ

「そう・・・」

みすず

「なんか辛気くさい話しちゃったね。MAHO堂へ行きましょう。」

ももこ

「うん！」

ニューヨークMAHO堂

みすず

「うわー、中もヒドいなー・・・」

ももこ

「私が日本に引っ越してから、ほっときはなしだったからね・・・
久しぶりにお菓子作ろうと思ったけど、これじゃ無理かなあ・・・」

みすず

「大丈夫よ！アタシに任せてー！」

シャツ！

みすず

「フェル〜タンフェットンファリラポン！！MAHO堂よ、キレイになれー！」

ボウン！！

パアアアア・・・

ももこ

「うわー、スゴいー！！」

みすず

「じゃあ、お菓子作りを始めましょー!」

ももこ

「A! 甘いアップルパイ」

みすず

「B! ビックリビスケット」

ももこ

「C! しっとりシュークリーム」

みすず

「D! ドツキリドーナツ」

ももこ

「E! え〜え〜エクレア」

みすず

「A B C D E F G〜それ」

ももこ

「おいしいおいしいお菓子のパレード」

みすず

「A B C D E F G〜それ」

ももこ

「歌えばおめめがキラキラ」

みすず

「今日のオヤツは何かな？」

みすず

「できた！！みすず特製お菓子の盛り合わせ」

ももこ

「スゴい！！」

みすず

「さ、みんなを呼びましょう！」

それから数時間、ももこ達はお菓子パーティーを楽しんだ。

パーティーが終わり、みんなは帰っていった。

ももこ

「おいしかった」

みすず

「でしょ？」

ももこ

「みすずちゃん、後片付けも魔法でやる！」

みすず

「ズルはダメよ、ももちゃん？」

ももこ

「やつぱり……」

その時、外から音が聞こえてきた。

ももこ

「な、何！？今の音……」

みすず

「……？」

みすずは外に出た。

みすず

「なっ……」

みすずの目の前に写ったのは、巨大な魔物に襲われている人々の姿だった。

ももこ

「大変！！町の人々が襲われてる！！」

みすず

「騒ぎを起こしている根源を引きずり出すわよ！！」

ももこ

「は、はい！！」

ももこ

「ペル〜タンペットンパリラポン！！」

みすず

「フェル〜タンフェットンファリラポン！！」

ももこ・みすず

「諸悪の根源よ、出てこい！！！！」

ガッ！！

ドン！！

ナナコ

「あちゃー……やっぱりバレたか……」

ももこ

「朝香ナナコ……やっぱり現れたわね……」

みすず

「ナナコ……今までの戦いの決着……今ここでつけさせてもらうわよ！！！！」

ナナコ

「いいよ！だけど・・・アタシだけじゃないんだけどね・・・」

ももこ・みすず

「え！？」

ザン！！

そこにいたのは、ソラミ、ミヅキ、アイリ、ソング、リップの5人だった！！

みすず

「ど、どうして・・・」

ソラミ

「あなた達を確実に倒すためよ・・・」

ミヅキ

「幸い、まだ『あれ』は覚醒していないし・・・」

ももこ

「あれ・・・？」

アイリ

「ミヅキ、口数が多いよ！！」

ミヅキ

「ゴ、ゴメン・・・」

ソング

「それ以上余計な事言つと、たとえ仲間でも殺すわよ・・・」

ミヅキ

「・・・」

みすず

「仲間割れしてる今がチャンス!!」

ももこ

「逃げましょ!!」

2人はホウキに乗ってこつそり逃げ出した。

リップ

「あ、あのー、お姉ちゃん達・・・ももことみすず、逃げたけど・・・」

ソラミ

「あー!!」

ミヅキ

「し、しまった・・・」

アイリ

「追うわよ!!」

ソング

「言われなくとも・・・」

バヒュン！！

ももこ

「2人だけじゃ、あの6人には絶対に勝てない・・・」

みすず

「どれみちゃん達を呼ぶしかないわ・・・」

カツ！！

みすず

「このテレパシーで、気づいてくれればいいけれど・・・」

第13の呪文：狙いはアメリカ！ももこ激闘の時！！（後書き）

ももこ「やっと再開ね。」

みすず「まあ、作者さんが他の話に詰まっただからね。」

ももこ「それにしても、アイツらズルくない!?」

みすず「言えてるね・・・」

ももこ「次回、おジャ魔女どれみドッカ〜ン！『覚醒！どれみ達のエレメント』!!」

みすず「世界を平和な未来に変えて!!」

第14の呪文：覚醒！どれみ達のエレメント！！

みすず

「（アタシ達のこの状況は、テレパシーでどれみちゃん達に送った・
・お願い、気づいて・・・）」

みすずとももこは、魔法のホウキに乗って逃げているところだった。

その後を、ソラミ達6人が追ってくる。

ソラミ

「待ちなさーいー!!」

ももこ

「待てと言われて待つヤツなどいないわよー!!」

ミヅキ

「だったら、力ずくで止めてあげます・・・ハアアアツ・・・ハ
ツー!!」

カッ!!

ジュバツ!!

ミヅキのポロンから、水の光線が放たれた。

ももこ・みすず

「うわっ!!」

ももことみすずは、間一髪でそれを避ける。

ミヅキ

「チッ・・・外したか・・・」

ももこ

「何あれ!？」

みすず

「チッ・・・やっぱりね・・・アイツら、『エレメント』を使えるんだわ・・・」

ももこ

「エレメント・・・?」

みすず

「詳しい事は後よ!ももちゃん!アタシのホウキに飛び移って!!」

ももこ

「う、うん!!」

トッ!!

みすず

「しっかり捕まってる!!」

カアッ!

ドギャン!!

アイリ

「急にスピードが速なったな・・・」

ソング

「みすずちゃんのエレメントは『光』ね・・・光の球体で体を包み込み、スピードを上げられる・・・うまく使えば、攻撃にも使えるやっかいな代物・・・」

ナナコ

「大丈夫よ！すぐに追いつくから・・・」

みすず

「ここまで来れば、ひとまず大丈夫でしょう・・・」

ももこ

「ハア、ハア・・・」

「ももちゃん、みすずちゃん!!」

パツ！

ももこ

「あいちゃん、おんぷちゃん!」

みすず

「ほのか、りずむ！来てくれたのね!」

ほのか

「当然やないか！」

りずむ

「しつかり届いたよ、みすずのテレパシー！」

ももこ

「どれみちゃんとはづきちゃんは？」

ほのか

「どれみちゃんは小竹君と、はづきちゃんは矢田君と遊びに行ってる。」

りずむ

「一応念のために、さつきとのぞみが2人についてったけどね！」

ももこ

「じゃあ、今回は私達だけか・・・」

ギョオオオオオ・・・

あいこ

「な、なんや？この音・・・」

ギユイイイイン！！

おんぷ

「えええっ！！ノコギリが炎をまとうて飛んできてるっ！！！？」

ほか

「ソラミのエLEMENT、『火』の効果やな！次々に木々をなぎ倒し
よる……」

ももこ

「ええ、そんなのどうするの！？勝てないよう……！」

カツ！

ももこ

「な、何？」

あいこ

「ももちゃんのポロンが、光を……」

りずむ

「ももちゃん！ポロンを上に向けてみて！」

ももこ

「う、うん！」

カツ！

ピッシャアアアン！！

ももこ

「か、雷……！！！」

あいこ

「そうか！ももちゃんのエLEMENTは、雷やったんや！」

カッ！

カッ！

あいこ

「アタシとおんぷちゃんのポロンも、光を・・・」

おんぷ

「使ってみましょ！」

ソラミ

「やっと追いついたわよ・・・」

あいこ

「でやあああ！！」

カッ！

ジャバアアアア！！

ソラミ・ミツキ・アイリ

「ぶわっ！！」

ソング・ナナコ・リップ

「水・・・！！？」

おんぷ「ハアアア！！」

ヒュゴオオオオ！！

カチン・・・

あいこ

「氷や・・・」

おんぷ

「すごいわ、私達のエレメント！」

ももこ

「後とはどめね！」

カッ！

ピッシャアアアン！！！！

ソラミ・ミヅキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ
「キャアアアアアッ！！」

ヒュルルルルル・・・

キラ〜ン・・・

おんぷ

「星になっちゃった・・・」

ももこ

「ま、これにて・・・」

あいこ

「一件落着やな！」

あいこ・おんぷ・ももこ・ほのか・りずむ・みすず
「イエッ！」

第14の呪文：覚醒！どれみ達のエレメント！！（後書き）

どれみ「いいよねえ、あいちゃん達はエレメントが覚醒して・・・」

「

はづき「これだから新入りは・・・」

ぽつぷ「お、お姉ちゃん落ち着いて・・・」

あいこ「それより、岡島君が江戸村に招待してくれるんやってな！」

ももこ「忍者、侍、最高！！！」

ハナ「ももってそういうの好きだから・・・」

おんぷ「何も起こらなきゃ良いけどね・・・」

のぞみ「次回のおジャ魔女どれみドッカ〜ン！は『忍者の世界はベリーグッド！？』よ世界を平和な未来に変えて！！！」

第15の呪文：忍者の世界はペリーグッド!?

MAHO堂

どれみ

「今日も売れ行き好調だね〜!」

はづき

「そうね〜。」

ぼっぷ

「お姉ちゃんの裁縫の腕もだいぶ上がったしね〜。」

あいこ

「週末にはようお菓子とか作ってるんやってな?」

ぼっぷ

「うん!お姉ちゃんのクッキーとてもおいしくってさ〜!週末の楽しみの1つになってるよ。」

ハナ

「そういえば、ももは?」

おんぷ

「なんか、用事済ませてから来るって言ってたけど・・・。」

のぞみ

「このところはソラミ達の襲撃もないからいいけど・・・」

さつき

「あまり1人だけでは出歩かないようにしてくれないと、アタシ達も困るわ。」

ほのか

「そやそや。」

りずむ

「大丈夫よ。今日はみすずがお供についてるって言ってたから・・・」

「

どれみ

「2人共天然だから、余計心配な気がするけど・・・」

あいこ

「言えとるな・・・」

ガチャ！

ももこ

「みんな、グッドニュースだよー！」

はづき

「あ、ももちゃん！」

ぽっぷ

「グッドニュース？」

みすず

「岡島君が、アタシ達をおじいさんの実家がある場所に招待してくれるんだって!」

あいこ

「岡島君の実家いう事は・・・」

おんぷ

「日光江戸村とか?」

みすず

「それよりもっとスゴい場所だって!」

のぞみ

「それは楽しみね!ところで、行く日はいつ?」

ももこ

「来週の日曜日!」

マジョリカ

「ちようどええ。骨休めに行つて来い。」

どれみ・ぽっぷ・ハナ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず

「やった!」

マナ

「（クッククッ、ちょうどいい・・・タッピー楽しませてあげるわ・・・タッピーとね・・・）」

岡島小太郎

「皆さん、こんにちは！」

どれみ

「こんにちは、岡島君！」

あいこ

「ほんで、おじいさんの実家いうんはどこなんや？」

小太郎

「今から案内します。ついて来てください。」

小太郎

「着きました・・・ここがおじい様の実家・・・播磨の忍者村です！！」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ぽっぷ・ハナ・のぞみ・さつき・ほのか・りずむ

「おおっ！！！」

あいこ

「ホンマに忍者がいつぱいやっ！！」

おんぷ

「戦国時代にタイムスリップしたみたいね！」

小太郎

「ところで、ももさん・・・」

ももこ

「わわわっ、ダメだよ小太郎君！みんなの前で・・・」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ぽっぷ

「ももさん・・・？」

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・ハナ

「小太郎君・・・？」

ももこ

「あ・・・しまった・・・」

みすず

「バレちゃったみたいだね・・・2人がつき合ってる事・・・」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ぽっぷ・ハナ・のぞみ・さつき・

ほのか・りずむ

「ええっ！！ももちゃんと岡島君が付き合ってるっ！？」

おんぷ

「これは驚いたわ・・・」

あいこ

「いつの間にやらそこまで関係が進展しとったんやな？」

はづき

「オホホホホ・・・」

ももこ・小太郎

「／／／／・・・／／／／／」

のぞみ

「よく言つよ・・・あいちゃんだってこないだ有馬君との結婚をOKしたクセに」

あいこ

「ギ、ギクウツ！！」

どれみ

「へエ〜！」

おんぷ

「あいちゃんついにアンリマー君と・・・」

はづき

「オホホホホ・・・」

あいこ

「／／／／・・・／／／／／」

りずむ

「ねえみんな、そろそろ忍者村の中見て回る？」

さつき

「そうね。」

ほのか

「賛成やな。」

あいこ・ももこ

「（た、助かった・・・）」

3時間後

あいこ

「たくさん遊んだな。」

おんぷ

「本当ね。」

ぽっぷ

「たくさん遊んだら、お腹空いてきちゃった。」

ほのか

「ウチもや・・・」

さつき

「アタシも・・・」

小太郎

「じゃあ、近くのそば屋に予約入れて来ますよ。ももこさん、行きましょう。」

ももこ

「そうだね、小太郎君！」

タタタ・・・

はづき

「もう名前で呼ぶのに躊躇してないだなんて・・・」

どれみ

「本当に仲良くなったんだね、あの2人・・・」

タンツ！

おんぷ

「！」

あいこ

「マ、マナー！」

ほのか

「他の6人もおる!!」

マナ

「楽しんでるところ悪いけど、邪魔させてもらつよ。」

おんぷ

「ハァ、どうしてこういう時に邪魔しに来るのかしらね・・・」

はづき

「どうしよう!?!」

ハナ

「もうすぐ岡島君が戻って来ちゃうから、迂闊に魔法使えないし・・・」

「・」

さつき

「任しといて。」

スッ!

さつき

「ハアアアアッ!!波動弾!!!!」

ゴッ!!

ソラミ・ミヅキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ・マナ

「キャッ!!!!」

ピュッ!

キラ〜ン！

どれみ

「あらま、一撃で吹っ飛ばしちゃった・・・」

さつき

「さ、続きを楽しみましょう！」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ぽっぷ・ハナ・のぞみ・ほのか・
りずむ・みすず

「そ、そうだね・・・」

第15の呪文：忍者の世界はベリーグッド！？（後書き）

どれみ「さつきちゃんの機転で、どうにかソラミ達を追い払った私達！」

あいこ「そやけど、このままじゃ終わらへん気がするなあ・・・」
おんぷ「なんだって、相手はアイツらだもんね。」

はづき「そんな事を言ってたなら、再び彼女達が襲ってきたわ！」

ハナ「小さいカエル連れて来て何だろうとか思っていたら、いきなり魔法でハナ達小さくされちゃったよー！」

ぽつぷ「しかも、もちゃんがいないこの状況はかなりピンチー！」
のぞみ「小さいカエルも、アタシ達が小さくなれば同じぐらいの大きさだものね・・・」

ほのか「今回こそは、ウチらホンマに絶体絶命やでー！」

さつき「次回のおジャ魔女どれみドッカ〜ン！は『危うし！小さくされちゃった！』よ！世界を平和な未来に変えてー！」

第16の呪文：危うし！小さくされちゃった！！

何とかソラミ達を撃退したどれみ達だったが、ソラミ達はこんな事
できらめるようなヤツらではない。

それは、どれみ達が一番わかっている事だった。

ソラミ

「やられたわ・・・」

ミヅキ

「まさか、あんな手を使ってくるとは・・・」

アイリ

「どうしようか。」

マナ

「それじゃあ、コイツを使いましょう。コイツを使えば、あのおジ
ヤ魔女共もおしまいよ・・・」

どれみ

「え？ここから先は自由行動にする？」

ももこ

「イエース！」

あいこ

「それ、ヤバいんとちゃうの？」

みすず

「大丈夫、アタシがもちゃん達についてるから！」

おんぷ

「それならいいけど・・・」

ももこ

「じゃあ、3時間後にあそこの着せ替え所前で落ち合いましょ。」

どれみ達は、それぞれ別行動をとる事にした。

どれみ達がいなくなった後、そこへやって来たマナ達は不敵な笑みを浮かべた・・・

ももこ

「みすずちゃん、いいの？私達についてきて・・・」

みすず

「平気だよ、私は・・・」

「いいのかな？そんな余裕こいて・・・」

「ももこ・みすず」

「えっ・・・？」

そして3時間後、どれみ達は集合場所に来ていた。

どれみ

「いろんな場所見られて楽しかったね！」

はづき

「そうね。」

あいこ

「そろそろもちゃんらも帰って来てる頃やろ・・・」

そう言って歩いて来たどれみ達の足が、突然止まった。

どれみ

「ア、アイツらは・・・」

のぞみ

「ソラミ達とマナ！」

マナ

「さつきはよくもやってくれたわね・・・お返しさせてもらっわよ。」

「

ほのか

「アホなやつちゃ。これだけの人数に勝てると思てんのか？」

マナ

「確かに人数では不利だわ・・・でも、ももことみすずはいないでしょ？」

おんぷ

「ま、まさか・・・」

ミヅキ

「そうよ、あの2人と一緒にいた男の子は、閉じ込めさせてもらったわ。」

ソング

「助けたければ、私達から聞き出す事ね。」

りずむ

「あなた達・・・許さない！」

どれみ達はコロンタップを取り出し、おジャ魔女に変身した。

その頃・・・

みすず

「うゝん・・・ハッ!!」

みすずは目を覚ました。

みすず

「クッ・・・両手が・・・」

みすずの体と両手は、縄で縛られていた。

みすず

「ももちゃん!ももちゃん!!」

みすずはももこを押した。

ももこ

「ん・・・みすずちゃん?」

みすず

「良かった、気がついたのね。」

ももこは周りを見回し、側に小太郎が倒れているのを確認した。

ももこ

「小太郎君も・・・私達、一体・・・」

みすず

「アイツらに拉致されたみたいね、私達。大方、人数を少しでも減らす気だったんでしょうよ。」

ももこ

「どうしよ、みすずちゃん？」

みすず

「大丈夫よ、ももちゃん！ちょっと手伝ってくれる？」

みすずはそう言つと、履いている右クツを床でこすり始めた。

カシャ、カシャ・・・

やがて、クツの底がフタのように開いた。

カシャン！

ももこ

「あ！クツが？」

みすずがクツを揺らすと、中から小さな道具が出て来た。

バラバラ！

みすず

「マジョトロン特製・魔女見習い7つ道具入りシューズ！私達を甘く見てると・・・後が怖いわよ！」

そう言つと、みすずはタバコのような道具を口にくわえ、ももこの縄に当てた。

次の瞬間、道具から小さな火が出始めた。

ボウ・・・

りずむ

「キ～ラリンリルンラ～ミラ～ミラー！冷却光線・発射ア！！」

ゴヒュウウウウ！！

アイリ

「甘い・・・パメルク～ラルク～ラリロリ～ポップン！重力の圧縮！！」

りずむの冷却光線は、アイリの重力魔法によって押しつぶされた。

ドスン！！

りずむ

「ウソ！！」

マナ

「今度はこっちの番よ。ポ～ロリンピュアリ～ンハナハナ～ピー！どれみ達よ、小さくなれ！！」

ビビッ！！

どれみ・はつき・あいこ・おんぷ・ぽっぷ・ハナ・のぞみ・さつき・ほのか・りずむ

「キャアアアア！！」

どれみ達は小さくなった。

ソング

「プゝルルンプルンファゝミファゝミファー！カエルよ、出てこい
！！」

ボン！

マナ

「どれみ達を食べちゃいなさい。」

ニユルルン！

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ぽっぷ・ハナ・のぞみ・さつき・
ほのか・りずむ

「キャアッ！！」

カエルは舌で小さいどれみ達を捕まえた。

そして、もがくどれみ達をペロリと飲み込んだ。

パクッ！

ゴックン！

マナ

「これでどれみ達も終わりね・・・アッハッハッ！！！」

マナは高笑いした。

一方その頃、ももことみすずは監禁されていた場所から脱出していた。

ちなみに小太郎は、途中で偶然会ったゆき先生に保護してもらっている。

ももこ

「だいぶ足止め食っちゃったね。」

みすず

「ええ。のぞみ達、無事だといいんだけど・・・」

そう言つて走つていた2人の足が止まった。

目の前には、マナ達がいたからだ。

みすず

「やつぱりまた来たのね・・・」

ももこ

「あれ、どれみちゃん達は？」

マナ

「どれみ達なら、このカエルが食べちゃったわよ。ペロリとね。」

ももこ

「ゆ、許さない・・・みすずちゃん!」

みすず

「わかってるわ、ももちゃん!」

ももこ

「ペル〜タンペットンパリラポン!」

みすず

「フェル〜タンフェットンファリラポン!」

ももこ・みすず

「怒りの制裁!」

ドシャン!!

ソラミ・ミヅキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ・マナ
「キャアアアア!」

2人の怒りの魔法で、ソラミ達は吹き飛ばされた。

みすず

「後はどれみちゃん達を助けるだけね!フェル〜タンフェットンファリラポン!真空・一刀両断!」

みすずは魔法で光の剣を出すと、カエルを叩き斬った。

ズバァ!!

どれみ達が出て来た後、カエルは爆発した。

こうして、2人はどれみ達を無事に助け出したのだった。

第16の呪文：危うし！小さくされちゃった！！（後書き）

ももこ「久しぶりに連載再開だけど、今回の話は最初からヤバかったね。」

みずず「そうだね。マナ達はやっぱり油断できない存在だね。」

ももこ「これからはもう少し更新を早くする予定だから、お楽しみにね！」

みずず「さて、次回予告だけど・・・MAHO堂に、謎の植木鉢が届けられたわ。」

ももこ「水をあげなくても成長していくから楽だね」なんて思っていたら、なぜかお店の商品がだんだん減っていつてる！」

みずず「もしかして、この花・・・人食い花！？」

のぞみ「次回のおジャ魔女どれみドツカ〜ン！は『人食い花は大っ嫌い！！』よ。世界を平和な未来に変えて！！」

第17の呪文：人食い花は大っ嫌い！！

MAHO堂

朝早くから、デラがMAHO堂にやって来た。

デラ

「みんな、こんにちは♪」

ハナ

「こんにちは♪、デラ♪」

マジヨリカ

「今日は何の用じゃ？支払いは月末じゃろ。」

デラ

「実はこの前、MAHO堂宛てにお届け物を預かってたの。今日配達って記してあったから、早めに持って来たのよ。」

どれみ

「中身は何なの？」

デラ

「割れ物な事は確かね。とにかく机の上に置いておくから、後はヨロシクね。」

そう言うと、デラはダンボール箱を机の上に出現させ、ポンッと消えた。

はづき

「何なのかしら、中身。」

ほのか

「案外爆弾とか？」

りずむ

「誰がそんな物騒な物をMAHO堂宛てに贈って来るワケ？」

あいこ

「それもそうやんなあ。」

のぞみ

「みんな、離れて。私が開けるわ。」

どれみ達は机から離れた。

のぞみはカッターを持って来ると、ガムテープに切れ目を入れていく。

ほどなく、ガムテープは2つに切れた。

のぞみはゆつくりとフタを開ける。

そこから出て来たのは・・・

のぞみ

「これって・・・植木鉢？」

そう、ダンボールの中に入っていたのは小さな植木鉢だった。

どれみ

「植木鉢ね・・・」

ほのか

「植木鉢やな・・・」

さつき

「花の種まで入ってるわね・・・」

りずむ

「誰が送ってきたのかしら？」

おんぷ

「さあね。オヤジーデじゃないの？」

ハナ

「それはちがうよ。こないだ私魔法使い界に行っただけど、オヤジーデ何も買ってなかったもん。」

ももこ

「じゃあ一体誰が・・・？」

みすず

「うーん・・・」

どれみ達は、植木鉢と種の送り主について考えていた。

彼女達にそれを送りつた張本人は、MAHO堂の屋根の上で密かに笑っていた・・・

それから1週間後・・・

どれみ

「ありがとうございました！」

どれみ達はいつものように営業を終える。

今日のMAHO堂も大繁盛であつた。

どれみ

「じゃあ、私達帰るからね。」

ハナ

「うん、また明日ね。」

ハナはどれみ達6人を見送った。

のぞみ

「じゃあ、アタシ達夕食の買い出しに行つて来るわね。」

ハナ

「うん。」

のぞみ達5人は買い物に出かけた。

ハナ

「さてと、私はちょっと上でお昼寝して来ようかな。」

ハナはそう呟くと、2階へと上がって行った。

植木鉢から少し笑い声がしていたのにも気づかずに・・・

1時間ほどしてハナが2階から下りて来ると、ちよつどのぞみ達も帰って来ていた。

ハナ

「あ、のぞみ達お帰り!!」

のぞみ

「ええ、ただいまハナちゃん!」

さつき

「ねえ、のぞみ。何か変な感じしない?」

のぞみ

「何がよ、さつき?」

ほか

「うん、ウチもおかしいと思った!」

りずむ

「見て、のぞみ。何かMAHO堂の品物が少し減ってる気がしない?」

のぞみ

「ん？」

のぞみが店の中を見渡すと、確かに少々減っている気がした。

のぞみ

「確かに減っているわね。」

みすず

「今日も結構商品売れたけど、私達が出かける前はもう少し余ってたハズよ？」

さつき

「妙ね・・・どうして商品が減ったのかしら？」

ほのか

「もしかして、ウチらが出かけてる間に客とか来た？」

ハナ

「ううん、私少しの間上で寝てたけど、誰もお客さん来なかったよ？来たら呼び鈴が鳴るハズだもん。」

りずむ

「それもそうよね。だとしたらますます妙だね。なぜ商品が減ったのかしら？」

のぞみ

「まあここで議論しても変わらないわ。上の部屋で多めに商品作っておきましょ？明日の分もね。」

さつき

「それもそうね、のぞみの言う通りだね。」

ほのか

「そうしまつか。」

りずむ・みすず

「ええ。」

のぞみ達は、2階へと上がって行った。

翌日

1人早くに目を覚ましたみすずは、1階に下りて来ていた。

みすず

「ふああ、よく寝たあ・・・」

みすずは目をこすっている。

みすず

「ん・・・?」

みすずは店内を見回した。

みすず

「ど、どうなってるのこれ!? 昨日の夜より明らかに減ってるじゃ

ない!!」

そう、昨日の夜のぞみ達が確認した時よりも明らかに商品の数が減っていたのだ。

みすず

「まだ開店していないのに、なぜ商品が減ってるの!? ハッ! まさか・・・」

みすずは植木鉢に近づいた。

みすず

「この植木鉢の花が怪しい気がするんだけど・・・」

みすずは植木鉢をのぞき込む。

と、その時・・・

『シャアアアア!』

急に植木鉢から叫び声が上がった。

みすず

「キャアッ!？」

みすずは後退りする。

みすず

「何この花!? 奇声を上げた!？」

みすずが驚いていると、花は急成長を始めた。

グングングン・・・

そして、花は天井に届くくらいに大きくなったのだ。

『シャアアアア・・・』

みすず

「ど、どうなってるのこの花・・・」

みすずが後退りすると、花が牙を生やした。

そして、突然みすずに襲いかかって来たのだ。

『シャアアアアア！！』

ガバア！！

みすず

「キャー！！！」

悲鳴を上げるみすず。

そして次の瞬間、みすずは花に噛みつかれた。

ガブッ！！

みすず

「ぶぐうううう！！！」

のぞみ

「どうしたの、みすず!？」

みすずの悲鳴を聞きつけたのぞみ達4人が、1階へと降りて来た。

さつき

「ああ!！」

ほか

「何やこれ!？」

のぞみ達が見たのは、巨大な花に噛みつかれているみすずの姿だった。

りずむ

「み、みすず!！」

のぞみ達が叫ぶと、花はそのままみすずを飲み込んだ。

ゴックン!!

『シャッ』

花はペロリと舌を出した。

さつき

「た、食べちゃった・・・みすずを・・・」

後退りするさつき。

ほか

「そうか、商品がなくなったんはこの花の仕業やったんやな・・・」

りずむ

「そうみたいね、ほか。でも、冷静に状況判断をしてる場合じゃなさそうよ・・・」

りずむがそう言うと同時に、花はのぞみ達の方を向いた。

クルッ・・・

のぞみ・さつき・ほか・りずむ

「ヒッ!!」

『シャアアアア!!』

花は牙をむき、のぞみ達に襲いかかって来た。

グオッ!!

のぞみ達は、散り散りになった。

ババッ!!

ズドン!!

ハナ

「な、何今の音!？」

音に気づいたハナが、下に降りて来た。

のぞみ

「ハナちゃんはここにいて！」

さつき

「絶対に追って来ちゃダメよ!!」

そう言うと、のぞみ達はMAHO堂の外に飛び出した。

『シャアアアア!!』

花は植木鉢から飛び出すと、のぞみ達を追い始めた。

のぞみ達は、人気のない森までやって来た。

さつき

「ここまで来れば、一般人に迷惑はかからないわ・・・」

のぞみ

「さつき、ほのか、りずむ!いくわよ!!」

さつき・ほのか・りずむ

「はい!!」

のぞみ達4人は、同時に変身した。

のぞみ

「パウラ〜ピラルペ〜ルペルパ〜ウピウレ！」

さつき

「ライライロ〜ンフォイリ〜ラリ〜ラフー！」

ほのか

「フレムク〜フルク〜ファイアリ〜フォールン！」

りずむ

「キ〜ラリンリルンラ〜ミラ〜ミラー！」

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ

「一斉砲撃！！！」

4人は一気に魔法を放った。

しかし、花は触手を使って砲撃を防いだ。

ガキイイン！！

のぞみ

「そ、そんな！！！」

さつき

「みずぐいがないからとはいえ、私達の上級魔法が通じないなんて！！！」

ほのか

「どないしたらええねん！？」

りずむ

「ヤバイかも・・・」

のぞみ達が慌てていると、花は触手をちらつかせ始めた。

『シャアアアア！！』

そして、触手をのぞみ達に向けて伸ばしてきた。

ドシュツ！！

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ

「キャ・・・キャアアアア！！」

のぞみ達は伸びて来た触手によって4人まとめて巻かれた。

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ

「キャアアアア！！」

のぞみ達はそのまま引っ張られ、花に丸飲みになれてしまった。

パクツ！！

モグモグ・・・

ゴクン！！

のぞみ達を飲み込んだ花は、満足そうな顔をした。

しばらくして、のぞみ達を心配したハナがやって来た。

ハナ

「のぞみ、さつき、ほのか、りずむ！どこ！？」

ハナは辺りを見回しながら叫ぶ。

すると、少し遠くから『誰か助けてー！！』という呻くような叫び声が聞こえてきた。

ハナ

「この声はのぞみ達の・・・まさか！？」

ハナはそのまま走る。

しばらく走ると、そこにはMAHO堂にいた巨大花の姿があった。

ハナ

「この巨大花・・・もしかしてのぞみ達を飲み込んだの？」

ハナが呟くと、花はハナの方を向いた。

『シャッ！！』

そして、ハナの方へと向かって来る。

ハナ

「私も食べる気？育ち盛りなのは良い事だけど、狙う相手を間違えたね！」

そう言うと、ハナは魔女見習いに変身した。

ハナ

「ポ〜ロリンピュアリ〜ンハナハナ〜ピー！聖なる矢の雨よ、降り注いで！〜！」

ハナが呪文を唱えると、矢の雨が巨大花を直撃した。

ドドドドドオ！！

『グエツ・・・！？』

巨大花はたまらず、のぞみ達を吐き出した。

ペッ！

のぞみ達は、地面に着地する。

トッ！

のぞみ

「た、助かったわ・・・」

ほのか

「おおきにな、ハナちゃん。」

ハナ

「どういたしまして。さあて、あの花にお仕置きする時間だね！」

そう言うと、ハナは両手を前にかざした。

ハナ

「邪悪な魔物を浄化する、聖なる薔薇を咲かせましょう！ポロリンピュアリ〜ンハナハナ〜ピー！！ホーリーローズ・バニシード！！！」

ハナが叫ぶと、白い巨大な薔薇がハナの両手から飛び出した。

ドシュツ！！

そして、巨大花を包み込み一気に爆破した。

ドゴオオオオン！！！！

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず
「ス、スゴい……」

ハナ

「エヘッ♪」

ハナはいつもの笑顔を見せる。

しかし、MAHO堂に例の植木鉢を贈った人物が近くでハナ達を監視していた事を、彼女達は知るよしもなかった……

第17の呪文：人食い花は大っ嫌い！！（後書き）

のぞみ「今回は私達、本当にヤバかったわね。」

さつき「そうね。ハナちゃんが助けに来てくれなかったらどうなっていた事か・・・」

ほのか「ホンマにおおきにな、ハナちゃん。」

ハナ「うん」

りずむ「それにしてもスゴかったわ、ハナちゃんの新しい力・・・」
みずず「マジョボルトやソラミ達が知ったら、警戒するでしょうね・

・・・」

ほのか「って言うてたら、ホンマに来よったんやけど・・・」

さつき「来て欲しくないわね、こんな時には・・・」

のぞみ「次回のおジャ魔女どれみドツカーン！は『ソラミ達の襲撃、再び！！』よ！魔法よ世界を平和に変えて！！」

第18の呪文：ソラミ達の襲撃、再び！！

MAHO堂

どれみ達は、いつも通り店を営業していた。

今日も相変わらず大盛況だ。

やがて、営業が終わる。

どれみ

「今日もたくさん売れたね。」

はづき

「そうね。」

あいこ

「りずむちゃんとおんぷちゃんも手伝ってくれたから、よう商品が売れたなあ。」

みすず

「そうね。それにしても、このところマジョボルトの手下達の襲撃もないわね。」

さつき

「そういえばそうね。まあ、来ない方がありがたいんだけど。」

ほのか

「そやなあ・・・」

おんぷ

「そんな事言ってる、今に向こうから来るかもよ?」

ももこ

「まさかあ。そんな事なんて滅多には・・・」

ソラミ

「おジャ魔女共!!」

アイリ

「勝負よ!!」

ソラミ達の声が聞こえてきた。

りずむ

「うわ、ホントに来ちゃったよ・・・」

さつき

「めんどくさ・・・」

ミヅキ

「めんどくさいとか言っちなあ!!」

アイリ

「そやそや!!」

みすず

「そんな事言われたって・・・ねえ?」

ほのか

「まあなあ・・・」

ソング

「こらあゝ!!」

リップ

「とにかく、お店クローズして表に出なさい!!」

あいこ

「なあ、どないする?」

どれみ

「うゝん・・・」

ソラミ

「コラア、相談するなあゝ!!」

のぞみ

「あ、そうだ! 私達、魔女界に用があるから・・・どれみちゃん達、先に相手しておいてくれない?」

おんぷ

「そうねえ・・・」

ももこ

「めんどくさいけど相手しとくとしめますか・・・」

ミヅキ

「めんどくさそうな顔するなあゝ!!」

ほのか

「ほな、ウチらちよつと行つて来るから・・・」

のぞみ達は、魔女界に通じる扉から魔女界へと向かった。

どれみ

「さて、どこでアタシ達の相手するの？」

アイリ

「さすがのアタシ達も、こんな人目につくような場所では戦えないわ。確か美空町の外れに森があつたわよね？」

ソング

「ええ、滅多に人も来ないから隠れ家を作るのに最適の場所だったわね。」

あいこ

「隠れ家なんか作つとつたんかいな、アンタら・・・」

ナナコ

「まあね。とりあえず、その森に行くわよ。」

どれみ達は、美空町外れの森へと向かった。

リップ

「ここなら誰も来ないわ。」

ミヅキ

「さあ、思う存分戦いましょう!!」

どれみ

「望むところよ!みんな!!」

はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ハナ

「ええ!!」

どれみ達6人は、一斉に変身した。

ソラミ

「こっちも変身するわよ!!」

ミヅキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ

「ええ!!」

ソラミ達6人も、一斉に変身した。

どれみ

「ピリカピリラポリナペペルト!木々の葉っぱよ、ソラミとリップを攻撃して!!」

どれみが呪文を唱えると、木の葉っぱが一斉にソラミとリップを攻撃した。

ズバババババ!!

ソラミ・リップ

「くうっ・・・!!」

はづき

「パイパイポーンポイプーンワプーンワプー!」

あいこ

「パメルクーンラルクーンラリロリーンポップン!」

はづき・あいこ

「ツタよ、ミツキとアイリを攻撃して!!」

はづきとあいこの呪文で、木のツタがミツキとアイリを攻撃した。

ギョオ!

バシュ!!

ミツキ・アイリ

「ガッ!!」

おんぷ

「プーンプルンファーンミファーンミファーン!」

ももこ

「ペルーンタンペットンパリラポン!」

おんぷ・ももこ

「氷と電気の弾丸よ、ソングとナナコを攻撃して!!」

おんぶとももこの呪文で、氷と電気の弾丸がソングとナナコを襲った。

ガガガガガ!!

ソング・ナナコ

「キャアアアア!!」

ソラミ達6人は、片膝をついた。

ガクン!

ソラミ・ミヅキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ
「うう・・・」

どれみ

「トドメよ、みんな!!」

はづき・あいこ・おんぶ・ももこ・ハナ
「ええ!!」

どれみ

「ピリカピリララのびやかに・・・」

はづき

「パイパイポーンポイしなやかに・・・」

あいこ

「パメルクルラルクル高らかに・・・」

おんぷ

「プゝルルンプルン涼やかにゝ・・・」

ももこ

「ペルゝタンペットン爽やかにゝ・・・」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ

「マジカルステージ！！ファイブマジカル・ビーム！！」

どれみ達は、強大な呪文を放った。

ドン！！

しかし、ソラミ達は平然としている。

そしてフツと笑うと、6人が見た事もない武器を取り出した。

スッ！

ソラミ

「フレイムフルーレ！憎らかな闇！！」

ミヅキ

「バブルスフルーレ！荒らかな闇！！」

アイリ

「グランドフルーレ！暗らかな闇！！」

ソング

「エアロスフルーレ！冷ややかな闇！！」

ナナコ

「ストーンフルーレ！安らかな闇！！」

リップ

「フロストフルーレ！醜くやかな闇！！」

ソラミ・ミヅキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ

「6つの闇よ、光を引き裂け！！ダークネスマジカル・ヘキサゴン
ノクターン！！！！」

ソラミ達は謎の武器で、合体攻撃を繰り出した。

ドン！！

そのまま2つの呪文は衝突し、どれみ達の呪文が消し飛んだ。

バシユ！！

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ

「そ、そんな・・・！！」

ハナ

「どれみ達下がって！！邪悪な魔女達を浄化する、聖なる薔薇を咲
かせましょう！！ポロリンピュアリーハナハナ〜ピー！！ホー
リーローズ・バニシード！！！！」

ハナも、人食い花を消し飛ばした呪文を放った。

ドシユ！！

だが・・・

ソラミ・ミヅキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ

「ダークネスマジカル・ヘキサゴンプレリユード!!!!」

ソラミ達はまた新しい呪文を放った。

呪文はその場に留まると、盾のように変化しハナの呪文を真正面から受けた。

ドォン!!

そしてその盾からムチのようなものが出現し、ハナの呪文を巻き取って、あっという間に消し飛ばした。

バシュウウウ!!

ハナ

「ウ、ウソ!!私の呪文まで・・・!!!?」

ソラミ・ミヅキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ

「クッククク・・・あなた達、もう終わりねえ・・・」

ソラミ達は、ゆっくりとどれみ達に近寄って来る。

ザッザッザッ・・・

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ハナ

「あ・・・ああ・・・」

どれみ達は震えながら、後退り始めた・・・

いつもとちがい、圧倒的な強さでどれみ達を追い詰めるソラミ達！！

このままどれみ達は、負けてしまうのか・・・！？

第18の呪文：ソラミ達の襲撃、再び！！（後書き）

どれみ「またソラミ達が襲撃して来たけど、まさかあんなに強くなってるなんてね・・・」

はづき「彼女達が持つてる武器って、今日曜日の朝にやってるアニメのパロディなのよね？」

あいこ「気づく人は気づくやろうな。」

おんぷ「徐々に追い詰められるアタシ達、そこに何とオヤジデーが！！」

ももこ「どうして彼がここに・・・あ！どれみちゃんが危ない！！」
あいこ「オヤジデー向かって行こうとしてるで！！？」

ハナ「オヤジデー、何をする気なの！！？」

どれみ「次回のおジャ魔女どれみドッカ～ン！は『さらば、オヤジデー！悲劇のお別れ！？』よ！世界を平和な未来に変えて！！」

第19の呪文：さらば、オヤジーデ！悲劇のお別れ！？

マジョボルトの弟子であり、かつてマジョリカの元で魔女見習いの修業をしていたソラミ達6人の魔女っ娘。

今までどれみ達を1人ずつ襲っていた彼女達だったが、遂に6人全員が動き出した。

どれみ達をまとめて倒そうとするソラミ達に、どれみ達は最初苦戦する。

強力な魔法を活用し、一時はソラミ達を追い詰めたどれみ達。

しかし、どれみ達がマジカルステージでソラミ達を倒そうとしたまさにその時、ソラミ達は得体の知れない武器を取り出し、どれみ達のマジカルステージを打ち破った。

そして、ハナの必殺技までも破って見せたのだ・・・！！

どれみ

「な・・・何なの！？ソラミ達のこの力・・・」

はづき

「私達のマジカルステージを打ち破った上に、ハナちゃんの最大呪文まで打ち破るなんて・・・」

あいこ

「何やねん、アイツらのあの武器は!？」

おんぷ

「私、前に魔女界であれと同じ物を見た気がするんだけど・・・思
い出せないわ・・・」

ももこ

「魔女界に似た物があつたって・・・どういう事なの!？」

どれみ達の間疑問が浮かぶ。

ソラミ

「そんな事、気にしなくて良いのよ。」

ミヅキ

「どうせあなた達は、ここで死ぬのだからね。」

アイリ

「ほな、覚悟してもらおか。」

ソラミ達はどれみ達に近づく。

はづき

「そうはいかないわ!！」

あいこ

「アタシらはこんなトコで負けとられへんのや!！」

おんぷ

「そうよ!!--私達は必ず、のんちゃん達に協力するんだから・・・」

ソング

「見上げた根性だね。でも、それもいつまで続くかしら？」

ナナコ

「出でよ、バルンテ！！」

ソラミ達はポロンを振ると、風船のような魔物を多数召喚した。

ボン！！

ハナ

「魔物達は私が食い止める！！どれみ達はソラミ達を！！」

ハナが両手を広げた。

ももこ

「ゴメン、任せるよハナちゃん！！」

どれみ

「みんな、行くわよ！！」

はづき・あいこ・おんぷ・ももこ

「ええ！！」

どれみ達はそれぞれ武器を召喚すると、ソラミ達に向かって行った。

ドンッ！！

ソラミ

「あなたは、アタシ達の武器の事をナメすぎてる・・・このダークフルーレの威力、思い知るが良いわ!!」

ソラミ達はそれぞれダークフルーレを持った。

ソラミ

「フレイムフルーレ! 火炎放射!!」

ミヅキ

「バブルスフルーレ! 水流放水!!」

アイリ

「グラントフルーレ! 重力地震!!」

ソング

「エアロスフルーレ! 竜巻光線!!」

ナナコ

「ストーンフルーレ! 岩石雪崩!!」

リップ

「フロストフルーレ! 氷塊豪雪!!」

ソラミは火炎放射を、ミヅキは水流の光線を、アイリは強烈な重力を、ソングは竜巻の光線を、ナナコは無数の岩石を、そしてリップは氷雪の粒子をそれぞれフルーレにまとわせた。

ゴゴゴゴゴ...

ソラミ・ミヅキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ

「喰らえ!!」

ソラミ達は一斉に攻撃を放った。

ドンッ!!

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ

「マジカルステージ!!バリアブルシールド!!」

どれみ達はマジカルステージで巨大な盾を召喚した。

ドォン!!

ソラミ達の攻撃が、盾にブチ当たる。

ズドッ!!

ミヅキ

「マジカルステージで盾を出すのは悪くない戦法だわ・・・」

アイリ

「そやけど、人数の上ではウチらが上・・・」

ソング

「哀しきかな、力の差が歴然ね・・・」

盾にヒビが入り始め、破壊された。

ビキビキ・・・

バリィン!!!

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ
「キャアアアア!!!」

どれみ達は吹っ飛ばされる。

ハナ

「どれみ!はづき!あいこ!おんぷ!ももこ!」

ハナは叫んだ。

ソラミ

「さあ、お休みの時間よ・・・」

ソラミ達は、再びフルーレを構えた。

ジャキッ!

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ
「うう・・・」

どれみ達は目を瞑る。

ソラミ

「覚悟しなさい・・・」

ソラミ・ミヅキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ
「ダークネスマジカル・レクイエムバーン!!!!」

ドンー!!

ソラミ達が魔法を放った、その時だった。

「アレキサンドル・ヴァリアブルハンズ!!!」

遠くから大声が聞こえてきたのは。

そしてその途端、巨大な手が現れソラミ達の攻撃を受け止めた。

ドドオオオ!!!

ソラミ

「なっ・・・」

ミヅキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ

「何が起こった!？」

シュウウウウ・・・

「危ないところでしたね、どれみちゃん達。」

スタツ!

どれみ

「あ、あなたは・・・」

はづき・あいこ・おんぷ・ももこ

「オヤジーデ!!!」

そう、ソラミ達の攻撃を受け止めたのは、オヤジデであった。

オヤジデ

「お久しぶりです。」

ハナ

「でも、どうしてオヤジデがここに!？」

オヤジデ

「女王様経由で、マジヨミラー先生から指令を受けたんですよ。どれみちゃん達に手を貸して欲しいとね・・・」

ソラミ

「フーン、女王様直々の命で来たワケ・・・」

ミヅキ

「だけど、アタシ達に勝てると思ってるのかしら？」

オヤジデ

「思っていますよ？所詮子供と大人では、場数を踏んだ数がちがいますしねえ・・・」

オヤジデは不敵に笑う。

アイリ

「生意気なやつちゃ・・・」

ソング

「すぐに後悔させてやる・・・」

ナナコ

「あまりアタシ達ナメるな・・・」

リップ

「覚悟しなさい・・・」

ソラミ達はダークフルーレを持つと、オヤジーデに突っ込んだ。

ドンッ!!

ソラミ・ミヅキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ

「オオオオオオ・・・」

オヤジーデ

「そちらこそ・・・あまり私を見くびらないでいただきたい・・・アレキサンドル・ヴァンパニアンボデー!!!」

オヤジーデが杖を振り叫ぶと、彼の背中にコウモリの翼が生えた。

バサアッ!!

ソラミ

「せ、背中に翼が!?!」

オヤジーデ

「ハアアアア・・・ハッ!!」

オヤジーデは飛び出した。

ドンッ!!

ミヅキ

「は、速っ・・・」

オヤジーデ

「オオオオオ！！」

オヤジーデは杖を振り、ミヅキを弾き飛ばした。

ドカァ！！

ミヅキ

「キャン！！」

アイリ・ソング

「ミ、ミヅ・・・」

オヤジーデ

「自分の防御がお留守だぜ？」

アイリ・ソング

「え・・・！？」

オヤジーデ

「ゼエイ！！」

オヤジーデは杖を振り回すと、風の衝撃波でアイリとソングを吹き飛ばした。

ゴオオオオオ！！

アイリ・ソング

「キャアアアア!!」

リップ

「な、何なのコイツ!？」

ナナコ

「メチャクチャ強いじゃない!!」

オヤジデ

「当たり前だ。オレを誰だと思っている?魔法使い界でも屈指の腕を持つ占い師、並びに怪盗だったのだ・・・身体の鍛え方も、通常の魔法使いとははるかに異なる!!」

リップ

「ク、クソ・・・」

リップは氷のつぶてを発射した。

ヒュガガガガ!!

オヤジデ

「だから言っているだろう・・・遅いのだ。」

ギュン!!

オヤジデはリップの目の前に近づいた。

リップ

「ヒッ・・・」

オヤジーデ

「ゴオオオオウ!!」

オヤジーデは杖でリップを強打した。

ドゴオ!!

リップ

「カハッ・・・」

リップは倒れ込む。

オヤジーデ

「さあ、後はオマエ達2人だけだ・・・」

あいこ

「オヤジーデ、アタシら3人も加勢するで!!」

あいこ・おんぷ・ももこの3人がポロンを構えた。

オヤジーデ

「恩に着る・・・」

はづき

「ハナちゃん、私も加勢するわ!!」

はづきはハナと共にバルンテを攻撃し始めた。

オヤジーデ達4人は、ソラミとナナコを相手にしている。

しかし、ナナコの目は別の方向を向いていた。

そう、どれみの方に・・・

ナナコ

「このままでは、アタシ達はマジョボルト様に咎められる・・・せめて、手土産だけでも持って帰らねば・・・」

ナナコはどれみの方に飛んだ。

ドンッ！！

どれみ

「えっ・・・！！」

ナナコ

「ストーンフルーレの力で、オマエを石像にしてやる・・・」

ナナコはフルーレを構えている。

あいこ

「アカン！！アイツどれみちゃんを石にする気や！！」

おんぷ

「この距離からじゃ、間に合わない！！」

オヤジーデ

「チィッ！！」

オヤジデはどれみの方に飛ぶ。

ギョーン!!

ナナコ

「ストーンフルーレ・・・春風どれみを、石像に変えよ!!」

ナナコは呪文を唱えた。

どれみ

「・・・!!」

どれみが目を瞑った、その時だった。

オヤジデがどれみをかばい、代わりに呪文を受けたのは。

ドン!!

ナナコ

「何!?!」

オヤジデ

「クッ・・・!!」

ビキ、ビキキ・・・

どれみ

「オ、オヤジデ・・・さん・・・」

どれみは泣きそうになっている。

オヤジーデ

「どれみ・・・ちゃん・・・」

どれみ

「な、何です？」

オヤジーデ

「泣くな、この呪文では私は死なん・・・必ずまた目覚めるから・・・それより、覚えておくんだ・・・マジヨボルトとマナという2つの闇を砕くのは、18人の魔女見習いが6人ずつ合体して生まれる3人の伝説の魔女だ・・・」

どれみ

「18人の魔女見習い・・・？アタシ達は今、12人よ？」

オヤジーデ

「直にわかる時が来る・・・すぐに、な・・・」

その言葉を最後に、オヤジーデは石像と化した。

ビキキ・・・

どれみ

「オヤジーデッ！！！！」

おんぷ

「そんな・・・オヤジーデが・・・」

はづき・あいこ・ももこ・ハナ
「うう・・・」

はづき達5人も、泣き出した。

マナ

「手こずっているようね、ソラミ達・・・」

ソラミ

「マナ様・・・!!」

ソラミ達とどれみ達の前に、マナが現れた。

ブン!

ソラミ

「も、申し訳ありません・・・あのオヤジデという魔法使いに妨害を受けまして・・・」

マナ

「別に良いわよ。その魔法使いも今や石像・・・もうアタシ達を邪魔する要素はなくなった・・・バルボール!!」

マナは巨大な気球のような魔物を召喚した。

マナ

「この子達を弱らせなさい! 弱ったところで、まとめて石像に変えてあげる・・・」

「そうはさせない!!」

マナ

「!?!」

突然の越えにマナが辺りを見回すと、のぞみ達が現れた。

ザンツ!

さつき

「間に合ったわね・・・」

ほのか

「間一髪やったけどな・・・」

りずむ

「どれみちゃん達、待たせてゴメン!」

みすず

「すぐに終わらせるから・・・」

のぞみ

「行くわよ、みんな!」

さつき・ほのか・りずむ・みすず

「はい!!」

5人の声と共に、マジヨルカが現れた。

マジヨルカ

「のぞみちゃん達に力を!!」

マジョルカが叫ぶと、緑・灰・水・黒・白の物体が飛んで来た。

ギョオ！！

のぞみ達はそれぞれ物体をキャッチする。

パシッ！

のぞみ

「ウインディフルーレ！静やかな光！！」

さつき

「フォレストフルーレ！淑やかな光！！」

ほのか

「ボルケーノフルーレ！麗らかな光！！」

りずむ

「グレイシャフルーレ！艶やかな光！！」

みすず

「ティンクルフルーレ！鮮やかな光！！」

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず

「5つの光が闇を貫く！！おジャ魔女・ペンデュラムスター・ダストクラッシュ！！！！」

のぞみ達は武器を前に突き出した。

ジャキツ！

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず

「ハッ！！」

5つの巨大な星が、1つの超巨大な星となってマナ達に向かって行く。

ゴォッ！！

マナ

「マズいわね・・・撤退するわよ！ソラミ、ナナコ！！」

ソラミ・ナナコ

「はい！！」

マナ達3人は、ミヅキ達4人を連れて逃げた。

ヒュン！！

その直後、バルボールにのぞみ達の攻撃が直撃する。

ドゴォ！！

バルボールを押し潰した星は空に舞い上がり、無数の星となって飛び散った。

ゴォォ・・・

パァン！！

ハナ

「何とか追い払ったね・・・」

はづき

「でも、オヤジデが・・・」

マジョルカ

「彼の事はFLAT4の4人に任せる。とりあえず、魔女界に向かう。」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ハナ
「そうですね・・・」

どれみ達は後からやって来た暁達にその場を任せ、のぞみ達と共に魔女界へと向かった。

第19の呪文：さらば、オヤジーデ！悲劇のお別れ！？（後書き）

どれみ「何とかソラミ達を退ける事ができたね！」

はづき「でも、オヤジーデさんが石像にされてしまったわ・・・」

あいこ「向こうは強力な武器持つとうし、マナもあないな強さやし・・・」

おんぷ「これ、もう絶望的よね・・・」

ももこ「このまま降参するしかないの～！？」

「そんな事はありません・・・どれみちゃん達を強くする方法も、ちゃんとあるのです・・・」

ハナ「あ、あなたは・・・」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ「魔女界の女王様！！」

のぞみ「次回のおジャ魔女どれみドツカ～ン！は『復活のロイヤルパトレーヌ！！』よ！世界を平和な未来に変えて！！」

第20の呪文：復活のロイヤルパトレーヌ！！

どれみ達は、魔女界へとやって来た。

どれみ

「魔女界に来るのって、女王様からプロベーション・インカムをもらって以来だね・・・」

はづき

「そうね。」

あいこ

「今度は何の用なんやる？」

どれみ達はそう言い合いながら、女王の間へと向かった。

どれみ達は謁見用のマントを着て、女王様に会った。

魔女界の女王様『来てくれましたね、どれみちゃん達。良く無事でいてくれました・・・』

マジョリン

「どれみちゃん達を代表して、のぞみちゃんが状況報告をしてください。」

のぞみ

「はい!!」

のぞみは少し前に出た。

のぞみ

「ソラミ達はあれから、どれみちゃん達をそれぞれ1人ずつ襲撃して来ました。アイリがあいこちゃん、ソングがおんぷちゃん、ナナコがもこちゃんと、1人ずつね。そしてついには、全員を狙って襲って来ました。」

魔女界の女王様『それで、撃退はできたのですね?』

のぞみ

「はい、アタシ達の手で何とか撃退はできました。ですが・・・先程暁君達に連絡した通り、オヤジーデさんが石像にされてしまいました・・・」

魔女界の女王様『そうですか・・・』

女王様は横を向く。

すると、どれみが口を開いた。

どれみ

「あの、女王様・・・」

魔女界の女王様『何ですか、どれみちゃん?』

はづき

「私達に力をください！ソラミ達や、マジョボルトとマナに勝てる力を！！」

あいこ

「このままじゃアタシら、のんちゃん達の足手まといになってまう・
・・」

おんぷ

「アタシ達が弱かったから、オヤジーデが石像にされてしまった・
・」

ももこ

「もうあんな思いはたくさんなんです！！お願いします！！」

はづき達4人も、口々に言った。

魔女界の女王様『本当に、覚悟はできてるんですね・・・？』

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ

「はい！！」

どれみ達は、力強く返事する。

魔女界の女王様『あなた達の覚悟、本気のようなですね・・・マジョリン、例の物を！！』

マジョリン

「はい、女王様。」

マジョリンが指をパチンと鳴らすと、何かが描かれている紙が現れ

た。

ボンッ！！

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ

「こ、これは・・・！？」

マジョリン

「女王様がマジョトロンに開発させた、マジョフルーレという道具の最新型の設計図です。」

はづき

「マジョフルーレって・・・」

あいこ

「のんちゃん達が持つとう武器の事か？」

のぞみ

「ええ。アタシ達のは去年支給されたタイプのヤツよ。」

ももこ

「そうだったの・・・」

魔女界の女王様『この道具の製作状況は既に中盤ですが、完成させるにはある物が必要なのです・・・』

おんぷ

「ある物？」

魔女界の女王様『どれみちゃん達それぞれの、エレメントです。』

どれみ

「エレメントって、もしかして・・・」

はづき

「あいちゃん達3人がこないだ目覚めた新しい力の事ですか？」

魔女界の女王様『ええ、そうです・・・マジョフルーレを完成させるためには、どれみちゃん達のエレメントの力が必要なのです・・・』

マジョリン

「魔女見習い、及び魔女のエレメントは、特定の条件を満たした時に目覚めると言われています・・・」

あいこ

「ほな、アタシら3人が先にエレメントに目覚めたんは・・・」

おんぷ

「特定の条件を満たしていたから？」

マジョリン

「そうです。条件は魔女見習い及び魔女によって微妙に異なりますが、『何かしらに迷いの答えを出した』時に覚醒する事が一番多いですね。」

どれみ

「じゃあ、アタシ達も条件を満たせば・・・」

はづき

「エレメントを覚醒させられるんですね？」

魔女界の女王様『そういう事です。マジヨリン、どれみちゃん達に例の物を。』

マジヨリン

「わかりました。ではどれみちゃん達、ポロンを私の方に向けてください。」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ

「はい。」

どれみ達5人は、ポロンをマジヨリンに向けた。

マジヨリン

「ロイヤルパトレーヌの聖なる力よ・・・どれみちゃん達のポロンに宿れ！！」

マジヨリンが両手をポロンにかざすと、どれみ達のポロンに5つの光が入った。

パアアアア・・・

魔女界の女王様『これで、どれみちゃん達は再びロイヤルパトレーヌの姿になる事ができます。ロイヤルパトレーヌになる時は、マジカルステージで『聖なる力よ、私達に力を与えて』と叫ぶのです。良いですね？』

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ

「はい！！」

のぞみ

「アタシ達5人も同じ力をもらったの。これからはこの力で頑張りますよ！」

どれみ

「うん！」

魔女界の女王様『最後にハナちゃん。あなたはある武器を使いこなせるようにするため、魔女界でしばらく修業してもらいます。』

ハナ

「修業、ですか？」

魔女界の女王様『ええ。ソラミ達がダークフルーレを使って来るようになった以上、あなたにも武器を所持してもらいます。もう武器は完成しておりますので、しばらくは・・・』

マジョリン

「私が直々に講師を務めさせていただきます。」

ハナ

「お願いします。」

魔女界の女王様『ソラミ達は今後、どのような手段を使ってあなた達を襲って来るかわかりません。くれぐれも気をつけてくださいね。』

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みずず

「はい！絶対に負けません！！」

どれみ達は、力強く返事をしたのだった。

女王様の計らいにより、再びロイヤルパトレーヌの力を手にしたどれみ達。

果たして、これからどうなるのか・・・！？

第20の呪文：復活のロイヤルパトレーヌ！！（後書き）

どれみ「女王様からロイヤルパトレーヌの力を授かったし、これでまた1歩全身ね！」

はづき「ええ、それに新しい武器も作ってくれるって言うし・・・」
あいこ「マジョフルーレが完成したら、ソラミらとも互角に戦えるな！」

おんぷ「問題は、これからソラミ達がどう出て来るかだけど・・・」
ももこ「あれ、あそこにいるにって江川ソングじゃない？」

のぞみ「本当だわ・・・」

さつき「それに、何かどれみちゃんと会話してるわよ！！」
ほのか「一体何を企んどるんや!？」

りずむ「次回のおジャ魔女どれみドツカ〜ン！は『衝撃の過去!？ソングの苦悩!』よ！！世界を平和な未来に変えて!!」

第21の呪文：衝撃の過去！！ソングの苦悩！？

魔女界 マジヨボルトのアジト

マジヨボルト

「どれみ達を仕留め損なったか、ソラミ達よ・・・」

ソラミ・ミヅキ・アイリ・ナナコ・リップ

「も、申し訳ありません・・・」

マナ

「だけど、どうやらどれみ達はエレメントの覚醒ができていない者が後2人いるようです。」

マジヨボルト

「では、後の3人は覚醒しているのか？」

マナ

「ええ。ですが彼女らも所詮まだまだ未熟・・・ちゃんと形にできていないようです・・・」

マジヨボルト

「そうか・・・今の内に潰しておかなければ・・・マナよ、首尾の方はどう？」

マナ

「はい、順調です。ただ今私が、魔物をゾクゾクと生み出しております・・・」

マジョボルト

「そうか・・・それは良い・・・任せるわよ、マナ・・・」

マナ

「お任せください、マジョボルト様・・・」

マジョボルト

「ところで、マナ・・・」

マナ

「はい？」

マジョボルト

「江川ソングの姿が見えないのだけど？」

マナ

「そういえば見当たりませんね・・・ソラミ、彼女がどこに行ったか知らない？」

ソラミ

「すこし風に当たって来ると言っつて、人間界に行きましたよ・・・」

ミヅキ

「彼女、よく気まぐれで人間界に行くからね・・・」

アイリ

「一体いつも何しに行ってるんやか・・・」

ナナコ

「まあ良いじゃない、人のプライベートなんだから・・・」

リップ

「それもそうね・・・」

ソラミ達は、ソングの行動に対して特に気にも止めていなかった。

その頃、当の江川ソングはというと・・・

ソングはソラミの言う通り、人間界に来ていた。

ソング

「人間界も良いもの・・・ゆっくり過ごせるし・・・」

ちなみに彼女のタップ他はなぜかコインロッカーに預けられている。

どうやってお金を調達したかは聞いてはいけない。

ソングは黄緑色の帽子をかぶる。

ソング

「さて、これからどこで時間潰そうか・・・」

「あら？あなた江川ソングじゃない？」

ソング

「！？」

ソングが振り返ると、そこにはどれみが立っていた。

ソング

「は、春風どれみ・・・!!」

どれみ

「ここで何してるの？」

どれみはポケットに手を入れる。

ソング

「ちよつ、そんなに構えないでよ！今日のアタシは丸腰よ!!」

どれみ

「本当に・・・？」

疑り深いどれみ。

ソング

「本当よ！タップもフルーレもコインロッカーに預けてあるんだから・・・」

どれみ

「コ、コインロッカーって・・・」

啞然とするどれみ。

ソング

「まあ、そういうワケだから・・・」

どれみ

「しょうがないわね・・・ただし、少しでも変な素振り見せたら容赦しないわよ・・・」

ソング

「わ、わかってるって・・・」

どれみとソングは、美空町を回り始めた。

どれみ

「そういえば今、屋台が出てるんだよ。」

ソング

「屋台・・・？」

どれみ

「うん、縁日っていうお祭りがあるの。」

ソング

「お祭りねえ・・・」

どれみ

「やってみる？」

ソング

「面白そうね・・・やってみたいな。」

どれみ

「じゃあ、無難に射的でもしょうか・・・まずは料金を払ってと。」

ソング

「どれみ、アタシに目隠しをしてくれない？」

どれみ

「え？まさか目隠しした状態で射的するつもりなの？」

ソング

「まあ、見ててよ。」

どれみはソングに目隠しをする。

ギュッ、ギュッ！

ソング

「（精神集中・・・）そこおー！」

ソングはピストルを乱射する。

パパパパン！！

ソングの撃った弾は、5つの的に当たった。

コン！

どれみ

「ス、スゴい・・・」

ソング

「まあ、こんなトコよ。」

どれみとソングは、河川敷で休んでいた。

どれみ

「ソングってスゴいのね・・・目塞いでも命中させられるなんて・・・」

ソング

「まあね・・・元々アタシってこういうのが専門分野だから・・・」

どれみ

「そういえばあなた達って、元々マジョリカの元で魔女見習いやつてたのよね？」

ソング

「ええ・・・でも、それ以外の事は思い出せないの・・・アタシもソラミも、他の4人もね・・・アタシ達の過去は、封印されたのよ・・・」

ソングは自分の過去を思い出していた。

自分がマジョリカの元で魔女見習いをしていた頃の事を・・・

マジヨリカ『リリア、サーキ、ミルファ、アイリス、チェリー、シルビア・・・あなたはこれから、先祖の事を気にしなくて良い。自分達の信じた事をやりなさい・・・』

リリア・サーキ・ミルファ・アイリス・チェリー・シルビア『はい、マジヨリカ!』

マジヨリカ『それでこそ、アタシの魔女見習いよ・・・』

ソング

「・・・アタシ達のこの名前もね、本名じゃないの。わかるわよね?」

どれみ

「うん、のんちゃん達もそうだし・・・」

ソング

「そうよ。アタシ達はね・・・」

ソングがそこまで言った時、突然川から魔物が現れた。

ズオオオオオ!!

『キシヤアアアア!』

どれみ

「な、何よあれ!？」

ソング

「魔女界に生息してる魔物、ガブガブよ!!!こんな所にも住んでいたなんて・・・」

どれみ

「アタシがアイツを引きつける！あなたはその間に逃げて！！」

ソング

「で、でも・・・」

どれみ

「変身できなきゃ、足手まといなのよ！！」

ソング

「わ、わかったわ・・・」

ソングは走り出した。

ダッ！

どれみ

「さあ、かかって来なさい！！」

どれみはそう言うと、走り出した。

ガブガブも後を追って行く。

やがて、どれみは美空町の森にやって来た。

どれみ

「ここなら誰にも見つからない・・・」

どれみは魔女見習いに変身した。

ポンッ！

どれみ

「さあ、かかって来なさい！！」

どれみはポロンを構えた。

その頃ソングは、ロッカーまで来ていた。

ソング

「（どうしよう・・・このままどれみを助けたら、アタシは裏切り者になってしまう・・・）」

ソングは悩む。

ソング

「とりあえず、どれみの所に行きましょう・・・」

ソングはどれみの元へ向かった。

その頃どれみは、ガブガブに苦戦していた。

どれみ

「ハア、ハア・・・」

どれみは息が上がっている。

『シャアアアアア!!』

ガブガブはツルを伸ばして来た。

シャッ!!

ツルはどれみの肩をかすった。

どれみ

「痛っ!!」

どれみはよろめく。

どれみ

「うつ・・・」

ガブガブはツルを伸ばした。

バシユッ!!

ソングがどれみの元に着くと、どれみがガブガブのツルに捕まっていた。

ソング

「どれみ!」

どれみ

「ぐう・・・」

どれみは苦しそうに呻いている。

ソング

「(どうしよう・・・このまま助けたら・・・)」

ソングはしばらく考えていたが、意を決して変身し、ガブガブに突っ込んだ。

ドンッ!!

ソング

「その娘を放しなさい!! プールンプルンファ〜ミファ〜ミファ
ー!!! ガブガブのツルを、凍らせて!!」

ソングは呪文を放ち、ガブガブのツルを凍らせた。

ピキピキ・・・

ソング

「ハアッ!!」

ソングはポロンを振り下ろし、ツルを破壊した。

バキヤアッ!!

どれみは地面に落ちる。

ドサッ!

ソング

「気絶してる・・・って事は、どれみは今アタシの姿を見ていない・
・なら、思いっきりやれる!!」

ソングはポロンを構えた。

ジャキッ!

ソング

「覚悟しなさい・・・」

どれみ

「ん・・・」

どれみが目を覚ますと、MAHO堂ではづき達に囲まれていた。

どれみ

「あれ・・・はづきちゃん達・・・」

はづき

「どれみちゃんが森の中で倒れてるって連絡があったから、急いで駆けつけたのよ。」

あいこ

「驚いたで。あんなトコで寝てるんやから・・・」

どれみ

「（ソングといた間の記憶がない・・・あの子が消したのかしら・・・）」

おんぷ

「どうしたの、どれみちゃん？」

どれみ

「あ、何でもない・・・」

ももこ

「・・・？」

はづき達は、首をかしげていた。

同じ頃、魔女界の某所

ソラミ

「どうしたの、ソング？」

ミヅキ

「何だか嬉しそうね・・・」

ソング

「そう見える？」

アイリ

「どうせまた、人間界で遊んで来たんやろうけどな・・・」

ソング

「まあ、そんなトコよ。」

ナナコ

「アタシ達に課せられた使命の事、忘れるんじゃないわよ。」

ソング

「わかってるって!」

リップ

「本当にわかってるのかしら・・・」

ソング

「（春風どれみ・・・あの娘なら、アタシ達を変えられるかもしれないわね・・・ウフフ♪）」

ソングは微笑んでいた。

第21の呪文：衝撃の過去！！ソングの苦悩！？（後書き）

どれみ「そういえばアタシ達、ずっと禁断の呪文を使っなくなってきたけど・・・」

はづき「禁断呪文を許された魔女っているのかしら・・・」

あいこ「そういえばそうやんなあ・・・」

おんぷ「じゃあ、その魔女に会ってみる？」

ももこ「ええ、いるの！？」

おんぷ「え、ええ。一応いるにはいるんだけど・・・ちょっと気難しい人だから・・・」

のぞみ「会うなら気を引き締めていかないと・・・ね。」

さつき「次回のおジャ魔女どれみドッカ～ン！は『禁断の呪文を許された魔女』よ！！世界を平和な未来に変えて！！」

第22の呪文：禁断の魔法を許された魔女、マジヨバルス！！

MAHO堂

どれみ達はMAHO堂で、ある事について考えていた。

それは、禁断の魔法についてである。

今までに禁断の魔法を使った事があるのは、おんぷともこの2人だ。

そして2人共、その代償を受けたのである。

しかし、敵側であるマジヨバルトやソラミ達はいくら禁断の魔法を使おうと、その代償を受けない。

それはなぜなのか？

今回、その謎がついに明かされる！！

どれみ

「禁断の魔法って、絶対に使っちゃいけない魔法なのよね？」

のぞみ

「そうよ。もし使えば、その魔法の効果に応じて代償を受ける事になるわ。」

おんぷ

「私の時は、小竹君達の記憶を消して代償を受けたの。どれみちゃん達が助けてくれなかったら危うく100年の眠りにつくトコだったわ・・・」

ももこ

「私の時はマジヨモンローを生き返らせようとして失敗しちゃって、水晶玉が割れて魔女見習いの資格を剥奪されちゃったんだよね・・・」

「

はづき

「私もそうよ。ウサギのケガを直した代償で危うく死にかけたわ・・・」

ほのか

「3人それぞれ、キツイ代償を受けたワケやな・・・」

どれみ

「アタシ、ずっと気になってたんだけど・・・禁断の魔法を許可された魔女っているのかな？」

あいこ

「おらんやろ、そないなヤツ・・・」

みすず

「アタシ達も聞いた事ないわ・・・」

のぞみ

「アタシ、知ってるわ。」

りずむ

「ええ？いたの、そんな魔女！？」

のぞみ

「お母様から聞いた事があるわ。女王様直々の命令で、禁断魔法の使用の許可及び監視を任された魔女がいると。その名は・・・マジヨバルス。」

さつき

「マジヨバルス？」

のぞみ

「彼女は魔女界の魔女の中で唯一、禁断魔法の使用を許されているの。それに、許可なく禁断魔法を使用しようとする魔女を監視する役目も担っているわ。おかしいと思わない？おんぷちゃんの時は反動の吸収に耐えきれずアクセサリーが割れたから代償がきたけど、はづきちゃんとももちゃんの時はアクセサリーも何もなかった。それなのになぜすぐに代償がきたのか？それは・・・彼女、マジヨバルスが魔女見習いを監視していたからなのよ。」

はづき・ももこ

「魔女見習いの監視・・・」

のぞみ

「魔女見習いは未熟だからね。禁断魔法の怖さを思い知らせる必要があるワケよ。」

どれみ

「ちよつと待って！それじゃあ・・・彼女に会えば、のぞみちゃんの記憶も取り戻せるんじゃない？」

のぞみ

「そうね・・・会ってみる価値はあるかもしれないわね・・・」

マナ

「何？どれみ達が禁断魔法を許された魔女に会う？」

ソラミ

「はい。この目で一部始終を見ましたので。」

マナ

「面白い・・・ソラミ！ミヅキ達を連れて、マジョバルスから『ある書物』を奪って来なさい！！」

ソラミ

「ハハッ！！して、その書物とは？」

マナ

「ウフフ・・・これよ。」

マナはある紙をソラミに見せた。

その夜

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず

「魔女界へ、レッツゴー!!」

どれみ達はMAHO堂のワープゾーンを経由し、魔女界へと向かう。

その彼女達を、ソラミ達が不敵な笑みで見つめていた・・・

魔女界

魔女界の女王様『なるほど、それでマジヨバルスに会いに来たのですか・・・』

どれみ

「そうなんです。女王様、マジヨバルスさんの居場所はわかりますか?」

魔女界の女王様『そうですね・・・彼女はとても用心深い魔女ですから、定期的に居場所を変えてるんですよ。』

ほのか

「ほな、女王様でもわからへんのですか・・・」

のぞみ

「・・・あぁっ!!」

さつき

「どうしたの、のぞみ？」

のぞみ

「忘れてた・・・私、定期的にマジョバルスのカウンセリングを受けてるんだった！居場所の地図も渡されてたのすっかり忘れてたわ！！」

りずむ

「渡されたの何日前？」

のぞみ

「い、1ヶ月前・・・」

みすず

「早く行った方が良いんじゃないの？」

のぞみ

「そ、そうね！女王様、お手数かけました！みんな、行こ!!」

魔女界の女王様『待ってください。マジョボルトの弟子達があなた方を狙ってくる事も考えられます。マジョリン、どれみちゃん達に付き添ってあげてください。』

マジョリン

「わかりました！」

のぞみ

「じゃあ、みんな行こー!」

のぞみ達は地図を頼りに、マジヨバルスの隠れ家に向かっていった。

どれみ

「マジヨリンさん、マジヨバルスさんってどんな人なんですか？」

マジヨリン

「そうですね・・・彼女は元老院の1人なんですけど、少し気難しい性格ですね。元老院に入る前も入った後も、招集会議の時以外はあまり人前に顔を見せないんですよ。」

はづき

「そうなんですか。」

のぞみ

「心配ないわよ。私は何度も会ってるから。」

さつき

「のぞみがそう言うんなら、あまり問題はないかもね・・・」

しばらく歩くと、1軒の家が見えてきた。

のぞみ

「地図によるとここみたいね。」

のぞみはドアを叩く。

コン、コン！

すると、妖精専用の入口から妖精が1人出て来た。

ガチャ！

「あ、のぞみちゃん！久しぶり〜！！」

のぞみ

「お久しぶりです、スンスンさん。」

ノノ

「元気でした〜？」

のぞみの妖精ノノが、スンスンに近寄った。

スンスン

「ノノも相変わらず元気そうね！」

のぞみ

「あの、スンスンさん・・・マジヨバルスさんは？」

スンスン

「バルスなら、裏の花壇で茶葉を摘んでるわよ。呼ぼうか？」

のぞみ

「いえ、すぐ私の魔力を感知して見に来るんじゃないかと・・・」

「あら、のぞみちゃん？」

のぞみとスンスンが話していたマジヨバルスが、家の裏手からやって来た。

のぞみ

「あ、マジヨバルスさん……」

マジヨバルス

「随分来るのが遅かったわね、のぞみちゃん？」

のぞみ

「あの……もしかして、怒ってます？」

マジヨバルス

「別に怒ってないわよ？1ヶ月も音沙汰なかった事なんて……全然ね！！」

マジヨバルスは怒鳴った。

のぞみ

「はうう！やっぱり怒ってるじゃないですかあゝ。」

マジヨバルス

「のぞみちゃん、わかってるわよね？定期カウンセリングに遅れたら……」

のぞみ

「はい、地獄の折檻ですよね……」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・さつき・ほのか・りずむ・みすず・マジヨリン

「地獄の折檻!?!」

マジヨバルス

「わかつてるじゃない。のぞみちゃん、そこに座りなさい。」

のぞみ

「はい・・・」

マジヨバルス

「では、逝くわよ!!ホチヨー!」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・さつき・ほのか・りずむ・みすず・マジヨリン

「何処へだ!?!?」

マジヨバルス

「えいやっ!」

マジヨバルスは指でのぞみのオデコを叩いた。

ピシッ!

のぞみ

「タッ!」

スリスリ・・・

マジヨバルス

「あふう・・・」

マジヨバルスは貧血でぐらつく。

マジヨバルス

「ああ、許してのぞみちゃん・・・あなたのためとはいえ、あまりにムゴい仕打ちを・・・ヨヨヨ・・・」

のぞみ

「さーて、終わった終わった。」

さつき

「って、今で終わりなの!？」

のぞみ

「マジヨバルスさんは言う事は過激だけど、やる事はしょぼいのよ。お母様に対してもそうだったし。」

ほか

「ほな、のぞみのオカンはマジヨバルスさんの知り合い?」

スンスン

「知り合いも何も、のぞみちゃんのお母さんとバルスの2人は魔女学校の同級生よ。」

りずむ

「じゃあ、のぞみのお母さんに関する物を何か持ってませんか?」

マジヨバルス

「そうね・・・何か持ってた気がするんだけど・・・カウンセリン

グついでに探してみるわ。スンスン、庭でどれみちゃん達の相手をして。
」

スンスン

「はい。」

どれみ達はマジヨバルスにのぞみを任せ、庭に向かった。

どれみ達はスンスンと庭で遊んでいる。

はづき

「へエ、2人はそんなに仲が良かったんですか？」

スンスン

「ええ。のぞみちゃんのお母さんとバルスは2人共とても成績が優秀でね。大人になったら絶対に元老院議員になろうと誓い合っていたそうよ。」

マジヨリン

「そういえば、マジヨバルスとマジヨライト……のぞみちゃんのお母さんはいつも席が隣同士でしたね。」

さつき

「何か良いですね、そう言っの……」

どれみ達が談笑していると、突然のぞみとマジヨバルスの悲鳴が聞こえてきた。

のぞみ・マジヨバルス

「キャー!!」

みすず

「な、何今の悲鳴!？」

スンスン

「家の中からだわ!」

どれみ達は家の中に入る。

さつき

「のぞみ!!」

マジヨリン

「マジヨバルス!!」

どれみ達の瞳に映ったのは、背中合わせにされ手足をロープで縛られたのぞみとマジヨバルスだった。

マジヨリン

「何があっ たんです?」

マジヨリンは2人を縛っているロープを解く。

マジヨバルス

「突然目の前に魔女見習いが6人現れて・・・」

おんぷ

「ソラミ達だわ!」

のぞみ

「私とマジヨバルスさんを縛り上げた後、棚にあった本を盗んで逃げたんです！」

マジヨバルス

「あの本はあらゆる禁断魔法について書かれた本・・・悪用されたら、大変な事になるわ！！」

マジヨリン

「どれみちゃん達、ソラミ達を追ってください！マジヨバルスは私が介抱します！」

どれみ

「わかりました！」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず

「マジカルステージ！！聖なる力よ、私達に力を与えて！！！」

どれみ達はマジカルステージを発動し、ロイヤルパトレーヌに変身する。

マジヨバルス

「ロイヤルパトレーヌ・・・見るのは100年振りね・・・」

飛び出して行くどれみ達を、マジヨバルスとマジヨリンが見つめていた。

のぞみ

「ソラミ達、どこにいるのかしら・・・」

さつき

「見て、みんな！あれ！！」

ほのか

「あれは・・・すり鉢か・・・？」

「よく来たわね、どれみ達・・・」

どれみ達が声のした方に振り向くと、ソラミ達がホウキに乗って空中にいた。

ソラミ

「そして・・・ここがあなた達の墓場よ！」

ミヅキ

「出でよ！アリゲモジゴク！！」

ミヅキが叫ぶと、すり鉢の中から怪物が出て来た。

ズボォ！！

『ギシャアアアア！！』

りずむ

「あれは・・・古に伝わる魔物、アリグモジゴクだわ!!」

おんぷ

「アリグモジゴク？」

みすず

「アリグモとアリジゴクを秘術で合成した、古来の魔物だよ!あまりに危険な生き物だから、1000年前に絶滅させられたの!!」

アイリ

「この禁断の著書を参考に、ダークマジカルステージで蘇らせたんだよ。」

ナナコ

「さあ、アリグモジゴクよ!久々の獲物を存分に味わいな!!」

『ギシャアアアア!!』

アリグモジゴクは砂をどれみ達に向かって飛ばしてきた。

ザアッ!!

どれみ

「ブワッ!!」

はづき

「ゲホゲホ!!」

砂をかけられ、どれみ達はむせる。

アリゲモジゴクは、口から糸を吐き出す。

ビシュッ！

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこは避けきれず、糸でグルグル巻きに絡め取られた。

リップ

「どれみ達は人質よ。さあ、どう戦う？」

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず

「う・・・」

狼狽えるのぞみ達。

アリゲモジゴクがのぞみ達も糸で絡め取ろうとした、その時だった。

パチン！

音と同時に、どれみ達が地面に落ちた。

ソラミ達が周りを見渡すと、マジョリンがホウキに乗って空を飛んでいる。

ソラミ

「あ、マジョリン！！」

ナナコ

「キサマ・・・」

マジョリン

「今です、のぞみちゃん達!!」

のぞみ

「ウィンディフルーレ! 静やかな光!!」

さつき

「フォレストフルーレ! 淑やかな光!!」

ほのか

「ボルケーノフルーレ! 麗らかな光!!」

りずむ

「グレイシャフルーレ! 艶やかな光!!」

みすず

「ティンクルフルーレ! 鮮やかな光!!」

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず

「5つの光が闇を貫く!! おジャ魔女・ペンデュラムスター・ダストクラッシュ!!」

のぞみ達は合体技を放った。

ドンッ!!

ソラミ

「クソッ!!」

ソラミ達は逃走する。

超巨大な星はアリゲモジゴクを包み込み、消し去った。

ズン！！

ズオオ・・・

パァン！！

のぞみ

「何とか倒したわね。」

さつき

「でも、ソラミ達に禁断の著書を持って行かれちゃったわ・・・」

ほのか

「どないしょ、のぞみ・・・」

マジョリン

「こうなった以上、こちらも本気でいかなければなりませんね。どれみちゃん達やあなた達に、さらなる力を授けます！！」

りずむ

「さらなる力！？」

みすず

「どんな力なんだろう・・・」

どれみ達が、次に身につける力とは果たして何なのか・・・！？

第22の呪文：禁断の魔法を許された魔女、マジヨバルス！！（後書き）

どれみ「ソラミ達に禁断の著書を盗まれ、ヤバい事になっちゃった！！」

おんぷ「これからソラミ達は、次々と魔物を蘇らせてくるかもね・・」

あいこ「大ピンチのアタシらに、女王様はさらなる力を授けるって言うてる！」

はづき「一体どんな力なの！？」

ももこ「ワクワクドキドキが止まらないね！」

りずむ「次回のおジャ魔女どれみドッカ〜ン！！は『甘い力！その名はスウィートパトレ〜ヌ！！』よ！！」

みずず「世界を平和な未来に変えて！！」

そして・・・

おジャ魔女どれみドッカ〜ンレジェンドに、待望のスペシャル版登場が決定！！

お楽しみに！！！！

お知らせ！

のぞみ達5人の仲間、もうすぐ復活！？

第23の呪文：甘い力！その名はスウィートパトレーヌ！！

魔女界

魔女界の女王様『どれみちゃん達、ようこそいらっしやいました。』

のぞみ

「ソラミ達の力は、日に日に増しています。そんな彼女達に追いつくためには、アタシ達も強くならねば・・・」

魔女界の女王様『ええ、それは承知しています。ですからそのため手段はしっかり用意してあります。マジヨリン、例の物を。』

マジヨリン

「はい。」

パチン！

マジヨリンが指を鳴らすと、どれみ達の前に三角形型の種が現れた。

ボン！

のぞみ

「これは・・・スウィートシード！！」

どれみ

「スウィートシードって？」

さつき

「ロイヤルシードと同じように、コロンタップの中に入れる事で新たな変身ができるようになる種よ。のぞみ、私達で見本を見せてあげましょ。」

のぞみ

「ええ！」

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず

「ミラクルステージ！！甘美な光よ、アタシ達に力を与えて！！！」

パアアアア・・・

のぞみ達5人が、巨大な包み紙に包まれる。

パン！

包み紙が開くと、そこにはパティシエ服にさらなる装飾を施した姿をしたのぞみ達が立っていた。

のぞみ

「どう？これが第3のパトレーヌ・・・スウィートパトレーヌよ。」

どれみ

「これが、スウィートパトレーヌ・・・」

はづき

「何だかパティシエ服に似てるわね。」

ほか

「そら当然やがな。このスイートパトレーヌの生みの親は、マジヨロクサーヌさんやからな。」

おんぷ

「そうなの？」

りずむ

「マジヨロクサーヌさんによると、お菓子の魅力で争い事をなくせるものはないか考えてた時にこのアイデアが浮かんだそうよ。」

のぞみ

「思えばこの変身には随分助けられたわ。ヴィゾラックとの戦いの際シートングに協力してもらえたのも、この力があってこそだったもの。」

ももこ

「そんな力を私達、使いこなせるかなあ・・・」

さつき

「大丈夫大丈夫！私達も3日でマスターしたから！」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ

「ア、アハハ・・・」

みすず

「まあ一応、マジヨロクサーヌさんから指南を受けた方が良いかもね。」

のぞみ

「そうね。さすがに一朝一夕で身につく力じゃないから。」

マジヨロクサーヌの家

マジヨロクサーヌ

「そう、スウィートパトレーヌの指南をねえ・・・」

のぞみ

「マジヨボルトの弟子達と互角以上に戦うためには、この力が必要なんです!」

マジヨロクサーヌ

「そう、それはわかったわ。だけど・・・あなた達、私からまともに指南受けた事あったかしら?」

のぞみ

「ギクツ!!」

マジヨロクサーヌ

「確か訓練の内容覚えるのが面倒だからって、ほぼ毎回訓練サボってなかったっけ?」

さつき・ほのか・りずむ・みすず

「ギクギクギクツ!!」

マジヨロクサーヌ

「その上で、自分達の独学で使い方をマスターしちゃったんだもの。指南のしようがないでしょう?」

グサツ!!

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず

「うう・・・」

ズーン・・・

どれみ

「あゝ、私達は・・・？」

マジヨロクサーヌ

「どれみちゃん達にはちゃんと指南してあげるわ。レシピ日記を完成させてくれたお礼も兼ねてね！」

どれみ

「ありがとうございます！」

どれみ達はしばらくマジヨロクサーヌの元で指南を受ける事になり、のぞみ達はその間魔女界を散策する事にした。

のぞみ

「どれみちゃん達もスゴいわよね。アタシ達が途中で投げ出したレシピ日記を完成させていたなんて。」

さつき

「私達が途中で投げ出したのは、あの件もあったからだけだね。」

「随分と余裕ね、あなた達・・・」

のぞみ

「！！ソラミ達！？」

のぞみ達が上を向くと、そこにはソラミ達が空を飛んでいた。

ほのか

「何しに来たんや！？」

ミヅキ

「そんなの決まってるでしょ？邪魔しに来たのよ！」

アイリ

「ただでさえ次期女王候補が力をつけてきてるうちゅうのに、どれみ達まで力をつけられたら困るんや！」

ソング

「だから、私達はあなた達を邪魔する・・・」

ナナコ

「おとなしくやられる・・・」

さつき

「そうはいかないわ！」

ほのか

「邪魔はさせへんで！」

りずむ

「ここでくい止めてみせる・・・」

みずず

「かかって来なさい！」

30分後・・・

のぞみ

「くっ・・・」

さつき

「やっぱり強い・・・」

ソラミ

「所詮はその程度よ。“あの子”がいないあなた達では、今のアタシ達には勝てないのよ。」

ミヅキ

「トドメよ。」

ほのか

「くっ・・・ここまでか・・・」

「そこまでよ！-！」

ソング

「誰！？」

ソラミ達が振り返ると、どれみ達が立っていた。

ザン！

どれみ

「みんな、行くよ!!」

はづき・あいこ・おんぷ・ももこ

「ええ!!」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ

「マジカルステージ!! 甘美な光よ、私達に力を与えて!!」

どれみ達はスイートパトレーヌに変身した。

ソラミ

「さすがにその状態のあなた達を5人も相手にするのはキツイわね。今日のところは引いてあげるわ・・・行くわよ、ミツキ達!」

ミツキ・アイリ・ソング・ナナコ・リップ

「はい!」

ソラミ達は、異空間に消えていった。

第23の呪文：甘い力！その名はスウィートパトレーヌ！！（後書き）

どれみ「私達もパワーアップできたし、ソラミ達なんて怖くないわね！」

はづき「どうかしら？のんちゃん達によれば、ソラミ達の力は日に日に力を増してるっていうし・・・」

あいこ「そろそろアタシにも新しい仲間が欲しいところやなあ・・・」

???「待たせたわね！ついに真打ち登場よ！！」

さつき「あ・・・」

のぞみ「あなたはまさか・・・！！」

ほのか「次回のおジャ魔女どれみドッカ～ン！！は、『復活！12番目のおジャ魔女！！』やで！！」

???「アタシの活躍、楽しみにしててね」

おんぷ「あなたは一体誰なの～！？」

第24の呪文：復活！12番目のおジャ魔女！！

魔女会の奥地で、ソングがポロンを振っていた。

ソング

「封印よ、解けるー！！」

ソングがポロンを岩に向けると、岩は粉々に砕け散った。

ドガァァン！！

ソング

「これで『彼女』の封印は解かれた・・・さあ、どうでる？ マナちゃん・・・」

ソングは心なしか楽しそうであつた。

それから数日後・・・

美空小学校

あいこ達のクラスでは、ある事が話題になっていた。

そう、今日このクラスに転校生が来るのである。

あいこ

「転校生なんていつ以来やる。」

みすず

「アタシ達が来てから6ヶ月くらい経ってるんじゃない？」

はづき

「どんな人が楽しみね。」

りずむ

「・・・」

おんぷ

「どうしたの、りずむちゃん？」

りずむ

「イヤ、別に・・・（何だろう・・・かすかに感じるこの感じ・・・かなり懐かしい感じがする・・・）」

転校生が入って来る。

りずむ

「ああ!!」

りずむは叫び声を上げた。

その人物は、桃色の髪を上でツインテールにし、赤色の服を着た女の子であった。

みすず

「あ、あの子は・・・」

りずむ

「みずずも気づいたみたいね。」

はづき

「2人共、あの子の事知ってるの？」

りずむ

「ええ、彼女は・・・私達の仲間・・・」

少女は黒板に自分の名前を描いた。

サラサラ・・・

夜空ほしみ

りずむ

「夜空ほしみよ・・・」

放課後、どれみ達はMAHO堂に集まった。

どれみ

「この子がのんちゃん達の仲間なの？」

のぞみ

「そうよ。アタシをかばって深い眠りについてたハズなんだけど・
・ほしみ、どうしてここにいるの?」

夜空ほしみ

「そんなのアタシにもわかんないよ。だって気づいたらこの町に
いたんだもん・・・」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ
「ハア!？」

どれみ達は目が点になる。

ほしみ

「そういえばソラミ達と戦ってたじゃん。あの子達どうなったの?」

ほのか

「何言うとんねん!アンタがのぞみを庇って眠らされて、アタシら
は威力が落ちた魔法でソラミ達を封印するハメになったんやないか
!!!」

ほしみ

「そうだったけ?」

ズテツ!

どれみ達は盛大にずっこけた。

ももこ

「もしかして、ほしみちゃんって・・・」

あいこ

「間違いあらへん・・・」

おんぷ

「筋金入りの天然キャラね・・・」

のぞみ

「とにかく帰って来てくれて助かったわ。これ、女王様から預かってた物よ。」

ほしみ

「コロンタップね。触るのは半年振りかしら。」

さつき

「これで6人そろったわね。」

ほのか

「とりあえず、どれみちゃんらは買い出しに行つていてくれへん？
ほしみはよう食べるから。」

どれみ

「わかったわ。」

どれみ達は買物に出かけた。

どれみ

「あの子がのんちゃん達の仲間だったなんてね・・・」

はづき

「私達ももつと強くならないとね。」

「あなた達、随分余裕じゃない・・・」

あいこ

「その声・・・」

おんぷ

「ミヅキ!!」

タンツ!

ミヅキ

「見た感じ、仲間が増えたようね。だけど、アタシ達に勝てるかしら?」

どれみ

「その言葉、そのままそっくりあなたに返すわ!みんな、行くよ!」

はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ

「うん!!」

どれみ達は魔女見習いに変身し、ぽっぷを除く5人はさらにロイヤルパトレーヌに変身した。

ミヅキ

「あなたがそれで来るなら・・・アタシもそれなりの戦い方をさせてもらっわ。バブルスフルーレ！水流・8等影分身！！」

ミヅキは水で自分の分身を8人作った。

ミヅキ

「水流弾！！」

ミヅキはフルーレから水の弾を放つ。

ドシュ！

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ

「ハッ！！」

どれみ達はリースポロンとペペルトポロンで攻撃を跳ね返した。

ガキーン！！

バシユ！

ミヅキ

「あう！！さすがにやるわね・・・だったら！分身、合体よ！！」

8人の分身は、1体の魔獣になった。

ミヅキ

「水流旋回獣・オクティンよ。さあ、どう戦う？」

どれみ

「みんな、マジカルステージよ!!」

はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ
「うん!!」

どれみ

「ピリカピリララのびやかに!」

はづき

「パイパイポインポイしなやかに!」

あいこ

「パメルクラルク高らかに!」

おんぷ

「プルルンプルン涼やかに!」

ももこ

「ペルタンペットン爽やかに!」

ぽっぷ

「ピピットプリットほがらかに!」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ

「マジカルステージ!電撃波動弾!!」

どれみ達は電気の波動を放った。

ドシュー!!

しかし、ミツキのオクティンはそれを苦もなく防ぐ。

ビタン！

どれみ

「効いてない！？」

ミツキ

「電気が普通に水に効くと思ったら大間違いよ？アタシの水は特製だからね。さあ、もう終わりよ！！」

「そうはさせない！！」

ミツキ

「！？」

ミツキが振り返ると、そこにはのぞみ達とマジョルカが立っていた。

マジョルカ

「のぞみちゃん達に力を！！」

のぞみ

「ウインディフルーレ！静やかな光！！」

さつき

「フォレストフルーレ！淑やかな光！！」

ほか

「ボルケーノフルーレ！麗らかな光！！」

りずむ

「グレイシャフルーレ！艶やかな光！！」

みすず

「ティンクルフルーレ！鮮やかな光！！」

ほしみ

「レインボーフルーレ！輝かな光！！」

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず・ほしみ

「6つの光が闇を討つ！！おジャ魔女・ヘキサゴンスター・ダスト
クラッシュ！！！！」

のぞみ達はフルーレから攻撃を放った。

ドン！！

ミヅキ

「あの赤い子は・・・チツ！そういう事が・・・」

ミヅキはポロンを振り消える。

次の瞬間、のぞみ達の攻撃がオクタインを消し去った。

パァン！！

どれみ

「ス、スゴい・・・これが、のんちゃん達の真の力・・・」

どれみ達は、のぞみ達6人の強さを改めて感じたのだった。

第24の呪文：復活！12番目のおジャ魔女！！（後書き）

どれみ「ほしみちゃんが復活して、ようやくアタシ達も戦力アップね！」

あいこ「これから来るソラミ達も、楽勝かも知れへんな！」
のぞみ「みんな、油断は禁物よ？」

ももこ「わかってるって！」

おんぶ「あ！あそこにいるのはづきちゃんと矢田君？」
さつき「何か良い雰囲気ね！」

ほのか「しかもこんな時に限ってソラミが来よったし！」

みずず「見て！はづきちゃんのポロンが光ってる！」

のぞみ「あの光、まさか・・・！！！」

ほしみ「次回、おジャ魔女どれみドッカ〜ン！！は『矢田とはづきの恋愛事情』よ！！パワーアップしたアタシ達の活躍、これからも見逃さないで下さいね！！！」

第25の呪文：矢田とはづきの恋愛事情

MAHO堂

2月13日

どれみ達はアクセサリー作りの傍ら、チョコ作りに勤しんでいた。

どれみ

「もうすぐバレンタインだね。」

はづき

「ですね。」

のぞみ

「どれみちゃん達はあげる相手いるんだ？」

どれみ

「うん！」

おんぷ

「私は義理だけだね。トオル君にだけど……」

りずむ

「ア、アタシも一緒に作って良い？」

おんぷ

「べ、別に良いけど……」

さつき

「（なるほどね、りずむはトオル君が・・・）」

どれみ

「アタシも義理だよ。」

のぞみ

「どれみちゃん素直じゃないね。」

どれみ

「な、何が!？」

どれみは慌てている。

あいこ

「アタシは大阪やからなあ・・・」

ほか

「冷凍物の宅配便で送ればええやん。」

あいこ

「あ、そうか。」

みすず

「お菓子作りはアタシとももちゃんがプロだから・・・」

のぞみ

「そうね、指導は任せるわ。ところで、はづきちゃん・・・」

のぞみははづきの方を見た。

はづき

「何？」

のぞみ

「はづきちゃんも渡す相手いるんだよね？」

はづき

「え、ええ・・・矢田君が・・・」

のぞみ

「良いなあ、昔から想い人がいる子は・・・アタシはそういうのいないから・・・」

さつき

「のぞみ・・・」

のぞみ

「何か暗くなっちゃったね。さ、チヨコ作り始めましょ！」

どれみ達はチヨコ作りを始めた。

魔女界某所

ソラミ

「・・・バレンタイン？何よそれは？」

ミヅキ

「2月14日に行われるイベントで、女が男にチョコレートを渡す日の事よ。」

アイリ

「外国によつては逆な事もあるけど、どうも恋仲を進展させるための日らしいで。」

ナナコ

「良い気なもんだな。そのセントバレンタインの元になったバレンティヌス司教は拷問の末に撲殺されたっていうのによ・・・」

ソング

「ナナコ、あなたねえ・・・」

ナナコ

「ん？何か間違ってるか？」

ソング

「イヤ、間違っちゃいないけどさあ・・・」

ソラミ

「バレンタインね・・・あ、良い事思いついた♪今回はアタシが出るわ。行くわよ、リップ！」

リップ

「はい、お姉様！」

ソラミとリップは出かけて行った。

ソング

「ソラミ・・・変な事考えてなければ良いけど・・・」

ももこ

「ここはこうやって・・・」

みすず

「そうそう、良い調子よ!」

はづき

「ありがとう、2人共。店の営業そっちのけで手伝ってもらって・・・」

ももこ

「平気平気〜。」

みすず

「あいちゃん達が頑張ってくれてるから、アタシ達も菓子作りに専念できるし。」

はづき

「そうね。」

ももこ

「パパッと作っちゃおー!はづきちゃんのラブリーチョコ」

はづき

「ちょ、違うわよもちゃん。」

みすず

「はづきちゃんのチョコ食べれば、きっと矢田君もメロメロよ。」

はづき

「みすずちゃんまでー!!」

ももこ・みすず

「はづきちゃん、照れちゃってカ〜ワイ♪」

はづき

「も〜っ!!」

はづきはももことみすずにからかわれていた。

ソラミ

「これがチョコレートって食べ物か・・・」

ソラミは試食コーナーのチョコを1つ口に放り込んだ。

ソラミ

「結構おいしいじゃない・・・」

リップ

「お姉様・・・こんなお菓子で一体何をやる気なの？」

ソラミ

「まあ、見てのお楽しみよ・・・」

MAHO堂

どれみ

「ソラミにリップ！」

あいこ

「何しに来たんや？」

リップ

「ちょっとした腕試しみたいなもんよ。」

ソラミ

「美空の森で待ってるわ。一般人は近づかないようにしておくから。」

ソラミとリップは去って行った。

どれみ

「さつきちゃんを残ってて！はづきちゃんが帰って来たら連れて来て！」

さつき

「わかったわ。」

さつきは頷く。

どれみ達は美空の森へと向かった。

矢田まさる

「藤原、何だ？」

はづき

「まさる君、これ・・・」

はづきはまさるにオレンジ色の包み紙の箱を渡した。

まさる

「これ・・・チョコか？」

はづき

「う、うん・・・」

まさる

「サンキュ、藤原・・・イヤ、はづき。」

はづき

「まさる君・・・」

まさる

「今度、京都に遊びに行ってみるか？」

はづき

「そうね。じゃあ私、MAHO堂に行つて来る！」

まさる

「ああ・・・またな！」

MAHO堂

さつき

「お帰り、はづきちゃん！その様子だと、チョコは無事渡せたみたいね。」

はづき

「ええ。あら、さつきちゃんだけ？」

さつき

「ええ、ソラミとリップが来たの。」

はづき

「大変！早く行かなきゃ・・・」

その時、はづきのコロントップがオレンジ色に光った。

コオオオオオ・・・

はづき

「何？この光・・・？」

さつき

「この光、まさか！！」

どれみ達は、ソラミとリップが魔法で出したチョコレートの魔獣に苦戦していた。

どれみ

「くっ、強い・・・」

のぞみ

「やっぱりコイツら、日に日に力を増してる・・・」

リップ

「そういう事よ。お姉様、もうやっちゃいましょうよ。」

ソラミ

「そうね。ここであなた達も終わりよ。」

ソラミとリップはダークフルーレをどれみ達に向ける。

「そうはさせない!!」

ソラミ・リップ

「!？」

ソラミとリップが振り向くと、はづきとさつきが立っていた。

はづきとさつきは、魔女見習い↓ロイヤルパトレーヌと2段階変身した。

はづきはリースポロン、さつきはマジョフルーレを持っている。

はづき

「見せてあげる・・・私の新たな力を!!」

そう言った瞬間、はづきのリースポロンがオレンジ色に光った。

カッ!!

のぞみ

「あの光・・・エレメントだわ!!」

さつき

「フォレストフルーレ!淑やかな光!!」

はづき

「私のエレメント・・・大地!!」

はづきとさつきは、リースポロンとマジョフルーレを交差させた。

カッ!!

はづき・さつき

「グラビディ・リーフストーム!!」

はづきとさつきは、砂と草の光線を放つ。

ゴォッ!!

リップ

「お、お姉様・・・」

ソラミ

「クッ! 引き上げるわよ、リップ!!」

リップ

「はい!!」

ソラミとリップはフルーレを振り、消える。

バシュ!

次の瞬間、はづきとさつきが放った魔法が魔獣を消し去った。

ドゴォ!!

パァン!!

ほのか

「助かったで！」

のぞみ

「それにしても、まさかはづきちゃんのエレメントが覚醒するなんてね。」

りずむ

「何にしても、これで戦力が上がったわね。」

どれみ

「（これで残るはアタシとぽっふだけ・・・）」

ぽっふ

「お姉ちゃん？」

どれみは、浮かない顔をしていた・・・

第25の呪文：矢田とはづきの恋愛事情（後書き）

あいこ「はづきちゃんもエレメントが覚醒して、残るはどれみちゃんとはづきちゃんだけやな！」

おんぷ「その事だけど、どれみちゃん最近浮かない顔してるのよね・・・」

ももこ「た、大変！どれみちゃんが小竹君をかばって車に引かれたってー！」

さつき「しかも、どうやら事故のショックで記憶がなくなってるみたいよ。」

ほのか「もし、こんな時にソラミ達が来たら・・・」

ほしみ「ヤバいかもね・・・」

りずむ「次回のおジャ魔女どれみドツッパッ！は『失われた記憶！

頑張れ小竹！』よー！」

みすず「次回も見逃せない展開よー！」

予告のページ

おジャ魔女とプリキュアが、夢の共演！！

21人のおジャ魔女と、19人のプリキュアが共に悪に立ち向かう！！

おジャ魔女&プリキュアオールスターズ！！

執筆決定！！

続報を待て！！！！

第26の呪文：失われし記憶！頑張れ小竹！！（前書き）

キャラクター・ファイル1

春風どれみ

この物語の準主人公で、魔女見習いをしている女の子。

マジヨリ力を元に戻すため、魔女見習いをやる事となった。

明るい性格で昔はドジが多かったが、誰とでも訳隔てなく話せるその優しさが魔女見習いメンバーを始め多くの人の心を開かせている。妹にぽっぴがいる。

魔法の呪文はピリカピリラポポリナペペルト、マジカルステージ時はのびやかという言葉が入る。

小竹に想いを寄せられており、小竹の想いを聞かされた事でエレメントが覚醒。

炎のエレメントを操り、あらゆるものを燃やす。

キャッチフレーズは『のびやかな炎の美少女』。

武器であるマジヨフルーレはファイアリフルーレ。

第26の呪文：失われし記憶！頑張れ小竹！！

魔女界某所

マジョボルト

「藤原はづきもエレメントが覚醒したか・・・」

マナ

「はい、これに残っているのはどれみとぽっぷのみ・・・」

マジョボルト

「マナよ、残り2人のエレメントが覚醒しないようにする対策はできてるのか？」

マナ

「はい、既に対策は考えてあります。」

マジョボルト

「マナ、ぬかるなよ・・・」

マナ

「はい。」

マナは去って行く。

マナ

「フツ・・・マジョボルトも愚かなヤツよ・・・」

マナは不敵な笑みを浮かべていた。

ソラミ

「リップ〜、リップ〜！どこ行つたのよ、もう。」

ソラミはリップを探している。

すると、ミヅキ達を通りかかった。

ミヅキ

「どうしたの、ソラミ？」

ソラミ

「みんな、リップ見てない？」

アイリ

「そういや、魔女界に行こうとしてんのを見かけたなあ。」

ソング

「アタシが話しかけたら、『お姉様の手を煩わせるまでもない、アタシがどれみ達を倒す！』って張り切ってたよ。」

ナナコ

「姉思いなトコは良いんだが、リップのヤツは空回りが多いからな・・・」

ソラミ

「そう・・・（ま、今回はリップの思いに免じて任せようかしら・・・）じゃ、アタシ上の部屋で仮眠してくるわ・・・」

ミヅキ

「アタシ達今から飲物買いに行くんだけど、ソラミは何か飲みたい？」

ソラミ

「じゃ、コーラお願い・・・ふああ・・・」

ソラミはアクビをしながら、上の階に上がって行った。

美空町

秋風リップは、どれみ達の事を探るべく美空町に来ていた。

リップ

「アタシのカンが正しければ、魔女見習い達のリーダー格はあの娘、春風どれみ・・・彼女さえ倒せば、後は楽なハズ・・・ん？」

彼女の目に、どれみと小竹の姿が映った。

小竹哲也

「なあどれみ！今日MAHO堂に行っても良いか？」

どれみ

「え、何で？」

小竹

「オマエの作ったアクセサリーが見たいからだよ!」

どれみ

「わかった。それじゃ、一緒に行こ!」

小竹

「あ、ああ・・・」

小竹はどれみと一緒に帰れるので、心なしか嬉しそうな顔をしている。

そんな2人の会話を、リップは屋上で聞いていた。

リップ

「今聞いた感じだと、男の子の方はどれみが好きみたいね・・・あ、良い事考えた♪」

リップは不敵に微笑んでいる。

リップ

「早速行動開始。」

リップはポロンを振り、消えた。

どれみは小竹と一緒に帰っていた。

やがて、交差点に差し掛かる。

小竹

「あれ？あそこにいるの、和久と京極じゃねえか？」

小竹とどれみの反対側に、のぞみとさつきがいた。

どれみ

「あ、ホントだ。のんちゃん、さつきちゃん！」

どれみはのぞみとさつきの元に走って行く。

さつき

「あら、どれみちゃん。ちょうど今、商品作りの材料を買い込んで来たの。」

のぞみ

「小竹君と帰りだなんて、どれみちゃんも隅に置けないね？」

のぞみがどれみをからかう。

どれみ

「そ、そんなじゃないよ！小竹がアクセサリー見たいって言うから、一緒にMAHO堂に行くだけよ……」

のぞみ

「ま、そういう事にしとくわ……ん？」

のぞみはどれみの後を追って来る小竹から離れた所にある車に目を

やった。

のぞみ

「ねえ、あの車何か動きがおかしくない？」

さつき

「ん？」

さつきはのぞみの言葉に反応し、車の方を見る。

すると、車が徐々に近づいて来ていた。

さつき

「明らかに動きがおかしいわ、あの車・・・」

のぞみ

「このままじゃ小竹君にぶつかる!!」

どれみ

「・・・!!」

どれみは次の瞬間、駆け出していた。

タッタッタツ・・・

どれみ

「危ない、小竹ーっ!!」

小竹

「!!」

どれみは小竹を突き飛ばし、次の瞬間突っ込んで来た車が彼女に激突した。

ドン！！

小竹

「ど、どれみ！！」

小竹はどれみに駆け寄る。

さつき

「イヤ・・・イヤッ！！」

さつきは悲鳴を上げた。

のぞみ

「大丈夫、当たりどころが良かったのか気絶しただけよ・・・」

「あゝっ！！」

のぞみ

「！？」

突然の声にのぞみが振り向くと、車の持ち主らしき男が車に駆け寄っていた。

「ウソだろう！？サイドブレーキかけといたのに・・・」

のぞみ

「・・・（サイドブレーキをかけておいたハズの車が持ち主が運転していないのに勝手に動いて、どれみちゃんを突き飛ばした・・・これは、何か裏がありそうね・・・）さつき、小竹君！とにかく、どれみちゃんを病院に連れて行きましょ！」

小竹

「ああ・・・」

さつき

「そうね・・・」

のぞみ達は、どれみを病院へと連れて行った。

美空病院 707号室

あいこ

「どれみちゃんが車に跳ねられたってホンマか!？」

知らせを聞きつけたあいこ達が、病室へと入って来た。

さつき

「ええ・・・」

おんぷ

「どれみちゃんの具合は？」

小竹

「まだ目を覚まさねんだ・・・」

はづき

「そう・・・」

どれみ

「ん・・・」

ほのか

「あ、どれみちゃん目え覚ましたで!!」

りずむ

「どれみちゃん、大丈夫？」

りずむ達は口々に話しかける。

どれみの第一声は、信じがたい言葉だった。

どれみ

「・・・あなた達・・・誰？」

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず・ほしみ・はづき・あい
こ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ・小竹

「え!!!？」

あいこ

「何言うとんねん!!」

小竹

「オレ達の事覚えてねえのかよ!？」

どれみ

「わからない・・・何も思い出せない・・・」

はづき・あいこ・おんぶ・ももこ・ぽつぷ・のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みずず・ほしみ・小竹

「逆行健忘症・・・？」

「ええ・・・突然の疾病や損傷により、損傷が起こる以前の事が思い出せなくなる記憶障害の1つです。どれみちゃんの場合は、小竹君を庇って車に引かれたショックにより記憶を失ったものと考えられます・・・」

はづき

「それで、どれみちゃんの記憶は戻るんですか？」

「今のところはまだ何とも・・・ただ、日常生活に必要な知識の損傷は認められませんでした。」

ほのか

「ほな、通常の生活はできるんやな。」

「ええ。ですが一応数日間入院させて様子を見てみましょう・・・」

小竹

「どれみ・・・」

さつき

「非常にヤバい事態になったわね・・・」

のぞみ

「ええ・・・どれみちゃんが記憶を失ってる以上、アタシ達だけで戦うしかない・・・」

あいこ

「どういう意味や？」

のぞみ

「アタシとさつきは現場に居合わせたんだけど、どれみちゃんを引いた車は持ち主が当時不在だった上にサイドブレーキがかかっていたのよ・・・」

さつき

「それが勝手に動いてどれみちゃんを引くワケがない・・・つまり、この件は・・・」

ほしみ

「裏でソラミ達の中の誰かが絡んでいる・・・そう言いたいんですよ、のぞみ？」

のぞみ

「ええ・・・車を混乱させて操った事から察すると、今回の事を仕組んだのは・・・リップよ。そこにいるんでしょ、秋風リップ!!」

リップ

「バレてたか・・・さすが、魔力の高さがズバ抜けてるだけあるわね。」

のぞみ

「ぽっぷちゃん、あなたはどれみちゃんを見てて!」

ぽっぷ

「うん、わかった・・・」

のぞみ

「みんな、行くわよ!」

のぞみ達は外に出る。

リップはその後を追って行った。

どれみ

「小竹さん・・・なぜここまで私に優しくしてくれるんですか?」

小竹

「何でだろうな・・・」

ぽっぷ

「(アタシ、お姉ちゃんが困ってるのに何もできない・・・一体どうしたら良いの・・・?)」

ぽっぷは遠距離恋愛中の彼氏、きみたかに電話をかけた。

きみたか

「フーン、オマエの姉貴が記憶喪失にねえ・・・」

ぽっぷ

「そうなの・・・でもアタシ、何もできなくて・・・」

きみたか

「無理する必要はないんじゃないか？」

ぽっぷ

「え？」

きみたか

「ぽっぷはぽっぷなりのやり方で頑張れば良いんだよ。オレはそんなオマエを好きになったんだから・・・」

ぽっぷ

「きみたか・・・わかった、アタシ頑張ってみる!!」

きみたか

「それでこそ、ぽっぷだ・・・」

ぽっぷ

「ありがとね、きみたか・・・」

ぽっぷは電話を切る。

すると次の瞬間、ぽっぷのタップが赤色に光った。

コオオオオオ・・・

ぽっぷ

「この光って、もしかして・・・」

小竹

「何かさ、オマエが悩んでたり落ち込んでたりするのを見ると、無性に励ましたくなるんだよ・・・オマエはオレにとって、一番大切な女だからさ・・・」

どれみ

「小竹さん・・・それって・・・」

小竹

「ああ・・・オマエの事が、好きだ・・・」

どれみ

「・・・ありがとう、小竹・・・」

小竹

「どれみ・・・オマエ・・・」

どれみ

「うん、全部記憶戻ったよ！」

ぽっぷ

「お姉ちゃん・・・良かった・・・」

どれみ

「さあ、行きましょぽっぷ!」

ぽっぷ

「うん!」

どれみとぽっぷは病院の外へ出る。

それと同時に、どれみのタップが桃色に光った。

コオオオオオ・・・

どれみ

「この光・・・」

ぽっぷ

「まさか、お姉ちゃんも・・・」

その頃、のぞみ達はリップが出した氷の魔獣に苦戦していた。

さつき

「クッ・・・」

あいこ

「強い・・・」

ほか

「あの魔獣の強さだけとちゃう！リップのポロンの効果でみんな同士討ちさせられて、アイツに攻撃が届かへんのや・・・」

リップ

「アタシの魔法が『混乱』という事を忘れているとは、あなた達も愚か者ね・・・」

のぞみ

「う・・・」

リップ

「トドメよ。あなた達全員、氷漬けにしてあげる・・・」

リップがポロンを振り上げる。

「そうはさせない！！」

リップ

「！？誰？」

突然の声にリップが振り返ると、どれみとぽっぷが立っていた。

どれみはスイートパトレーヌに、ぽっぷはどれみの魔法でロイヤルパトレーヌに変身した。

どれみ

「のびやかな炎の美少女、春風どれみ！！」

ぽっぷ

「ほがらかな炎の美少女、春風ぽっぷ!!」

どれみ・ぽっぷ

「我ら、燃える春風姉妹!!」

どれみ

「行くわよ、ぽっぷ!!」

ぽっぷ

「うん、お姉ちゃん!!」

どれみとぽっぷはポロンをかざした。

どれみ・ぽっぷ

「邪悪な闇を焼き尽くす、灼熱の業火を受けてみよ!!おジャ魔女・シスターズバニシングフレア!!」

どれみとぽっぷは、業火の光線を放つ。

ゴォッ!!

リップ

「アタシと相性悪すぎ!今日のところは引き上げますか・・・」

リップはポロンを振り消える。

次の瞬間、どれみとぽっぷの呪文が魔獣を焼き尽くした。

シュンッ!

ドゴォー！！

ボシュウウウウ・・・

のぞみ

「ついに揃ったわね・・・アタシ達、12人のエレメントが・・・

」

のぞみは微笑んでいた。

第26の呪文：失われし記憶！頑張れ小竹！！（後書き）

はづき「どれみちゃんとぽっぴちゃんのエレメントも覚醒して、ついにみんな揃ったわね！」

あいこ「マジヨボルトやろうがソラミ達やろうが、もう怖いもんなしやな！」

おんぷ「マジヨボルト達、今はどこにいるのかしら・・・」

さつき「その事だけど、女王様がマジヨボルトの足取りを掴んだって！」

ほのか「今度はこっちが追う番やな！！」

りずむ「次回のおジャ魔女どれみドッカ〜ン！は『掴んだ！マジヨボルトの足取り！！』よ！！」

みすず「次回から物語は急展開！」

ほしみ「みんな、これからも応援よろしくね〜」

第27の呪文：掴んだ！マジョボルトの足取り！！（前書き）

キャラクター・ファイル2

藤原はづき

どれみの幼稚園時代からの親友で、藤原家のお嬢様。両親にうまく自分の意見を言えず、そんな自分を変えるために魔女見習いになった。

余談だが、一番最初は見習い服を着る事に失敗している。

同級生の矢田まさるとは仲が良く、その事をどれみ達に冷やかされる事もしばしば。

リアクション時は大抵メガネにヒビが入る。

まさるとの関係が進展した事でエレメントに覚醒。

大地のエレメントを操り、敵の足下を地震でふらつかせたり地割れを起こせる。

魔法の呪文はパイパイポンポイプワプワプー、マジカルステージ時はしなやかという言葉が入る。

キャッチフレーズは『しなやかな大地の優等生』。

武器であるマジョフルーレはグラビディフルーレ。

第27の呪文：掴んだ！マジョボルトの足取り！！

どれみ達12人は、魔女界にやって来ていた。

魔女界の女王様から、用事があつて呼ばれたからだ。

魔女界の女王様『どれみちゃん達、ようこそいらつしゃいました。
今日来ていただいたのは、マジョリンがマジョボルト達の足取りを
掴んだからです。』

のぞみ

「何ですって！？」

魔女界の女王様『マジョリン、例の物を。』

マジョリン

「はい。」

マジョリンは、大きな地図を取り出した。

ボンッ！

マジョリン

「この地図上のどこかに、マジョボルト達が潜伏しているとの情報を掴みました。ただ、困った事にそこに行く方法はまだ掴めていないのです・・・」

さつき

「この地図にある場所は、確か結界があつたはず・・・」

魔女界の女王様『そうです。この場所は神聖な場所・・・本来、邪悪な魔女は入れないハズなのですが・・・』

ほのか

「マジヨボルト達の事や、結界を破る方法くらい見つけとるやろ・・・」

りずむ

「その方法が何なのかかわからないと、遅れを取るままですね・・・」

マジヨリン

「ですから今、昔の事に詳しいマジヨスローンにあの場所の事を調べてもらっています。もう少しかかると言っていました。」

みすず

「じゃあ、どれみちゃん達6人はそれまでマジヨトロンさんの所に行くの良いよ。」

はづき

「え、なぜ？」

ほしみ

「マジヨフルーレでエレメントの力を使うには、エレメントをマジヨフルーレに注ぎ込まなきゃいけないの。エレメントはコロンタツプに宿ってるから、エレメントを注ぎ込むまでは変身できなくなるわ。」

どれみ

「そうなんだ。」

はづき

「じゃあ、私達行って来ますね。」

あいこ

「アタシらが留守の間、しっかり頼むで！」

ほのか

「任しとき！」

さつき

「邪魔するヤツは・・・ぶちのめす!!」

りずむ

「さつき、お手柔らかにね・・・」

どれみ達は、マジョトロンの研究所へと向かった。

みすず

「そういえば、ハナちゃんはどうしてるんです？」

マジョリン

「しっかり修業を積んでますよ。女王様候補というのがありますが、ハナちゃんは物覚えが早いですね。」

ほのか

「ほな、アタシらも行こか？」

のぞみ

「待って！その前に・・・」

さつき

「のぞみ？」

のぞみ

「カウンセリング行かないとー！」

ズテッ！

さつき達はすっかりこけた。

さつき

「今日予約してたのね・・・」

のぞみ達は、マジヨバルスの家にやって来た。

のぞみ

「マジヨバルスさんー！！」

のぞみが叫ぶと、家からSNSンが出て来た。

SNSン

「あ、のぞみちゃん！今日は時間前に来れたのね。だけど今日は先客がいるのよ。」

のぞみ

「先客？」

「あゝ、終わった終わった・・・」

家から出て来たのは、水色のショートヘアの少女だった。

ほしみ

「か、かげみ!!」

夜空かげみ

「そ、その声・・・ほしみお姉ちゃん？」

ほしみ

「そうよ、かげみ・・・」

かげみ

「お姉ちゃん!!」

かげみはほしみに抱きついた。

ほしみ

「わっ!!」

かげみ

「寂しかったよ、お姉ちゃん・・・」

ほしみ

「ゴメンね、心配かけて。」

さつき

「姉妹の感動の再会ね。」

ほか

「泣けてきよるわ・・・」

りずむ

「感動の再会喜んでるトコ悪いけど・・・のぞみのカウンセリング、終わったみたいよ?」

みすず

「え、もう?」

のぞみ

「あなた達のそれが長すぎるのよ!」

さつき

「で、どうだった?」

のぞみ

「それが変なのよ。アタシの記憶、どうもいじられてるみたいだね。」

「

りずむ

「いじられてる?」

ほか

「それってどういつこっちゃ?」

「あなたが知る必要はないのよ。」

突然の声にのぞみ達が空を見上げると、マナが降りて来た。

タンッ！

マナ

「和久のぞみ、あなたにはこれ以上カウンセリングをやってもらっちゃ困るのよ・・・」

ほしみ

「なぜのぞみの記憶を取り戻す事が、あなたに関係あるワケ？」

ほのか

「知られたらマズい事でもあるんか？」

マナ

「答える義務はないわ。どちらにせよ、あなた達にはくたばってもらう。」

のぞみ

「そうはいくか！みんな、行くわよ！！」

さつき・ほのか・りずむ・みずず・ほしみ・かげみ

「ええ！！」

のぞみ達は、スウィートパトレーヌに変身した。

マナ

「最初から全力で行くわよ。出でよ、ミラクルマター！！」

マナは呪文で魔獣を召還した。

のぞみ

「あらゆる属性を持つミラクルマター・・・」

さつき

「そっちがその気なら！ライライパトレーヌ！！」

さつきはポロンから草のエレメントを噴き出し、ミラクルマターを攻撃した。

ガガガガ！！

マナ

「くっ・・・」

のぞみ

「一気に決めるわよ！！」

のぞみの声と同時に、マナの気配を察知していたマジョルカが現れた。

マジョルカ

「のぞみちゃん達に力を！！」

のぞみ

「ウィンディフルーレ！静やかな光！！」

さつき

「フォレストフルーレ！淑やかな光！！」

ほか

「ボルケーノフルーレ！麗らかな光！！」

りずむ

「グレイシャフルーレ！艶やかな光！！」

みすず

「ティンクルフルーレ！鮮やかな光！！」

ほしみ

「レインボーフルーレ！輝かな光！！」

かげみ

「シャドウムフルーレ！秘めやかな光！！」

のぞみ

「7つの光で、闇を消し去る！！」

のぞみ・さつき・ほか・りずむ・みすず・ほしみ・かげみ
「おジャ魔女・レインボースター・ダストクラッシュ！！！！」

のぞみ達は、強力な呪文を放った。

マナ

「くっ・・・7人そろったこの力・・・」

マナはスッと消える。

次の瞬間、ミラクルマターはのぞみ達の呪文を受けて消滅した。

ドゴォ！！

パァン！！

マナ

「徐々に力をつけてきてる・・・早急に何とかしなければ・・・」

マナは、顔をしかめていた・・・

第27の呪文：掴んだ！マジョボルトの足取り！！（後書き）

どれみ「マジョボルト達の足取りを掴んだけど、このまま行って大丈夫かしら・・・」

はづき「そうね・・・私達が力をつけた分、ソラミ達も力をつけているかも・・・」

のぞみ「心配ご無用！そんな事もあるうかと、女王様が最後の切り札を用意してくれたわ！！」

あいこ「最後の切り札・・・」

おんぷ「一体、どんな力なの！？」

さつき「次回、おジャ魔女どれみドッカ〜ン！！『伝説の力！みなぎるレジェンドパトレーヌ！！』よ！！さあ、暴れてやりましょう！！」

第28の呪文：伝説の力！みなぎるレジェンドパトレーヌー！（前書き）

キャラクター・ファイル3

妹尾あいこ

大阪から美空町にやって来た女の子。

思った事をすぐ口に出してしまう性格のため最初はどれみやはづきとの仲は良くなかったが、後に打ち解ける。

両親を仲直りさせるため、はづきと共に魔女見習いになった。

当初はたこ焼きを出すつもりで焼きダコを出してしまった事もある。お笑いに結構厳しい。

どれみメンバーの中ではあまり恋愛事に干渉しないタイプだが、後にかつての幼なじみ・アンリマーがやって来て結婚の約束を本人も適当にやっていた事が発覚。

その後大阪で再びアンリマーと出会い、2度目の告白を受ける。

今は戻れないと言ったあいこだったが、卒業式に迎えに行くというメールを見て涙を流した。

両親が別居しているため家事はほとんどあいこがやっており、それ故料理は得意な方。

アンリマーの件に決着をつけたからかエレメントに覚醒。

水のエレメントを操り、大量の水で火事を消す事もできる。

魔法の呪文はパメルクラルクラリロリポップン、マジカルステージ時は高らかという言葉が入る。

キャッチフレーズは『高らかな水の浪花っ娘』。

マジョフルーレはウォーティフルーレ。

第28の呪文：伝説の力！みなぎるレジェンドパトレーヌ！！

マナを追い返したのぞみ達は、女王様の所に戻って来ていた。

のぞみ

「驚いたわ、まさかマナが自ら襲ってくるなんて。」

さつき

「のぞみの記憶が戻る事で、マナにとって都合が悪い事があるって事よね？」

ほのか

「・・・やな。その事も探らなアカン。」

かげみ

「私も協力する。お姉ちゃん達の役に立ちたいから。」

ほしみ

「助かるわ、かげみ。マジヨボルトやマナ達を倒すためには、味方は1人でも多い方が良い。」

りずむ

「じゃあ、そろそろ戻りましょう。」

のぞみ達は、女王様の所へと戻った。

のぞみ

「え？まだどれみちゃん達戻って来てないんですか？」

魔女界の女王様『ええ。』

マジヨリン

「恐らく、どれみちゃん達のエレメントが思いの外多くて注ぐのに時間がかかってるのでしょう。」

さつき

「どうする、のぞみ？」

のぞみ

「うーん、ただ待つのもヒマだなあ。」

マジヨリン

「では、私と戦ってみます？」

のぞみ

「マジヨリンさんと？」

さつき

「それも良いわね。アタシ達、マジヨリンさんの戦ってるトコロあまり見た事ないし。」

マジヨリン

「では、魔女界の奥地にある森に向かいましょう。そこなら邪魔は入りません。では、女王様。『久しぶりに』遊んできます。」

魔女界の女王様『あまりはっちゃけないようにね・・・』

マジョリン

「はい」

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず・ほしみ・かげみ
「・・・」

若干不安になったのぞみ達だった。

マジョリンと共に森に向かうのぞみ達。

それを静かに見張る者がいた。

朝香ナナコだ。

ナナコ

「マナ様に言われて来てみたけど・・・確かにアイツら、変わった
ようだな。しかし、オレには勝てん。出でよ!!」

ナナコはポロンを振りかざした。

カツ!!

マジヨリン

「さあ、戦いましょう?」

のぞみ

「みんな、行くわよ!」

マジヨリン

「私が長い間封印してきた通り名を教えてください・・・風踊る神秘の舞姫・マジヨリン・・・私は・・・風使いです!! ウィンドリル・バーン!!」

マジヨリンは風をドリル状にして放った。

りずむ

「風なら凍らせれば良い! グレイシャフルーレ! 冷凍ビーム!!」

りずむはグレイシャフルーレから冷気の光線を放った。

ビュオオオ!!

ビキビキ・・・

しかし、術の勢いは止まらない。

マジヨリン

「その程度では止まりませんよ?」

りずむ

「ウソ!」

ほか

「そやったら、燃やしたる！ボルケーノフルーレ！大文字焼き！！」

ほかはボルケーノフルーレから強力な炎を放つ。

ゴオオオオオ！！

術は燃えた。

マジョリン

「あらら、燃えちゃいましたね。なら、これはどうですか？ウィン
ドウィップ！！」

マジョリンは風のムチを放った。

ビュルルル！

ムチがのぞみ達を絡め取る。

パシッ！

のぞみ・さつき・ほか・りずむ・みすず・ほしみ・かげみ
「わっ！！」

マジョリン

「えっいつ！！」

マジョリンはムチを振るい、のぞみ達を地面に叩きつけた。

ドオン！！

ほか

「っ、強い！」

さつき

「それに、何か戦いを楽しんでる感じがするわ。」

のぞみ

「当たり前よ。マジヨリンさんは学生時代、相当のじゃじゃ馬娘だったんだから。」

りずむ

「のぞみ、マジヨリンさんの学生時代を知ってるの？」

のぞみ

「知ってるも何も、マジヨリンさんもお母さんと同級生だったのよ。」

「

みすず

「ウソッ！？」

マジヨリン

「私、最初はクールに振る舞っていたんですが、マジョライトさんに『あなたらしくない』って言われてしまいましたね。どうせなら思いっきり弾けちゃいなよってアドバイスされたんです。」

ほしみ

「・・・で、そうなったと？」

マジヨリン

「はい」

ズテッ！

のぞみ達はすっかりこける。

さつき

「まさかのぞみのお母さんが原因とは・・・」

のぞみ

「何吹き込んだのよ、お母さん・・・」

「オマエら、味方同士で何遊んでんだよ？」

声のした方にのぞみ達が振り向くと、ナナコがホウキに乗って飛んでいた。

りずむ

「ナナコ！！」

ナナコ

「よう！」

ほのか

「何しに来たんや？」

ナナコ

「半分は偵察。それでもう半分は・・・オレとも遊んでくれよ！コイツとなー！！」

ナナコは巨大なロボットを召還した。

ボンッ！

みすず

「これって・・・」

ほしみ

「星のカービィに出てくるHR・H？」

ナナコ

「違うんだな、これが。コイツはオレがその辺のガラクタを集めて作った、HR・Vだ！」

さつき

「1字変えただけじゃない・・・」

ナナコ

「ゴチャゴチャうるさいヤツらだな。とにかく勝負だ！やれ、HR・V！！」

『ゴオオ！！！！』

HR・Vは両肩からミサイルを飛ばしてきた。

ドン！

マジョリン

「真空の刃！！」

マジヨリンは鎌鼬でミサイルを叩き斬る。

ズバツ！

のぞみ

「アタシだって！螺旋突風！！」

のぞみはウィンディフルーレから螺旋状の風を放った。

ビュオオオ！！

ナナコ

「クッ、なかなかやるじゃん。だがこれならどうだ？HR-V、モ
ード2！！」

HR-Vは変形し、両手をハサミに変えたロボットに変化した。

ガシャン！

ナナコ

「フッフ、バージョン2・HR-V7！コイツらを叩き潰せ！！」

HR-V7はハサミを振りかざし、のぞみ達に向かって来た。

のぞみ

「みんな！フルーレで一気に攻撃よ！！」

さつき・ほのか・りずむ・みすず・ほしみ・かげみ
「ええ！！」

のぞみ達はフルーレを振るい、一気に攻撃した。

ドガガガガ！！

だが、ロボットは微動だにしない。

さつき

「そ、そんな！私達の一斉攻撃が効かない！？」

ナナコ

「コイツの防御力は並大抵じゃねえんだよ！さあ、そろそろ終わりにしようぜ？」

「終わりなのは、あなたの方よ！！」

ナナコ

「だ、誰だ！？」

ナナコが振り向くと、そこには新たな服に身を包んだどれみ達がついていた。

のぞみ

「あの姿は、レジェンドパトレーヌ！？」

どれみ

「みんな！エレメントの力であるロボットを止めるわよ！！」

はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ
「はい！！！！」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ
「エレメント・レジエンドウィップ!!」

どれみ達はポロンからエレメントのムチを放ち、ロボットを絡め取った。

パシッ!

どれみ

「今よ!!」

マジョルカ

「のぞみちゃん達に力を!!」

のぞみ

「ウィンディフルーレ! 静やかな光!!」

さつき

「フォレストフルーレ! 淑やかな光!!」

ほのか

「ボルケーノフルーレ! 麗らかな光!!」

りずむ

「グレイシャフルーレ! 艶やかな光!!」

みすず

「ティンクルフルーレ! 鮮やかな光!!」

ほしみ

「レインボーフルーレ！輝かな光！！」

かげみ

「シャドウムフルーレ！秘めやかな光！！」

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず・ほしみ・かげみ

「7つの光で、闇を貫け！！おジャ魔女・レインボースター・ダストクラッシュ！！！！」

のぞみ達はフルーレから攻撃を放った。

ドン！！

ナナコ

「クソッ！！」

ナナコは消える。

次の瞬間、のぞみ達の攻撃がHR・V7を消し去った。

ドゴォ！！

パンツ！！

のぞみ

「助かったわ、どれみちゃん！」

マジョリン

「では、そろそろ戻りましょうか。」

どれみ達は、女王様の所へと戻った。

第28の呪文：伝説の力！みなぎるレジェンドパトレーヌ！！（後書き）

どれみ「マジヨスローンさんがついにマジヨボルト達の足取りについて調べてくれたよ！」

はづき「それによると、どうも結界を解かないといけないみたいね。」

あいこ「カギを握るのは12の宝石！」

おんぷ「マジヨボルト達、今度はアタシ達が追いかける番よ！！」

ももこ「次回、おジャ魔女どれみドツカ〜ン！は『探し出せ！12の宝石！』だよ！！」

ぽっぷ「マジヨボルト側も新しい敵がたくさん登場！」

のぞみ「アタシ達の戦い、皆さんも応援してくださいね♪」

第29の呪文：探し出せ！12の宝石！！（前書き）

キャラクター・ファイル4

瀬川おんぷ

MAHO堂のメンバーで、有名なチャイドルでもある女の子。

当初はどれみ達3人とはライバル関係にあり、禁断の魔法も平気で使っていた。

しかし第1期最終回でどれみ達をかばって100年の眠りにつきかけたところをどれみ達に救われ、MAHO堂のメンバーに。

第2期では仕事で忙しい分精一杯ハナの面倒を見るなど優しい一面を垣間見せる。

どれみに一番感謝している子。

ゆくゆくはチャイドルを越えて女優になりたいと思っており、その事を決意したからかエレメントが覚醒。

氷の力を操り、敵を凍らせたりできる。

余談だがマジョルカを魔女ガエルにしたのはおんぷである。

第3期ではピーマンが苦手という事が判明するも、頑張つて克服した。

魔法の呪文はプルルンプルンファミファミファー、マジカルステージ時は涼やかという言葉が入る。

キャッチフレーズは『涼やかな氷の歌姫』。

マジョフルーレはアイシクルフルーレ。

第29の呪文：探し出せ！12の宝石！！

ナナコを撃退したどれみ達は、魔女界の女王様の所に戻っていた。

魔女界の女王様『そうですか、またマジョボルトの手下が・・・』

のぞみ

「はい。ですがどれみちゃん達のおかげで助かりました！」

魔女界の女王様『あなた達はどれみちゃん達の先輩として、一時的にレジェンドパトレーヌの能力を省いていました。ですがこうなつた以上、あなた達も再びレジェンドパトレーヌの能力を使ってもらいます。マジョリン！』

マジョリン

「はい！」

マジョリンはのぞみ達7人のポロンに、エネルギーを注ぎ込んだ。

パアアアア・・・

マジョリン

「これでまた、のぞみちゃん達もレジェンドパトレーヌが使えるでしょう。」

さつき

「これでアタシ達も全力が出せるわ！」

のぞみ

「それで女王様、マジョボルト達の件ですが・・・」

魔女界の女王様『その件なら、ようやくマジョスローンが調べ上げてくれました。マジョスローン!』

「はい!」

マジョスローンが現れた。

どれみ

「え!？」

どれみ達はマジョスローンの姿に驚いた。

なぜならマジョスローンの姿が、とてもスマートだったからだ。

はづき

「あら？確かマジョスローンさんって、出不精でとても太っていたような・・・」

マジョスローン

「それがイヤだったから、最近登山を始めたんですよ。」

ほのか

「アタシらもしょっちゅう巻き込まれてるしな。」

おんぷ

「どれだけやったらそこまで体重が減るんですか・・・」

どれみ達は啞然としていた。

魔女界の女王様『それでマジョスローン、頼んでおいた件ですが・・
』

マジョスローン

「ええ、確かあそこは聖魔霊山でしたね。本来なら邪悪な魔女は入れない場所。しかし、12の宝石を集めれば話は別です。」

どれみ

「12の宝石？」

マジョスローン

「ええ、魔女界のそれぞれの果てに隠されている12の宝石です。マジョボルト達はそれを使って中に入り込んだでしょう。」

ほのか

「ほんで、中に入った後は再び果てに飛ばしたうちゅう事か？」

マジョスローン

「ええ。宝石は1度結界の中に入れば元の場所に戻りますから。」

りずむ

「それで、その宝石達はそれぞれどこにあるんですか？」

マジョスローン

「魔女界の果てですから、それぞれかなり厳しい所にあります。まず一番探しやすい所にある宝石から探した方が良いでしょう。まずはラグーンスターという宝石を探しなさい。」

みすず

「それで、そのラグーンスターはどこに？」

マジョスローン

「この古い書物によると、流水の洞窟にあると書かれています。」

ほしみ

「流水の洞窟……」

かげみ

「とても寒そうな所ですね……」

さつき

「どんなに寒い所でも、行くしかないわ！」

はづき

「そうね。」

マジョスローン

「北にまっすぐ進んで行けば、その内年中ずっと雪が降る場所に着くでしょう。ラグーンスターが眠る流水の洞窟はその先です。」

魔女界の女王様『皆さん、気をつけてくださいね。』

どれみ

「はい!!」

どれみ達は、流水の洞窟を探して城を出た。

その彼女達を、監視している者達がいた。

ソラミとミヅキだ。

2人は不敵に笑うと、ポロンを振って消えた。

どれみ達が歩き始めて、もう1時間が経った。

雪が降る場所には着いたものの、流水の洞窟の入口がどうしても見つからない。

どれみ

「ハア、なかなか見つからないね・・・」

はづき

「マジヨリンさんの話じゃ、果てにある場所の入口近くには魔法に反応する装置があるみたいなんだけど・・・」

あいこ

「それも見つからへんやん・・・」

おんぷ

「心が折れそうだわ・・・」

「だったら諦めちゃいなさいよ。」

ももこ

「誰!？」

どれみ達の目の前に、ソラミとミヅキが現れた。

ザッ!

ソラミ

「なら諦めれば良い。」

ミヅキ

「ついでにあなた達を凍らせて、氷像を作ってあげるわ。」

どれみ

「そうはいくか!みんな、行くよ!!」

どれみ達はレジェンドパトレーヌに変身した。

ソラミ

「炎の力よ!溶岩の魔獣を生み出せ!!」

ミヅキ

「水の力よ!大海の魔獣を生み出せ!!」

ソラミとミヅキはポロンを振り、魔獣を2体召還した。

ボウン!

ほしみ

「ヨガンにアクロ!？」

ソラミ

「コイツらはゲームのヤツとは格が違うわよ。」

ミヅキ

「アタシ達が操る魔獣だからねえ。さあ、やれ!」

ヨガンとアクロはそれぞれ口から光線を放つ。

ドシュツ!!

あいこ

「炎には水や!」

ももこ

「水には雷!」

あいことももこはポロンから盾を放ち、攻撃を防いだ。

ドオン!!

ミヅキ

「やるわね。なら、これならどう?」

ソラミ

「合体!合成魔獣・ヨガクロン!!」

ヨガンとアクロは合体し、巨大な合成魔獣になった。

どれみ

「巨大化しても変わらないわ！」

どれみ達6人はマジカルステージでヨガクロンの動きを止めた。

マジョルカ

「のぞみちゃん達に力を！！」

のぞみ

「ウィンディフルーレ！静やかな光！！」

さつき

「フォレストフルーレ！淑やかな光！！」

ほのか

「ボルケーノフルーレ！麗らかな光！！」

りずむ

「グレイシャフルーレ！艶やかな光！！」

みすず

「ティンクルフルーレ！鮮やかな光！！」

ほしみ

「レインボーフルーレ！輝かな光！！」

かげみ

「シャドウムフルーレ！秘めやかな光！！」

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず・ほしみ・かげみ

「7つの光で闇を貫け！！おジャ魔女・レインボースター・ダスト

クラッシュ！！！」

のぞみ達は攻撃を放つ。

ソラミ

「チッ！」

ソラミとミヅキは撤退する。

次の瞬間、ヨガクロンは消滅した。

ドゴォ！！

パン！！

みすず

「何とか追い返せた・・・」

さつき

「あ、装置を見つけたわ！紫色で氷って書いてある！」

おんぷ

「じゃあ、アタシか。」

おんぷがポロンを装置に向けると、反応して山になっていた所がせり上がってきた。

ゴゴゴ・・・

どれみ

「これが、流水の洞窟・・・」

第29の呪文：探し出せ！12の宝石！！（後書き）

どれみ「流水の洞窟に足を踏み入れたアタシ達！」

はづき「そこに現れたのは、トンボを人間化した姿の人！」

あいこ「しかもものんちゃん達はコイツの事を知ってるみたい？」

おんぷ「どういう関係なのか気になるわ。」

ももこ「次回、おジャ魔女どれみドッカ〜ン！は『氷のラグーンスタ〜！懐かしの敵！？』だよ！！！」

のぞみ「まさか生きてたとはね・・・」

第30の呪文：氷のラゲーンスター！懐かしの敵・ラムダー！！（前書き）

キャラクターファイル5

飛鳥ももこ

どれみの仲間の1人で、パティシエ志望の女の子。

元々はマジョモンローの元で修業していたが、最後の試験に受かった日にマジョモンローを寿命で亡くし、マジョモンローの命を救おうと禁呪を使い水晶玉を失ってしまう。

どれみ達が5年生になった際、パティシエ試験を受けるにあたって助っ人として女王様に呼ばれ彼女達の仲間となった。

マジョモンローの形見としてピアスをつけている。

アメリカにいた頃に似た風貌の子がいたためか玉木麗華とは折り合いが悪かったが、今では親友に。

剣道を嗜む岡島小太郎とは恋人関係にあり、どれみ達に冷やかされる事も。

プロのパティシエを目指す夢を志し、その影響でエレメントも覚醒。雷を操り、衝撃波でマヒさせる事ができる。

魔法の呪文はペルタンペットンパリラポン、マジカルステージ時は爽やかという言葉が入る。

キャッチフレーズは『爽やかな雷のパティシエ』。

マジョフルーレはエレクトロフルーレ。

第30の呪文：氷のラゲースター！懐かしの敵・ラムダー！！

どれみ達はソラミとミヅキを撃退し、流氷の洞窟を訪れていた。

どれみ

「ここが流氷の洞窟かぁ・・・」

はづき

「話に聞いた通り、寒い所ね・・・」

あいこ

「まさに世界の果てやな。」

おんぷ

「さて、宝石はどこにあるのかしら？」

のぞみ

「ちょうど3つの分岐点があるから、手分けして探さない？」

さつき

「良いアイデアね。」

ジャンケンの結果、どれみ・はづき・おんぷ・りずむ・みすずの5人、のぞみ・さつき・あいこ・ほのかの4人、ぽっぷ・ももこ・ほしみ・かげみの4人の3チームに分かれて探索する事になった。

のぞみ・さつき・あいこ・ほのか組

のぞみ達は、左端のルートを探索していた。

ほのか

「ウチの術で体が常に暖かい状態にしようから、あんま寒くないな。」

あいこ

「そやな。ほんで、宝石はどこにあるんやろ?」

のぞみ

「うーん・・・あ! コユキワラシだわ。」

さつき

「本当! カ〜ワイ〜」

さつきはコユキワラシに近寄って行く。

すると、急にさつきがコケた。

コユキワラシが足下を凍らせたからだ。

ドテッ!

さつき

「キャッ!〜!」

『ケケケ・・・』

のぞみ

「さつき！大丈夫？」

さつき

「おどれ、ええ度胸やないけゝ・・・」

のぞみ

「さ、さつき・・・？」

さつき

「このアタシにこんな事しくさって、無事で済むと思うなやあゝ！
」！」

ほのか

「わゝゝ！！さつきちゃんがキレたあゝ！！」

のぞみ

「さつき、落ち着いて！こんな所でそんな大声出したら・・・」

『ワシのカワイイ娘いじめとるのはオマエらかあ！？』

のぞみ

「コユキワシの進化系、ユキオニゴーリ！！」

「オマエか小娘・・・ギタギタにしたる！！」

のぞみ

「さつき！危な・・・」

さつき

「じゃかあしいんじゃー!!」

さつきは木刀でユキオニゴーリとコユキワラシを吹っ飛ばした。

バキィ!!

ドゴォ!!

のぞみ

「さ、さつき・・・」

さつき

「ん？私何かした？」

のぞみ・あいこ・ほのか

「（お、覚えてないのね・・・）」

のぞみ達3人は、さつきの豹変ぶりに啞然としていた・・・

どれみ・はづき・おんぷ・りずむ・みすず組

どれみ達5人は、湖のような場所を進んでいた。

どれみ

「りずむちゃん、あの小さいのは何？」

りずむ

「あれはコペンギーといって、この湖に生息してる魔獣よ。」

はづき

「魔獣と一口に言っても色々いるのね。」

みすず

「コペンギーなんてまだカワイイもんだよ。ヒョウヤマカガシなんかに出会ったら最悪よ。」

みすずがそう言った時、湖が揺れ始めた。

ボコボコ・・・

『シャー!!』

みすず

「ヒョウヤマカガシ!!」

りずむ

「本当に出て来るなんて・・・」

どれみ

「みんな、行くよ!!」

ぽつぷ・ももこ・ほしみ・かげみ組

ぽつぷ達4人は、真ん中の道を進んでいた。

ぽっぷ

「ねえ、何だか入口に比べて寒さが増してない・・・？」

ももこ

「そだね、何だか凍えそう・・・」

ほしみ

「のぞみが言ってたんだけど、入口と異様に雰囲気が違うって事は、何人たりとも近づかせない仕掛けが施されてるって事だね。という事は、恐らく・・・」

ほしみの眼前に、キラキラと光る宝石が見えた。

ほしみ

「やっぱり当たりだわ！これがラグーンスターよ！！」

ぽっぷ

「これが、伝説の宝石・・・」

かげみ

「お姉ちゃん、早く回収しよ！」

ほしみ

「そうね！」

「残念だが、その宝石を君達に渡すワケにはいかない。」

ももこ

「誰！？」

ほしみ達が声のした方を向くと、そこには中年サラリーマン風の男が立っていた。

ほしみ

「あなたは・・・魔獣帝国ウィザードのラムダ!」

ラムダ

「久しぶりだねえ、おジャ魔女のお2人さん。」

ももこ

「ほしみちゃん達の知り合い?」

かげみ

「のぞみ達が言ってたでしょ?お姉ちゃん達はある組織と戦ってた。それが魔獣帝国ウィザードよ。」

ほしみ

「でも、ウィザードは1年前に滅ぼしたハズなのに・・・」

ラムダ

「確かに私のボス、カイザーウィザード様は君達に滅ぼされた。だが私は生きていたのだよ。あの時、私は別行動を取っていたからねえ・・・」

ほしみ

「そういう事。でもどうしてあなたが邪魔をするの?」

ラムダ

「私はマジョボルト様の所に再就職したんだよ。まあ待遇は悪いがね。今の私の任務は、君達から宝石を奪う事だ!」

そう言うとラムダはトンボのような姿に変身し、ボールのような物を取り出した。

ラムダ

「ゆけい、エネルギーボール!!」

エネルギーボールは近くにいたヒョウガガエルに憑依し、巨大化する。

ボウン!!

『ギャオオオオ!!』

ぽっぷ

「きよ、巨大化した!!」

ほしみ

「3人共、行くわよ!!」

ほしみ達はスイートパトレーヌに変身し、巨大ヒョウガガエルに向かつて行った。

かげみ

「ジュエールリオーラドロシード!影のムチよ、ヒョウガガエルを攻撃!!」

かげみはポロンを地面に刺し、地面から無数の影のムチを放つ。

ギョオッ!!

ラムダ

「その程度か？ハアッ！！」

ラムダは右手の砲台から針を連射し、ムチを破壊していく。

かげみ

「クッ・・・」

『ギヤオオオオオ！！』

ヒョウガガエルは口から光線を放つ。

ほしみ・ぽっぷ・ももこ

「キヤアアアア！！」

かげみ

「お姉ちゃん！！キヤッ！！」

次の瞬間、かげみ達は全員ヒョウガガエルの舌に捕まってしまった。

かげみ

「うぐう・・・」

ラムダ

「トドメだ、ヒョウガガエル。」

その時・・・

「ウインドサイクロン！！」

ドゴォー!!

『ギャンー!!』

ラムダ

「な、何!？」

突然の風攻撃に、ヒョウガガエルは怯んでかげみ達を放す。

ぽっぷ達が着地すると、どれみ達が集結していた。

ぽっぷ

「お姉ちゃん!」

どれみ

「遅くなってゴメン!」

あいこ

「さあ、今度はこっちのターンやで!!」

マジョルカ

「のぞみちゃん達に力を!!」

のぞみ

「ウィンディフルーレ! 静やかな光!!」

さつき

「フォレストフルーレ! 淑やかな光!!」

ほか

「ボルケーノフルーレ！麗らかな光！！」

りずむ

「グレイシャフルーレ！艶やかな光！！」

みすず

「ティンクルフルーレ！鮮やかな光！！」

ほしみ

「レインボーフルーレ！輝かな光！！」

かげみ

「シャドウムフルーレ！秘めやかな光！！」

のぞみ

「7つの光が、闇を貫く！！」

のぞみ・さつき・ほか・りずむ・みすず・ほしみ・かげみ

「おジャ魔女・ペンデュラムスター・ダストクラッシュ！！！！」

ゴオッ！！

ラムダ

「バカな・・・こんなにパワーアップしてるなんて聞いてないぞお！！」

ラムダは消える。

次の瞬間、ヒョウガガエルは浄化されて元の姿に戻った。

こうして、どれみ達は見事1つ目の宝石を手に入れたのだった。

第30の呪文：氷のラゲースター！懐かしの敵・ラムダ！！（後書き）

どれみ「かつての敵の生き残り・ラムダを何とか撃退したよ！」

はづき「でも、まだあんな部下がいるのかしら・・・」

あいこ「辛気臭い顔すなつて！今度は花畑らしいやん！」

おんぷ「何か、明らかに場違いな人がいるんだけど・・・」

ももこ「やっぱりこの人、敵だね・・・」

ぼっぷ「次回、おジャ魔女どれみドツカーン！は『虹のラバーズスター！毒を持つ男！！』」

さつき「次回も大暴れしてやるぜ！！」

のぞみ「さつきがまだ戻ってない!?」

第31の呪文：虹のラバーズスター！毒を持つ男の襲撃！！（前書き）

キャラクター・ファイル6

春風ぽつぷ

春風どれみの妹で、どれみ達3人が魔法を使うところを目撃したため魔女見習いとなった女の子。

幼稚園児だが男の子にモテてマせており、姉であるどれみの事も最初はバカにしていた。

だが今はすっかりどれみを信頼している。

デラをほめちぎって料金をまけさせるなど、舌術にも長けている。マジヨリカの事を『ブニユちゃん』と呼び、気に入っている。

きみたかとは遠距離恋愛中であり、妹としてどれみを支える事を決心しエレメントが覚醒。

どれみと同じく炎を操る。

魔法の呪文はピットブリットプリタンペルト、マジカルステージ時はほがらかという言葉が入る。

ただし初披露時は6級で魔力も少なかったため、人数が少ないと効果が弱まる弱点が 期にはあった。

キャッチフレーズは『ほがらかな炎の美少女』。

マジョフルーレはスパイラルフルーレ。

第31の呪文：虹のラバーズスター！毒を持つ男の襲撃！！

マジョボルト達のアジト マナの部屋

マナの部屋には、マジョボルトの部下達がいた。

ジガピオンのスコール。

オクタロンのタコス。

ガブレシアのレイア。

スパドロスのドルーズ。

イソギリンとヤドガーンのギイルとガイル。

ムカーリアのカリス。

そして、ギガノラムのラムダ。

どれもこれも精鋭揃いだ。

スコール

「マナ様、次は自分に行かせて下さい。そもそもこんな新入りに先鋒を任せる事自体間違っていたのです！！」

ラムダ

「なっ……」

マナ

「良いでしょう。次はスコール、あなたに任せるわ。他のメンバーも自分の部屋で待機しておく事。良いわね？」

タコス・レイア・ドルーズ・ギイル・ガイル・カリス・ラムダ
「ハッ！！」

ラムダ

「（フン、スコールはまだまだ青いわ・・・）」

他のメンバーは自分の部屋に戻って行った。

マナ

「ウフフ・・・マジョボルトも良い者達を集めてくれたわ・・・これで、私の野望にまた1歩近づける・・・問題は和久のぞみ・・・記憶を完全に取り戻す前に始末するか・・・？イヤ、もっと良い方法があるわ・・・」

マナは不敵に微笑んでいた・・・

魔女界 魔女界の女王様の部屋

魔女界の女王様「そうですか、スノースターを回収できましたか。
のぞみ

「ええ、ウィザードの生き残りであるラムダに妨害されましたが、

何とか回収できました!」

マジョスローン

「次の宝石はラバーズスターです。ラバーズスターがあるのは、草花の楽園です。」

どれみ

「花園ですか?」

あいこ

「氷の洞窟よりはマシやな。」

マジョスローン

「西の森をしばらく進むと、花畑が左右にある道路が見えてきます。草花の楽園はそこにありますよ。」

どれみ

「みんな、頑張ろうね!!」

そして、草花の楽園

はづき

「この入口は赤で虹と書かれてたわ。だからほしみちゃんの力で開いたのね。」

ほしみ

「流水がおんぷちゃん、ここが私だった。この分だと、他の宝石の場所にもみんなに対応したロックがあるわね。」

のぞみ

「さあ、宝石を探しましょう！」

それから30分後・・・

どれみ達は最奥部の花園で、虹色に光る宝石を見つけた。

おんぷ

「キレイ・・・これがラバーズスター？」

のぞみ

「そうみたいね、早く回収しましょう。」

どれみ達は宝石を取りに行こうとした。

「おっと、待ちたまえ。」

どれみ達が声のした方を向くと、そこには緑色の髪をした青年が立っていた。

さつき

「あなた、何者？」

「私か？私の名はスコール。ジガピオンのスコールだ。」

あいこ

「マジョボルトの手下やな！」

スコール

「ご名答。さて・・・見たところ君達はその宝石を取りに来たようだね。」

りずむ

「それが何なのよ？」

スコール

「悪いが君達に宝石を集めさせるワケにはいかないんだ。マジョボルト様及びマナ様の野望を達成するためには、少し時間が必要だね。そのためには君達を足止めしなければならない。その宝石、没収させてもらうよ！！」

どれみ

「そうはさせないわ！みんな、行くよ！！」

どれみ達は変身した。

スコール

「それでは私も少し本気で行かせてもらうよ。」

スコールはサソリのような姿の人間に変身する。

スコール

「エネルギーボールよ、魔獣を生み出せ！！」

スコールはエネルギーボールを地面に投げつけ、巨大な大木の魔獣

を出現させた。

ズゴオオオ!!

ほしみ

「コイツは、ウイスピーウツズ!？」

スコール

「これは少し強化された魔獣だよ。名をキラピーウツズと言う。さあキラピーウツズよ、存分に暴れろ!!」

『ギャオオオ!!』

キラピーウツズは頭を揺らし、大量にリンゴを降らせてきた。

バラバラバラバラ!

ほのか

「リンゴやと？」

ほしみ

「気をつけて!ウイスピーを強化したコイツの事だわ、相当ヤバい効果があるハズよ!」

はづき

「ゴメン、食べちゃった・・・」

りずむ・ぽつぷ・みすず

「わ、私達も・・・」

ほしみ

「ちょ、ちよつと〜!？」

はづき

「か、体がシビレてきた・・・」

ぽつぶ

「気分が悪い・・・」

みすず

「ZZZ・・・」

りずむ

「熱い・・・!!」

はづき、ぽつぶ、みすず、りずむが次々と倒れる。

ほしみ

「!!」

スコール

「オレンジの娘が食べた黄色のリンゴはマヒ効果がある。赤の娘の紫リンゴは毒、白の娘の黒リンゴは眠り・・・そして黒の娘が食べた赤リンゴは火傷の効果だ。」

ほしみ

「クッ・・・さすがね。さしずめ『邪悪な大樹魔獣』と言ったところかしら・・・?」

スコール

「良いネーミングセンスだ。だがこの魔獣の前でそのような言葉を吐くとは・・・半ば諦めているようにも聞こえるぞ?」

ほしみ

「クツ・・・だけどこっちにはまだ仲間がいるわ!」

スコール

「それはどうかな?キラピー!!」

『ゴオオオ!!』

キラピーは息を大きく吸い込み、青いリングを突風に乘せて吹き出した。

ブオオオ!!

ほしみ

「ハッ!!」

ほしみは華麗に避ける。

だがどれみ達は避けきれずに当たってしまった。

どれみ

「キャッ!!」

次の瞬間、どれみ達は凍りついた。

ビキビキビキ・・・

ほしみ

「みんな・・・!!」

スコール

「青リンゴは氷のリンゴ。リンゴを食べた者やリンゴに触れた者は一瞬の内に凍りつく・・・さあ、これで2VS1だ。君に私達が倒せるかな？」

「1人じゃない!!」

スコール

「ん？」

ほしみの影が動く。

ズッ！

ズズズズ・・・

ほしみの影から、かげみが現れた。

ほしみ

「影隠れの術ね。あなたも成長してるじゃない、かげみ。」

かげみ

「アタシだってマジョランプの娘よ？そう簡単にやられないって。」

スコール

「チッ、妹が無事だったか。だがオマエ達2人だけで何ができる？」

ほしみ

「それはどうかしら？アタシ達は姉妹そろってこそ真価を発揮するのよ！かげみ！！」

かげみ

「了解、お姉ちゃん！！ジュエル〜リオーラ〜ドロシード！影の熱風！！」

ゴオオオオオ！！

かげみが唱えた熱風の呪文が、キラピーウツズのリンゴを全て焼き落とした。

ボトボト・・・

スコール

「な、何だと！？」

かげみ

「アタシ達を甘く見た罰よ！！」

マジョルカ

「ほしみちゃんとかげみちゃんに力を！！」

ほしみ

「レインボーフルーレ！輝かな光！！」

かげみ

「シャドウムフルーレ！秘めやかな光！！」

ほしみ

「虹と影の姉妹そろって時、舞妓の神秘なる力が邪悪な闇を打ち砕く
！！」

ほしみ・かげみ

「レインボーシャドー・メテオフレイム！！」

ほしみとかげみの合体呪文が飛んでいく。

ゴオオオオオ！！

スコール

「チイツ！少し甘く見ていたようだ・・・」

スコールは撤退する。

次の瞬間、キラピーウッズは焼き尽くされて消滅した。

シュパッ！

ゴッ！！

ボウウウウウ・・・

ほしみとかげみはその後どれみ達を元に戻し、ラバーズスターを回収した。

第31の呪文：虹のラバーズスター！毒を持つ男の襲撃！！（後書き）

どれみ「マジヨボルトの新たな刺客、2人目も手強かったね！」

はづき「うん、この分だと他の人達も・・・」

あいこ「一体何人おるんや？」

おんぷ「そんな中離れ小島にある植物園に宝石を探しに来たアタシ達だけど、また刺客が襲ってきたわ！」

ももこ「一難去って何とやらだね・・・」

のぞみ「次回、おジャ魔女どれみドッカ〜ン！！は『草のフォレストスター！海の魔物、来る！！』よ！！」

さつき「海の魔物なんか、何が来ようが刺身にして食ったらあゝ！！」

第32の呪文：草のフォレストスター！海の魔物、来る！！（前書き）

キャラクター・ファイル7

和久のぞみ

魔女界からぞみ達の学校にやって来た女の子。

髪型は『名探偵コナン』の灰原哀と同じくショートボブであり、グリーンの色をしている。

マジョライトの娘であり、さつき達と共に幾度となく魔女界を救ってきた猛者だった。

しかしマジョライトを殺され、自身も禁断呪文によってその時の記憶を消されてしまっているため、定期的にマジョバルスのカウンセリングを受けている。

笑いのツボがかなり浅く、S O S トリオのギャグやF L A T 4のギャグ、果てはオヤジギャグ辞典のダジャレでも笑ってしまうほど。

将来の夢は探偵らしい。

さつきとは幼なじみ。

風のエレメントを操る。

魔法の呪文はパウラピラルペルパウピウレ、マジカルステージ時は静やかという言葉が入る。

キャッチフレーズは『静やかな風の女探偵』。

マジョフルーレはウィンディフルーレ。

第32の呪文：草のフォレストスター！海の魔物、来る！！

マジョボルトのアジト

タコス

「マナ様、次はオレ様に行かせるお！！ここんとかムシャクシャしてて、暴れてえんだよ！！」

マナ

「はいはい、わかったわよ。タコス、次はあなたが行きなさい。」

タコス

「おっしやあ！！暴れて来るぜえ！！」

タコスは飛び出して行った。

ソラミ

「・・・マナ様、良いのですか？あんな野蛮なヤツに任せても・・・」

「

マナ

「タコスは荒々しいけど、実力は確かよ。」

ナナコ

「タコス、ワイルドで格好良い・・・好きだぜ、オレはよ！」

ミヅキ

「ナナコってああいうのが好きなのよね・・・」

魔女界

マジヨスローン

「次の宝石はフォレストスターです。フォレストスターがあるのは、絶海の植物園です。」

あいこ

「絶海つちゅう事は、まさか・・・」

魔女界の女王様『そうです。絶海の植物園はその名の通り、東の海域の中にあります。俗世との関わりを断つ事により、部外者に荒らされる事なく植物が育っている場所です。』

ほのか

「そないな所にどうやって行けるんですか？」

魔女界の女王様『心配ありません。その植物園を管理している元老院魔女がいますから、その魔女に頼めば地図を貸してくれますよ。』

のぞみ

「それって・・・」

さつき

「お母さんだわ!!」

フラワーショップ『ハーブ』

マジョハーブ

『フラワーショップ『ハーブ』オーナー 元老院議員 さつきの母』
「なるほど。女王様からの命で宝石を探してるのね。」

さつき

「うん、フォレストスターがある植物園はお母さんが管理してるって聞いたから。」

マジョハーブ

「さつきも遅くなったわね。ホラ、これが地図よ。」

マジョハーブはさつきに地図を手渡した。

さつき

「ありがとう、お母さん！」

マジョハーブ

「さつき、気をつけなさい。マナは危険な相手よ。」

さつき

「うん、わかってる！」

それから2時間かけて、どれみ達は絶海の植物園へとやって来た。

どれみ

「入口は普通だね・・・」

さつき

「お母さんによれば、宝石がある秘密の入口は最奥部だつてさ。行きましょー!」

そして、ついに入口を見つけた。

さつき

「灰色で草・・・私ね!」

さつきはポロンを向ける。

カッ!

ゴゴゴ・・・

さつき

「あつたわ、フォレストスター!」

その時、大きな音がした。

ドッゴオン!!

どれみ

「何今の音!?!」

どれみ達が植物園の中程に着くと、そこには恰幅の良い男がいた。

はづき

「あなた、誰？」

タコス

「オレ様かあ？オレ様はタコス！オクタロンのタコス様よー！！早速で悪いが、灰色の娘・・・オマエが持つてる宝石を渡してもらおうか？」

さつき

「宝石が狙い！やっぱりあなたマナの部下ね！！」

タコス

「渡す気はなさそうだな。ハ、荒っぽいマネは好きじゃねえんだがなあ・・・」

そう言うと、タコスはタコのような姿に変身した。

タコス

「力づくで奪わせてもらうぜえ！！」

さつき

「どこが荒っぽい好きじゃないのよー！！」

タコス

「うるせえ！！」

タコスはさつき目掛けて触手を伸ばす。

ドシュッ！！

さつき

「甘いわ！！」

さつきは呪文で木刀を取り出し、触手を叩き斬った。

ズバッ！！

タコス

「イテエ・・・よくもオレ様の腕を斬りやがったな！！エネルギーボール！！」

タコスは瞬間移動する。

どれみ達も後を追った。

タコス

「行くぜ？」

タコスはエネルギーボールを海に投げ込み、巨大なタコ型の魔獣を生み出した。

ズゴオオオ！！

タコス

「どうだ！海にタコなんて最高だろ？しかもコイツは流動体だ！オ

マエらの攻撃は通用しないぜえ!!」

巨大タコはどれみ達を襲おうと、触手を伸ばしてきた。

ももこ

「流動体だから何なの？水には雷だよ！perlタンペットンパリ
ラポン!!」

ももこはポロンから電撃を放つ。

バシュッ!!

『ギャオオオ!!』

ももこ

「よし、効いてる!!」

タコス

「やるじゃねえか、すげえじゃねえか。これだから戦いつてのは面
白い。じゃあ、冷気をまえばどうだあ!？」

タコスは青いボールを投げつけ、巨大タコに冷気をまとわせた。

ビキビキビキ!!

どれみ

「冷気は炎に弱い!ぽつぷ、ほのかちゃん!」

ほのか

「よっしゃ!フレムク〜フルク〜ファイアリ〜フォールン!!」

ぽっぷ

「ピピット〜プリット〜プリタ〜ンペペルト!!」

どれみ

「ピ〜リカピリラポポリナペペルト!!」

どれみ・ぽっぷ・ほのか

「ハアッ!!」

どれみ・ぽっぷ・ほのかは火炎弾を巨大タコに浴びせた。

ボオッ!!

タコス

「やってくれるじゃねえか・・・だが、その程度じゃオレ様の魔獣は倒せねえぜえ!!」

タコスが叫ぶと同時に、タコはさらに巨大化した。

ボン!!

どれみ

「そんな・・・」

タコス

「ハッハッハッ!! オレ様のタコはなあ、ダメージを受けた分巨大化していくのよ!! 半端な攻撃じゃ、倒す事はできないぜえ!!」

さつき

「・・・じゃあ、一気に倒せば良いのね？」

タコス

「あん？」

さつき

「私のポロンに宿りし、安らぎの深緑よ！！その力を持って、悪しき魔獣を受け止めよ！！ライライロ～ンフォイリ～ラリラフー！！巨大タコの動きを、止める！！」

さつきがポロンを突き出すと、彼女の周りから生えてきた植物のツルが巨大タコを拘束した。

ガシッ！

タコス

「な、何い！？」

さつき

「今よ！！」

マジョルカ

「のぞみちゃん達に力を！！」

のぞみ

「ウィンディフルーレ！静やかな光！！」

ほか

「ボルケーノフルーレ！麗らかな光！！」

りずむ

「グレイシャフルーレ！艶やかな光！！」

みすず

「ティンクルフルーレ！鮮やかな光！！」

ほしみ

「レインボーフルーレ！輝かな光！！」

かげみ

「シャドウムフルーレ！秘めやかな光！！」

のぞみ

「6つの光で、闇を貫け！！」

のぞみ・ほのか・りずむ・みすず・ほしみ・かげみ

「おジャ魔女・ヘキサゴンスター・ダストクラッシュ！！」

ゴオツ！！

ドン！！

パン！！

さつき

「次はあなたよ。タコのお寿司にしてあげる・・・」

さつきは木刀を取り出す。

タコス

「チイツ！今日のところは引き上げるか・・・」

さつきが突っ込むと同時に、タコスが消えた。

バシユツ！

どれみ達はその後、フォレストスターを回収したのだった。

第32の呪文：草のフォレストスター！海の魔物、来る！！（後書き）

どれみ「これで3人目だね。」

はづき「今回も強い相手だったわ。」

あいこ「今後も気いつけなな。」

おんぷ「そんなこんなで宝石を探していたアタシ達を、また刺客が襲ってきたわ！」

ももこ「今度は童話世界に飛ばされて大ピンチだよ！！」

のぞみ「どんなヤツでも、アタシ達は負けない！！」

さつき「次回、おジャ魔女どれみドッカ〜ン！は『光のサンライズスター！悪夢の童話世界！！』よ！！」

ほのか「童話世界かぁ。おもしろかったらええんやけどな。」

第33の呪文：光のサンライズスター！悪夢の童話世界！！（前書き）

キャラクター・ファイル 8

京極さつき

のぞみの仲間の1人であり、元気いっぱいな少女。

見た目のモデルは『名探偵コナン』の吉田歩美である。

海より深い心を持ち、仲間内でも一番面倒見が良く優しい女の子。

基本的に他人の悩みを聞くのが得意だが自分の悩みはため込みがちであるため、いったん爆発するとんでもない事になるなど面倒くさい一面も。

普段はお淑やかな性格だがキレると誰よりも怖い。

正義感が人一倍強く、理由はどうかあれほのかを誘拐した2人組を逮捕してもらうつもりでいた事もある。

のぞみとは幼なじみで、彼女の事は一番理解している。

剣道が好きなのか自前の竹刀や木刀を持っており、呪文で出している事も。

魔法の呪文はライライロンフォイリララファー、マジカルステージ時は淑やかという言葉が入る。

草のエレメントを持ち、植物を自在に操る。

母親は植物園のオーナー兼フラワーショップ経営の魔女・マジョハープ。

キャッチフレーズは『淑やかな草の女侍』。

マジョフルーレはフォレストフルーレ。

第33の呪文：光のサンライズスター！悪夢の童話世界！！

マジョボルトのアジト

レイア

「マナ様、次はこのアタクシに行かせて下さい。」

マナ

「『不老のガブレシア』……か。良いでしょう。次はあなたが行きなさい、レイア。」

レイア

「ハッ、ありがたき幸せ……この戦いが終わったら、またたくさん読み聞かせて差し上げますわね。」

ヒュン！

マナ

「楽しみにしてるわ……レイア……」

レイア

「アタクシの力……おジャ魔女共にとくと味わわせて差し上げますわ……」

レイアは不敵に笑うと、走り出した。

魔女界

魔女界の女王様『これで宝石は3つ・・・順調に集めているようですね。』

のぞみ

「女王様、次の宝石は・・・？」

魔女界の女王様『光のサンライズスターですね。サンライズスターは、『月光の屋敷』にあると聞きます。』

さつき

「月光の屋敷・・・」

魔女界の女王様『月光の屋敷に行くには、北西の果てにある『月光の迷宮』を抜けねばなりません。その迷宮は、月の光が差し込む事で正しい道が導かれるのです。』

ほのか

「なるほど、だから夜うちゅうワケか。」

りずむ

「今は3時・・・ゆっくり行けば、夜には迷宮に着くわね。」

魔女界の女王様『私にできる事は、あなた達を見守るだけです。情けないですが、頑張ってくださいね。』

どれみ

「何言ってるんですか！女王様のその気づかいだけで充分です！みんな、頑張ろうね！！」

魔女界の女王様『やはりどれみちゃんは心が強い・・・彼女を選んだのは正しかったようですね・・・』

どれみ達はゆっくりと進み、夜になったと同時に月光の迷宮にたどり着いた。

はづき

「見て！月が出てる！」

あいこ

「その月の光が、道を照らし出して・・・道になつとる！」

おんぷ

「こういう事だったのね・・・」

どれみ達は迷宮を通り抜け、月光の屋敷にたどり着いた。

扉を開け、中へと入って行く。

道なりに奥へと進むと、『白で光』と書かれた装置と扉があった。

みず

「白い光・・・アタシだね！」

みずずはポロンをかざす。

ギギギ・・・

扉が開くと、どれみ達の前に白く光り輝く宝石があった。

どれみ

「あつた！これがサンライズスターね！」

のぞみ

「早く回収しましょう。」

「ダメよ。それはアタクシ達のボスが必要とする物・・・」

のぞみ

「誰！！」

どれみ達が後ろを向くと、そこには童話の本をたくさん抱えた女性
が立っていた。

のぞみ

「あなた、マジョボルトとマナの部下ね？」

レイア

「ご名答。アタクシはレイア・・・ガブレシアのレイアですわ。趣味は童話をマナ様に読み聞かせて差し上げる事。マナ様が生まれ

た頃からのアタクシの日課ですわ。さて・・・いくらアタクシでも、あなた方全員を相手にするのは骨というもの・・・ここは1つ、アタクシの得意分野で戦わせて頂きますわ!!」

レイアが念じると、彼女の周りに3冊の本が浮かび始めた。

3冊の本はゆっくり開くと、どれみ達を吸い込んだ。

ギョオオオ・・・

パタン！

レイア

「じつくり楽しませて頂きますわ。ホホホ・・・」

さつき・あいこ・のぞみ・りずむ組

さつき

「な、何よこの格好!？」

のぞみ

「桃太郎でしょ、桃太郎。」

さつき

「だから何で私なのよ!？」

あいこ

「（一番似合ってたからやる・・・）」

あいこはボソツと言ったつもりだったが、さつきには聞こえていた。

さつき

「あいちゃん、今何て言ったあ？」

あいこ

「ヒイ!？」

りずむ

「さ、さつきが一番強そうだったからだと思うよ!」

さつき

「そういう事・・・」

あいこ

「アタシが猿でのんちゃんが犬、りずむちゃんは雉^{キジ}かいな。」

のぞみ

「大方、このメンバーで鬼退治やれっていう事でしょ。」

さつき

「よっしゃあ、やったるでえ!!」

あいこ

「さつきちゃん関西弁になっとる・・・」

どれみ・はづき・おんぷ・ほのか・ほしみ組

どれみ

「この格好何だろう?」

はづき

「『ジャックと豆の木』のジャックの格好じゃない?」

おんぷ

「じゃあ、ここは『ジャックと豆の木』の世界って事?」

ほのか

「そうなるなあ。」

ほしみ

「と、いう事は・・・」

『オマエらかあ、ワシの家に来た愚か者はあ・・・?』

ほしみ

「やつぱり巨人いた〜っ!!」

『死ねえ、こそ泥があ!!』

どれみ・はづき・おんぷ・ほのか・ほしみ

「きゃ〜ッ!〜!!」

ももこ・ぽっぷ・みすず・かげみ組

ももこ

「みんなの格好って・・・」

みすず

「『オズの魔法使い』ね、間違いなく。」

ぽっぷ

「じゃあ、オズの魔法使いの世界をクリアしないといけないの？」

かげみ

「そういう事になるわね。」

ももこ

「大丈夫大丈夫！私達ならいけるって！」

そして・・・

さつき達は鬼退治を成功させていた。

のぞみ

「やるじゃない、さつき！」

さつき

「私にかかればワケないわ。」

のぞみ達は光に包まれる。

すると、レイアの前にいた。

レイア

「あら、戻って来れたのね。」

レイアは笑っている。

「アタシ達もいるよ！」

どれみ達も戻って来た。

レイア

「今日はここまでね。またアタクシの楽しい童話世界にご招待して差し上げるわ。ただしこれだけは言っておくわ。この世界はいずれマナ様の物になる。その事だけは覚えておきなさい！オッホッホッホッ・・・」

レイアは高笑いしながら消えていく。

それと同時に、3冊の本は燃えて消えた。

ボウウウウウ・・・

・ 宝石は回収したものの、後味の悪さを痛感したどれみ達であつた・・・

第33の呪文：光のサンライズスター！悪夢の童話世界！！（後書き）

どれみ「童話世界から何とか帰って来れたけど、あの女の人底が見えない感じだったね。」

のぞみ「あの人はまだ何か力を隠してるわ。油断はできないわね。」
はづき「そんな中、新たな場所に向かった私達にまた刺客が襲って来たわ！！」さつき「しかもマジヨリンさんを人質に取られ、迂闊に攻撃できないの！」

あいこ「大ピンチやんアタシら！！」

ほのか「どんどん手強くなるけど、ウチらは絶対諦めへんで！！」
おんぷ「次回、おジャ魔女どれみドッカ〜ン！は『雷のフルムーンスター！危険なる包囲網！！』よ！！」

りずむ「アタシ達の活躍、しっかり見て下さいね！！」

第34の呪文：雷のフルムーンスター！危険なる包囲網！！（前書き）

キャラクター・ファイル9

風戸ほのか

のぞみの仲間の1人で、関西弁を話す少女。

言葉が関西弁なのは、母親の片親が大阪人だったため。さらに忍者の子孫である。

人情家で涙脆く、自分を誘拐した2人組も理由があるからと許すようさつきに泣いて頼んだ事もある。

同じ関西弁だからなのかあいこと気が合い、たこ焼きが好物に。髪型をポニーテールにしており、忍者の子孫である事を誇りに思っている。

優しい性格で仲間からも好かれやすいが、ドジッ子な一面も。

将来は忍者になりたいと思っっているらしい。

エレメントは炎であり、時々口から吐く事も。

魔法の呪文はフレムクフルクファイアリフォーリン、マジカルステージ時は麗らかという言葉が入る。

キャッチフレーズは『麗らかな炎の人情家』。

マジョフルーレはボルケーノフルーレ。

第34の呪文：雷のフルムーンスター！危険なる包囲網！！

マジョボルトのアジト

ドルーズ

「どいつもこいつも不甲斐ない！マナ、次はこの私が行く！！」

マナ

「ドルーズ・・・わかりました、次はあなたが行って下さい。」

ドルーズ

「ハッ、ありがたき幸せ・・・」

ドルーズは一瞬にして消えた。

マナ

「ああ、ドルーズ様・・・あなたは どうしてドルーズ様なの・・・？」

アイリ

「ど、どないしたんやマナ様・・・」

ソラミ

「ああ・・・マナ様はドルーズの事が好きなの・・・」

ソング

「ええ、そなの！？」

ナナコ

「上司と部下の関係を越えた恋愛・・・燃えるぜえ!!」

ミヅキ

「ナナコはいつもそればっか・・・」

魔女界

どれみ達は、女王様の部屋に集まっていた。

魔女界の女王様『次の宝石は、フルムーンスターですね。フルムーンスターは南東にある電気グモの洞窟に隠されています。』

はづき

「電気グモって、電気をまとったクモの事ですか？」

ほのか

「そやで。そやけど電気グモは臆病やからな。滅多に魔女を襲う事はあらへんわ。」

おんぷ

「じゃあ、安心して回収できるわね。」

みすず

「問題はマジョボルトの部下達がどうでるかだけだね・・・」

さつき

「そういえば、マジヨリンさん今日はいませんね。」

魔女界の女王様『あの洞窟には最奥部に森があつて、そこにしかないハーブがあるんです。マジヨリンはそれを採りに行きました。』

りずむ

「大丈夫かしら、マジヨリンさん・・・」

同じ頃、電気グモの洞窟最奥部の森

マジヨリン

「ハア、ハア・・・まさかマジョボルトの部下がいたなんて・・・」

ドルーズ

「オマエは魔女界の女王の側近として十分な強さを持っている。だがいかんせん相手が悪かったな。やれ、電気グモ達よ!!」

ドルーズの指示で、電気グモ達は一斉に電撃を放った。

バリバリバリバリ!!

マジヨリン

「キャアアアア!!」

ドサッ!

マジョリンは倒れ込む。

ドルーズ

「フッフ、良いエサになりそうだ・・・」

ドルーズは不敵な笑みを浮かべていた。

それから1時間程して、どれみ達が電気グモの洞窟にたどり着いた。

のぞみ

「あら？おかしいわね。」

どれみ

「どうしたの、のんちゃん？」

のぞみ

「この洞窟、いつもは入口に何も無いのよ。でもどいうワケか今日は入口にクモの巣があるわ。」

ほのか

「確かに変やな。まあ電気グモも繁殖期なんちゃう？とりあえず入口開けるわ。フレムク〜フルク〜ファイアリ〜フォールン！クモの巣よ、燃えろ！！」

ほのかはクモの巣を焼き払う。

ほのか

「ほな、入るか。」

どれみ達は何の躊躇もなく、洞窟へと入って行った。

中でドルーズが待ち受けているとも知らずに・・・

のぞみ

「やっぱりおかしいわ、これ!!」

ほのか

「そやな。臆病のハズの電気グモが何でこないに攻撃的やねん!？」

りずむ

「まるで誰かの指示を受けているかのようだわ!!」

そう言っている間に、電気グモが大量に襲って来た。

みすず

「うわ、いっぱい来た!!」

どれみ

「アタシ達に任せて!!」

どれみ・ぽっぷ・ほのかが横一列に並ぶ。

どれみ・ぽっぷ・ほのか
「トライデント・ボルケーノ!!!!」

どれみ達3人の力で発生した3本の炎の火柱が、一気に電気グモを焼き払った。

ゴオオオオオ!!

そうこうしている内に、宝石が安置されている場所にたどり着いた。

ももこ

「黄の雷・・・私だね!」

ももこがポロンをかざし、バリアを解除する。

キラキラ・・・

ほしみ

「さて、早く回収・・・」

のぞみ

「待つて、誰がいる!!」

ほしみ

「え?」

のぞみ

「そこにいるんでしょ、出て来なさい!!」

のぞみが叫ぶと、ドルーズが木の影から現れた。

ザッ！

ドルーズ

「さすがは最強の魔力を持つ和久のぞみ・・・私がいる事に気づいたか。」

あいこ

「早よ名乗らんかい！！」

ドルーズ

「では改めて自己紹介させてもらおうか。私はドルーズ。昆虫の魔獣・スパドロスの人間体だよ。」

かげみ

「あなたね、電気グモ達を操っていたのは！」

ドルーズ

「その通り・・・私は最強のクモだからね。電気グモ達に従わせる事くらい訳ないのだよ。」

のぞみ

「心優しい電気グモを操るなんて許せない！みんな、速攻で倒すわよ！！」

ドルーズ

「フッフ、果たしてそううまくいかな？」

ほのか

「どういう意味や！！」

ドルーズ

「こういう事だよ。」

ドルーズが指をパチンと鳴らすと、彼の背後にあった木にかかって
いた布のようなものが剥がれた。

のぞみ

「！！！！」

のぞみは絶句する。

そう、マジヨリンがクモの糸でグルグル巻きにされ、クモの巣にか
かっていたのだ。

どれみ

「マ、マジヨリンさん！！どうして・・・！！？」

ドルーズ

「彼女はここにハーブを採りに来ていたのだよ。そこを襲撃させて
もらったのさ。」

はづき

「ヒドいわ・・・」

ドルーズ

「ハハハ、私は冷酷な性格なんでね。さて、マジヨリンをキズつけ
たくなれば大人しくしてもらおうか？」

のぞみ

「クソッ・・・」

その様子を、マナは水晶玉を通して見ていた。

マナ

「さすが、ドルーズ様だわ」

ナナコ

「やるじゃねえか、ドルーズのヤツ！マナ様じゃなくても惚れちまいそうだー！」

ミヅキ

「あゝあ、ついに2人が壊れたわ・・・」

リップ

「ソラミ姉、2人を何とかしてよ・・・」

ソラミ

「・・・ムリ!!」

どれみ達は6人と7人に分けられ、糸でグルグル巻きにされてしまった。

どれみ・はづき・あいこ・おんぶ・ももこ・ぽっぷ

「うゝん、うゝん!!」

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず・ほしみ・かげみ
「動けない・・・」

ドルーズ

「ハハハ、良い様だ。私の前には君達など赤子も同然・・・さて、そろそろ君達の始末をするのでしょうか・・・」

ドルーズが指をパチンと鳴らすと、巨大なジョロウグモが現れた。

ドルーズ

「コイツは私が飼っているクモでね、こう見えて食欲旺盛なんだよ。君達は、コイツのエサになってもらう。」

どれみ達はジタバタともがいた。

ドルーズ

「喰え、ジョロウグモ。」

ジョロウグモはゆっくりとどれみ達に迫る。

マジョリン

「止めてえ〜!!」

ジョロウグモがどれみ達に食いかかろうとした、その時だった。

白装束の魔女が現れたのは。

「待ちなさい。」

ドルーズ

「何者だ？」

白装束の魔女は静かに炎の魔法を放ち、一瞬でジョロウグモを燃やした。

ボンー！

ドルーズ

「な、何！？」

白装束の魔女は間髪入れず、ドルーズに魔法を叩き込んだ。

ドンー！

ドルーズ

「グオアアアッー！！」

ドルーズは吹っ飛ばされる。

白装束の魔女はのぞみ達に近づくと、彼女達を拘束している糸を焼き払った。

ボッー！！

「さあ、必殺技で決めなさい。フルーレは出したから。」

白装束の魔女がそう言った瞬間、ドルーズが起き上がってきた。

ドルーズ

「キサマ、よくもやってくれたな・・・キサマが誰であろうがもう関係ねえ・・・おジャ魔女共々、食い尽くしてやらあー！！」

ドルーズはそう叫ぶと、超巨大なクモになった。

ズオオオオオ！！

のぞみ

「ウインディフルーレ！静やかな光！！」

さつき

「フォレストフルーレ！淑やかな光！！」

ほのか

「ボルケーノフルーレ！麗らかな光！！」

りずむ

「グレイシャフルーレ！艶やかな光！！」

みすず

「ティンクルフルーレ！鮮やかな光！！」

ほしみ

「レインボーフルーレ！輝かな光！！」

かげみ

「シャドウムフルーレ！秘めやかな光！！」

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず・ほしみ・かげみ
「7つの光で、闇を貫け！！おジャ魔女・レインボースター・ダストクラッシュ！！！！」

ドンッ！！

ゴオオオオオ・・・

ドルーズ『そんなチンケな魔法が、この私に通じるかあ!!』

ドルーズは巨大な前足をクロスさせ、魔法を防ごうとする。

だが、のぞみ達の魔力の方が上手だった。

魔法は少しずつ、ドルーズの前足を押し返していく。

ドルーズ『バ、バカな!!』

そして、ついにドルーズの前足を弾いたのぞみ達の魔法が彼を包み込んだ。

ズン!!

ドルーズ

「この私が、負けるとは・・・さらばだ、マナよ・・・」

その言葉を最期に、ドルーズは完全に浄化され消えた。

ゴオオ・・・

パァン!!

マナ

「ぞ、そんな・・・ドルーズッ!!」

マナは泣き崩れる。

泣きじゃくるマナを、ナナコが慰めていた・・・

マジョボルトの部下の1人、ドルーズを倒したどれみ達。

しかし1つの謎が残った。

どれみ達を助けた白装束の魔女、彼女は一体何者なのだろうか・・・
！？

第34の呪文：雷のフルムーンスター！危険なる包囲網！！（後書き）

どれみ「ついにマジヨボルトの部下を1人倒したね！」

はづき「あんな人がまだいるから、安心はできないけどね・・・」

あいこ「そないな事言うてる間に、また新たな刺客が現れたで！」

おんぷ「しかも私達の魔法がほとんど通じない！」

ももこ「オマケに合体するなんてオーマイガーだよー！！」

のぞみ「どんな相手だろうと、私達は諦めない！！」

さつき「次回、おジャ魔女どれみドツカ〜ン！！は『大地のプラネ

ットスター！最悪！悪魔の如き2人組！！』よ！！」

ほのか「それにしても、ウチらを助けた白装束の魔女って誰なんやろな？」

第35の呪文：大地のプラネットスター！最悪！悪魔の如き2人組！！（前書き

キャラクター・ファイル10

初音りずむ

のぞみの仲間の1人であり、魔女界1の人気アイドルである女の子。
マジョプリマの1人娘でもある。

昔は人間界でアイドル活動をしたかったようだが、マジョプリマが
人間界に絶望していたらしく人間界での活動を反対されていた。

マジョリカとマジョルカが勝手にアイドルとして売り出そうとした
ために1度は怒るも、おんぷとトオルに説得されて人間界でのアイ
ドル活動を決意する。

自分を後押ししてくれたトオルに好意を抱いている。

エレメントは氷であり、彼女の場合は相手の影からも氷を放てる。

魔法の呪文はキラリンリルンラミラミラー、マジカルステージ時は
艶やかという言葉が入る。

キャッチフレーズは『艶やかな氷の歌姫』。

マジョフルーレはグレイシャフルーレ。

第35の呪文：大地のプラネットスター！最悪！悪魔の如き2人組！！

マナ

「ドルーズ様が倒されるなんて・・・これは手段を選んではいられないわね・・・」

ソラミ

「どうなさるんですか、マナ様？」

マナ

「最強のハンターコンビを・・・ギイルとガイルを差し向けなさい
！！」

ソラミ

「はい！！」

ミヅキ

「マナ様もえぐい事をするわ・・・あの2人を差し向けるなんてね・・・」

アイリ

「イソギリンのギイルとヤドガーンのカイル・・・彼らは目標殲滅率100%の最強コンビや・・・」

ナナコ

「アイツらの命運もここまでだな！！」

ソング

「果たしてそううまくいかしらね・・・」

「暑いな・・・」

「暑いぞ・・・」

「アイスが食べたいな・・・」

「アイスが食べたいぞ・・・」

「買いに行くか・・・」

「買いに行くぞ・・・」

謎の２人組が、ゆつくりと歩いていた。

のぞみとさつきは、昼食と夕食の買い出しに来ていた。

さつき

「たくさん買い込んだわね。」

のぞみ

「今夜はみんなでカレーだもの。多めに買い込んだかなきゃね。」

２人が笑い合いながら歩いていると、前から例の２人組が現れた。

「甘い・・・」

「甘いぞ・・・ん？」

2人組の目が、のぞみとさつきを捉えた。

「見つけた・・・」

「見つけたぞ・・・」

のぞみ・さつき

「え？」

「殲滅開始!!」

2人組は、のぞみとさつきに襲いかかって来た。

のぞみ・さつき

「ハッ!!」

のぞみとさつきは華麗に避けると、走り出す。

のぞみ

「ノノ、どれみちゃん達に知らせて!!」

ノノ

「うん!!」

ノノはMAHO堂へと飛んで行った。

のぞみとさつきは、人気のない山まで2人組を誘い込んだ。

さつき

「ここでならやれる・・・」

のぞみ

「行くわよ、さつき!!」

のぞみとさつきは変身する。

のぞみ

「静やかな風の女探偵・和久のぞみ!!」

さつき

「淑やかな草の女侍・京極さつき!!」

のぞみ・さつき

「我ら、最強の幼なじみ!!」

さつき

「そっちも名乗りなさい!!」

ギール

「オレはイソギリンのギール・・・」

ガイル

「オレはヤドガールのガイル・・・」

ギイル

「我々の目的は・・・」

ガイル

「おジャ魔女の殲滅!!」

ギイルとガイルは、のぞみとさつきに攻撃を仕掛けてきた。

ギイルは触手を伸ばし、ガイルは腕をハサミに変えて攻撃する。

だが、その攻撃ものぞみとさつきには届かない。

ギイルとガイルが最強のハンターコンビなら、のぞみとさつきは最強の幼なじみコンビだからだ。

のぞみ

「一気に倒すわよ、さつき!!」

さつき

「うん!!」

のぞみとさつきはポロンを交差させる。

ガッ!

のぞみ

「私達幼なじみの力、受けてみなさい!!」

さつき

「必殺・・・」

のぞみ・さつき

「ウィンドリーフストーム!!」

のぞみとさつきの合体技が、ギイルとガイルに迫る。

しかし、2人は苦もなく弾き飛ばした。

バチン!

のぞみ

「え!？」

さつき

「ウソでしょ!？私とのぞみの最強の技なのに・・・」

ギイル

「ぬるいな。」

ガイル

「ぬるいぞ。」

ギイル

「ん？マナ様から通知だ。」

ガイル

「何だって？」

ギル

「大地のプラネットスターを探せ、だそうだ。陽炎の砂漠の奥地にあるんだと。」

ガイル

「そうか。じゃあコイツらの相手をしてるヒマはないな。」

ギルとガイルは、シュンと消えた。

MAHO堂

どれみ

「ギルとガイル・・・」

はづき

「そんなヤバい人達が現れたの？」

ほのか

「2人の技が通じなかったなんて前代未聞やで・・・」

あいこ

「なあ、ギルとガイルってどんなヤツなんや？」

りずむ

「ギルはイソギンチャク、ガイルはヤドカリの魔獣が人間体にな

った者よ。元々はプロのヒットマンコンビで、彼らに狙われた者は100%殲滅させられるって話だわ。」

おんぷ

「そこを見込まれて、マジョボルトに勧誘されたって事？」

みすず

「恐らくそうだと思う。」

ぽっぷ

「お姉ちゃん、急ごう！陽炎の砂漠に！」

どれみ

「そうね。」

のぞみ

「私とさつきは今回行かない・・・」

さつき

「どれみちゃん達だけで行って・・・」

どれみ

「のんちゃん？さつきちゃん？」

ババ

「心配せんでええ。ワシがついとるズラ。」

ほのか

「お願いします、ババ様。」

どれみ

「じゃあ、行くよ!!」

どれみ達は陽炎の砂漠へと向かった。

のぞみとさつきを残して・・・

陽炎の砂漠

どれみ達は陽炎の砂漠に到着し、奥地へと進んでいた。

どれみ

「あつたわ、プラネットスター!」

はづき

「早く回収しましょう。ギイルとガイルが来る前に・・・」

「呼んだか?」

「呼んだぞ。」

ボコオ!

地面からギイルとガイルが飛び出して来た。

ギイル

「見つけた、プラネットスター。」

ガイル

「見つけたぞ、プラネットスター。」

ギイル

「奪うか？」

ガイル

「奪うぞ。」

ギイル

「合体するか？」

ガイル

「合体するぞ。」

ギイル・ガイル

「合体！！」

ギイルとガイルは合体し、上半身がギイル、下半身がガイルの怪物になった。

ギイル

「おジャ魔女共・・・」

ガイル

「殲滅する！！」

どれみ

「させない!!」

どれみ達6人はレジエンドパトレーヌに変身し、エレメントのムチでイソ・ガーンを拘束した。

どれみ

「今よ!!」

ほのか・りずむ・みすず・ほしみ・かげみ

「5つの光に、未来を乗せて!!おジャ魔女・ペンデュラムスター・ダストクラッシュ!!!」

ほのか達は必殺技を放った。

その頃、のぞみとさつきはMAHO堂でババと話していた。

ババ

「どうしたズラ?オマエ達が行かないなんて珍しいズラ。」

のぞみ

「ババ様、私達自信がないんです・・・」

さつき

「私達にはあの2人を倒せなかった。それだけで・・・」

ババ

「それは仕方ない事ズラ。世の中自分達が必ず勝てる相手などいな

いづら。だけど、鍛錬を重ね強くなれば、いつか勝てる時がくるズラ。女王様はそれをわかっておったからこそ、オマエ達5人に託したんじゃないかったかズラ？」

のぞみ

「そうですよね！」

さつき

「ありがとうございますババ様！おかげで吹っ切れました！」

ババ

「うん、その意気ズラ。」

のぞみ

「さつき、行こー！」

さつき

「うんー！」

どれみ達は皆、片膝をついていた。

どれみ

「そんな・・・」

はづき

「5人だったとはいえ、ほのかちゃん達の必殺技が通じないなんて・

・・」

あいこ

「何やねん、コイツらの硬さ・・・」

ギイル

「ぬるいな。」

ガイル

「ぬるいぞ。」

ギイル・ガイル

「終わりだ・・・」

イソ・ガーンはハサミを振り上げる。

「そうはさせない!!」

イソ・ガーンが振り向くと、そこにはのぞみとさつきが立っていた。

のぞみ

「見せてあげる・・・」

さつき

「幼なじみの真の力を!!」

マジョルカ

「のぞみちゃんとさつきちゃんに力を!!」

のぞみ

「ウィンディフルーレ！静やかな光！！」

さつき

「フォレストフルーレ！淑やかな光！！」

のぞみ・さつき

「おジャ魔女・デュアルトルネーディング・プラントーツ！！」

2人のフルーレから、強烈な突風が放たれた。

イソ・ガーンはハサミを交差させて防御する。

しかし、2人の魔法が徐々にハサミを押し返し始めた。

イソ・ガーン

「な・・・」

そして、ついに2人の魔法がイソ・ガーンを押し潰した。

イソ・ガーン

「グオオオオオ！！」

ズン！！

どれみ

「ス、スゴい・・・」

はづき

「あの怪物を・・・」

あいこ

「倒してもうた・・・」

のぞみ

「イヤ、まだだわ。」

煙が晴れる。

するとそこには、ボロボロになったギイルとガイルが立っていた。

ギイル

「驚いた・・・」

ガイル

「驚いたぞ・・・」

ギイル

「我々の鎧にヒビを入れるとは・・・」

ガイル

「これ以上はやばい、撤退だ・・・」

ギイルとガイルは、撤退して行った。

第35の呪文：大地のプラネットスター！最悪！悪魔の如き2人組！！（後書き

どれみ「スゴい力だったね、のんちゃんときつきちゃん！」

はづき「撤退されたけど、最強のハンターコンビにキズを負わせたのはスゴいわ！」

あいこ「テニスをしようとしてやって来たアタシらやけど、謎のイケメン兄ちゃん登場やで！」

おんぷ「こんな所に来るなんて都合が良すぎるような・・・」

ももこ「そう言ったら、デカイ敵が現れたよー！！」

ぽつぷ「姿の見えない敵に、アタシ達は大ピンチかも！？」

のぞみ「次回、おジャ魔女どれみドッカ〜ン！！『氷河のスノースター！ハンサムボーイ現る！！』よー！！」

第36の呪文：氷河のスノースター！ハンサムボーイ、現る！！（前書き）

キャラクター・ファイル11

春日みすず

のぞみの仲間の1人であり、とても明るい女の子。

お菓子作りが何より得意で、その事もありももことはすぐに親友となった。

ももこが小太郎とつき合い始めた事もどれみ達よりも先に知っている。

マジョハートの所に時折行っており、将来は医者になるのが夢。

エレメントは光で、自身を包み込んでスピードを上げたり攻撃に転換したり出来る。

魔法の呪文はフェルタンフェットンファラリラポン、マジカルステージ時は鮮やかという言葉が入る。

キャッチフレーズは『鮮やかな光のパティシエ』。

マジョフルーレはティンクルフルーレ。

第36の呪文：氷河のスノースター！ハンサムボーイ、現る！！

カリス

「マナ様、次は私に行かせて下さい。」

マナ

「ムカーリアのカリスか。良いでしょう。」

カリス

「ハッ、ありがたき幸せ・・・」

シュンツ！

ソラミ

「カリスって、最近入った若い子よね？」

ミヅキ

「ええ、実力は確かなんだけど・・・何か胡散臭いのよね・・・」

アイリ

「まるで、何かを企んでいるような・・・かいな？」

ソング

「そういう事ね。」

カリス

「オレはあんな下っ端で終わらん！必ず組織のナンバー2になってやる・・・」

カリスは不敵な笑みを浮かべていた。

MAHO堂

どれみ

「え、のんちゃんの別荘？」

のぞみ

「ええ、母さんが若い頃、長野県の軽井沢に別荘を建てたのよ。今も私が時々行つて掃除してるんだけど・・・行ってみる？」

はづき

「行きたいのは山々だけど・・・宝石を探さないと・・・」

マジヨリカ

「それなら心配いらん！！」

あいこ

「マジヨリカ？」

マジヨリカ

「実は軽井沢にあるイルベリア大氷原にはの、どこかに宝石『スノ

「スター」が隠されておるんじゃないよ。」

おんぶ

「マジ・・・!?!」

マジョルカ

「どこに隠されておるかはワシらも知らんが、近くにあれば反応するじゃろう。」

ももこ

「じゃあ、行こうか。」

長野県

のぞみの母の別荘

のぞみ

「さっ、着いたわ。」

どれみ

「わかってはいたけど・・・」

はづき

「寒いよね・・・」

あいこ

「長野県とは言え、この寒さは異常やる・・・」

おんぷ

「何とかならないのかしら？」

のぞみ

「別荘の中なら暖房が利いてるから暖かいわ。その中で談笑しながら計画しましょう。」

ももこ

「暖まる〜!!」

ぽっぷ

「このホットココア美味しいわ。」

さつき

「さてと・・・さすがに多すぎるから、チームを分けましょうか。」

のぞみ

「じゃ、ここにくじ引きを用意したわ。」

どれみ達はくじを引き、その結果・・・

探しに行く組

どれみ・のぞみ・ほのか・りずむ・みすず・ほしみ

待機組

はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぱっぷ・さつき・かげみ

どれみ

「じゃ、行つて来る！」

どれみ達6人は出発した。

はづき

「さて、ただ待つてるだけなのもあれだし・・・」

あいこ

「特訓でもすつか？」

さつき

「じゃ、地下に行きましょう。地下には魔女見習い用の訓練施設があるの。」

おんぷ

「さすが幼なじみ。何でも知ってるのね。」

地下訓練施設

さつき

「あなた達のエレメントの力を極限まで引き出すために、私達が鍛えるわ。ただし・・・」

ゴオオオオオ！！

かげみ

「アタシ達も全力だから、本気でかかって来なさい。」

おんぷ・ぽっぷ・あいこはさつきを、はづきとももこはかげみを相手に特訓を始めた。

宝石を探しに出たどれみも、のぞみ達を相手に特訓を受けながら進んでいた。

どれみ

「のんちゃん達の特訓、スゴく良いわ！どんどん自分のエレメントが大きくなってる気がする。」

ほのか

「どれみちゃんは物覚えがええからな。この分やと、宝石の場所に着く頃には充分魔力上がってるやろ。」

イルベリア大氷原

みすず

「着いた〜。」

ほしみ

「のぞみ、この辺りから魔力装置の気配がする。」

のぞみ

「パウラピラルペルペルパウピウレ。」

のぞみは魔法で雪原の雪を吹っ飛ばす。

すると、装置が出現した。

ズズズ・・・

りずむ

「黒い氷・・・アタシね。」

りずむはポロンをかざし、魔力を注ぎ込む。

すると、後ろの雪原がせり上がって宝石が出現した。

のぞみ

「あったわ、スノースター・・・ん？」

ほのか

「どないした、のぞみ？」

のぞみ

「何かいる！！」

のぞみが叫んだ瞬間、雪達磨のような魔獣が現れた。

ほか

「コイツら、スノーソルジャーやな。」

みすず

「うん、しかもこれは明らかに誰かが操ってるよ!」

どれみ達から離れた位置で、カリスが彼女達を見ていた。

カリス

「自分の手は汚さず任務遂行・・・私に相応しい作戦だね。」

のぞみ

「どれみちゃんは炎で雪達磨を攻撃して時間を稼いで!私達がその間に魔力をためる!」

どれみ

「うん!ピリカピリラポポリナペペルト!」

どれみは炎の魔法で雪達磨を焼き払っていく。

どれみ

「ハアアアア!」

カリス

「やるね・・・では、こうすればどうかな?」

パチン!

カリスが指を鳴らすと、雪達磨達が合体し巨大な氷のドラゴン・ブリザードラスになった。

どれみ

「ちよっ・・・」

『ギャオオオン!!』

ブリザドラスは冷気を吐き出した。

ビュオオオ!!

どれみ

「キャー!!ピリカピリラポポリナペペルト!!」

どれみは炎の魔法で応戦するが、あっさり吹き消された。

どれみ

「ダメー!!全然効かない!!」

のぞみ

「どれみちゃん、お待たせ!」

ほのか

「おー、こらまた随分デカイドラゴンやなあ。」

りずむ

「感心してる場合?」

のぞみ達は体勢を整えた。

のぞみ

「ウインディフルーレ！静やかな光！！」

ほのか

「ボルケーノフルーレ！麗らかな光！！」

りずむ

「グレイシャフルーレ！艶やかな光！！」

みすず

「ティンクルフルーレ！鮮やかな光！！」

ほしみ

「レインボーフルーレ！輝かな光！！」

のぞみ・ほのか・りずむ・みすず・ほしみ
「5つの光に、希望を乗せて！おジャ魔女・ペンデュラムスター・ダストクラッシュ！！」

ドンッ！！

『ガ？』

カリス

「チッ、あれは無理だな・・・」

カリスは撤退する。

次の瞬間、ブリザドラスは浄化された。

スノースターを回収したどれみ達。

遠くから彼女達を試すようにしていたカリス。

戦いはいいよ、後半戦へ・・・

第36の呪文：氷河のスノースター！ハンサムボーイ、現る！！（後書き）

どれみ「宝石もだいぶ集まってきたわね。」

はづき「でも油断は禁物よ。マジョボルトの手下の攻撃も激しさを増してくるでしょうし。」

あいこ「あ、スコールが来よったで！」

おんぷ「でも何だか気迫が違う！！」

ももこ「大ピンチの私達！その時現れたのは・・・」

？？「みんな、お待たせ！！」

のぞみ「次回、おジャ魔女どれみドッカ〜ン！！『炎のルビースタ

ー！華麗に変身！セインティローズ！！』よ！！」

さつき「いよいよあの子が復活ね！！」

第37の呪文：炎のルビースター！華麗に変身、セインティローズ！！（前書き

キャラクター・ファイル12

夜空ほしみ

のぞみの仲間の1人であり、心優しい女の子。

のぞみ達5人とチームを組んでおり、とても強い女の子だった。

しかしソラミ達との戦いで、のぞみを庇い、眠りの魔法にかかってしまった。

だが本人はあまり覚えていなかった様子。

のぞみ達には天然ボケだと言われている。

エレメントは虹。

魔法の呪文はジュエーラリバイスドロシード、マジカルステージ時は輝かという言葉が入る。

キャッチフレーズは『輝かな虹の舞妓』。

マジョフルーレはレインボーフルーレ。

妹にかけみがあり、姉妹で舞妓の仕事をしている。

第37の呪文：炎のルビースター！華麗に変身、セインティローズ！！

スコールはマナの部屋に呼び出されていた。

マナ

「スコール、私があなを呼んだ訳が分かるかしら？」

スコール

「はい・・・私の度重なる失敗のせいで、いつまで経っても宝石を奪えていない事ですよね・・・」

マナ

「そうよ、スコール。これが最後のチャンスよ。この任務に失敗すれば、あなをクビにします。」

スコール

「分かりました・・・このスコール、必ずや宝石を奪って参ります・・・」

マナ

「よし、では下がって良いわ。」

スコール

「ハッ・・・」

ガチャッ！

スコール

「！」

ラムダ

「スコール先輩。」

スコール

「ラムダか・・・今の話、聞いていたのか？」

ラムダ

「ええ・・・」

スコール

「心配するな、私は負けん・・・とっておきの作戦があるからな・・・」

ザッザッ・・・

ソング

「・・・」

MAHO堂

どれみ

「女王様によると、次のルビースターがあるのは魔業火山の洞窟なんだって。」

のぞみ

「魔業火山か・・・私達も何度か行った事あるけど、あそこは本当に暑いわよ。」

はづき

「段々宝石の隠し場所もヤバくなってきたわね・・・」

さつき

「まあ、だからこそやりがいがあるってもんだけど。」

「あなた達、本当に楽天的よね・・・」

どれみ達が振り向くと、そこにはソングが立っていた。

あいこ

「江川ソング!!」

ほのか

「何しに来たんや!？」

ソング

「別に・・・私はただ、あなた達に忠告をしに来ただけよ。」

おんぷ

「忠告?」

ソング

「今回来るのはスコールよ。彼、あなた達に負け続けてるからね。もう後がないのよ。」

りずむ

「後がない？」

ももこ

「それって・・・」

ソング

「そう、この任務がスコール最後の任務。これに失敗すれば、彼はクビにされるそうよ。だから気をつけなさい。今回のスコールは本気でかかって来るだろうから・・・」

みすず

「待って！どうしてあなたはそこまで教えてくれるの？」

ソング

「さあね？私、気まぐれだから・・・あなた達に期待しているのかも。ま、精々死なないように頑張りなさい・・・」

そう言っと、ソングは帰って行った。

どれみ達はルビースターが隠されている魔業火山へとやって来た。

ほのか

「水色の炎・・・ウチか。」

ほのかはポロンをかざし、入口を開けた。

どれみ

「暑い〜!〜!」

さつき

「この暑さは異常でしょ・・・」

おんぷ

「プルルンプルンファミファミファー。」

りずむ

「キラリンリルンラミラミラー。」

おんぷとりずむは魔法で人数分のかき氷を出した。

あいこ

「ちべた〜。」

ももこ

「これで少しはマシだね。」

のぞみ

「みんな、油断しないで。この洞窟に生息する魔獣は凶暴なのばかりよ。」

『ギャオオオン!〜!』

のぞみ

「言ったそばから来たわ!〜!ヒダルマンよ!〜!」

『シャアアア!!』

さつき

「こつちにはフレアガブガブが!!」

『ギシシ・・・』

ほのか

「炎獄グモも来よつたで!!」

どれみ達は、魔法で応戦した。

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ・のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず・ほしみ・かげみ

「ハアハアハアハア・・・」

どれみ達は、全員グッタリしていた。

のぞみ

「フレイムコブラや煉獄蝶、ドラゴンヤンマまで来るなんて・・・」

さつき

「魔業火山に住む魔獣ほとんど出て来たわよ・・・」

ほのか

「ここまでキツイとはな・・・」

どれみ達はしばらく歩き、ようやく頂上にある火口へとたどり着いた。

どれみ

「あったわ、ルビースター！」

はづき

「早く回収しましょう。こんな暑い所はもうまっぴら・・・」

「どうしたんだいおジャ魔女諸君？随分と疲れてるようじゃないか。」

ザッ！

りずむ

「スコール・・・」

みすず

「こんな時に出て来ないでよ・・・」

スコール

「悪いが私には君達の状況など関係ないのだよ。これが私の最後の任務だからね・・・」

のぞみ

「もー、鬱陶しい！みんな、一気にやるわよ！！」

どれみ達6人が魔法を放ち、スコールの動きを止める。

スコール

「うお・・・」

のぞみ

「ウインディフルーレ！静やかな光！！」

さつき

「フォレストフルーレ！淑やかな光！！」

ほのか

「ボルケーノフルーレ！麗らかな光！！」

りずむ

「グレイシャフルーレ！艶やかな光！！」

みすず

「ティンクルフルーレ！鮮やかな光！！」

ほしみ

「レインボーフルーレ！輝かな光！！」

かげみ

「シャドウムフルーレ！秘めやかな光！！」

のぞみ

「7つの光で、闇を貫け！！」

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず・ほしみ・かげみ
「おジャ魔女・レインボースター・ダストクラッシュ！！！！」

のぞみ達の魔法がスコールに飛んで行く。

スコール

「甘い・・・」

スコールはサングラスを外すと、念を込めた。

スコール

「ハアアアア！！」

次の瞬間、スコールは炎を纏った巨大なサソリになっていた。

スコール

『フン。』

スコールはハサミでのぞみ達の魔法を叩き斬った。

ザシュツ！！

のぞみ

「そんな！！私達の最強魔法が・・・」

スコール

『この程度で私に勝てるつもりかい？ボルカニックインパクト！！』

スコールは両手のハサミを地面に叩きつけ、爆発を起こした。

ドオン！！

どれみ達はあっという間に吹っ飛ばされる。

のぞみ

「う・・・」

スコール

『所詮はその程度だよ。さて、トドメを刺させて頂こう・・・』

ザッザッ・・・

ソング

「あゝあ、どれみ達もここまでかしらね・・・」

「そこまでよ、スコール!!」

スコール

『ん?』

スコールの目線の先には、巻機山ハナが立っていた。

どれみ

「ハナちゃん・・・」

スコール

『巻機山ハナか・・・今更何をしに来た?まさかオマエが私を倒すとでも?』

ハナ

「そのまさかよ。」

ハナはコンパクトを取り出す。

ハナ

「ホワイティローズ・メタモルフォーゼ!!」

ハナは白い光に包まれる。

次の瞬間、ハナは白き羽衣を纏った姿に変身していた。

ハナ

「青き白薔薇は聖なる印・・・セインティローズ!!」

スコール

『ナメるなあ!!』

スコールはハナに向かって来た。

ハナ

「フツ・・・ハアツ!!」

ハナは上空からの跳び蹴りをスコールに叩き込む。

ドゴォ!!

スコール

『ぐおお!!』

ドズウン!!

スコール

『おのれえ!!』

スコールはハサミを振り上げた。

ハナ

「邪悪な闇を浄化する、煌めく白薔薇を咲かせましょう！セインテ
イローズ・メタルバニシード!!」

ハナは銀色の薔薇を放つ。

スコール

『うおお・・・』

スコールはハサミで押し返そうとしたが、弾き返された。

そして、薔薇に押し潰される。

ドズウン!!

スコール

「ここまでか・・・さらばだ、ラムダ・・・」

その一言を最後に、スコールは完全に浄化された。

パワーアップしたハナを加え、スコールを倒したどれみ達。

彼女達の戦いは、まだまだ続く!!

第37の呪文：炎のルビースター！華麗に変身、セインティローズ！！（後書き

どれみ「スコールを倒したね！」

はづき「これからの彼らはもつと手強くなるかもしれないわね。」

あいこ「そないな事言うてたら、今度はタコスが来よったで！！」

おんぷ「明らかに今までと気迫が違っわ！！」

ももこ「追い詰められた私達、その時新たな力が・・・」

のぞみ「次回、おジャ魔女どれみドツカ〜ン！！『水のサファイア
スター！どれみ達の新たな力！！』」

さつき「ついにくるわね、あの力が！！」

第38の呪文：水のサファイアスター！どれみ達の新たな力！！（前書き）

キャラクター・ファイル13

夜空かげみ

のぞみの仲間の1人であり、ほしみの妹。

姉想いな性格で、ほしみが眠りの魔法にかかって以降はマジョバルスの所に定期的カウンセリングを受けに来ていた。

偶然どれみ達と出会いほしみの再会を果たした後は、どれみ達の仲間に加わる。

同じ姉持ち同士のためかぼつぷとは気が合い、すぐに仲が良くなった。

エレメントは影で、作り出した影に入り込んだり影を伸ばして攻撃したりできる。

魔法の呪文はジュエールリオーラドロシード、マジカルステージ時は秘めやかという言葉が入る。

キャッチフレーズは『秘めやかな影の舞妓』。

マジョフルーレはシャドウムフルーレ。

第38の呪文：水のサファイアスター！どれみ達の新たな力！！

タコスはマナの部屋に呼ばれていた。

マナ

「タコス、今日あなたを呼んだ目的がわかる？」

タコス

「わあつてる。任務の事だろう？」

マナ

「ええ。あなたは腕は確かだけど、ここ最近失敗が続いてる。このままではダメだと思うの。」

タコス

「わあつたよ、これがオレの最後のチャンスなんだろう？すぐに終わらせてくるぜ！！」

マナ

「頑張りなさい。」

マナの部屋を出たタコスに、ナナコが近づいて来た。

ナナコ

「タコス、マナ様何だった？」

タコス

「最後のチャンスだとよ。」

ナナコ

「そうか・・・オレも一緒に戦って良いか？」

タコス

「心配すんな、と言いたところだが・・・オマエは言い出したら聞かねえからな。邪魔すんなよ。」

ナナコ

「ああ!!」

魔女界

魔女界の女王様「次の宝石、サファイアスターがあるのは、『深海城』です。」

のぞみ

「海の中って事ですか？」

マジヨリン

「いえ、城に近づけば城が海面に上がってくるハズです。」

マジヨスローン

「北西にある海に、深海城があります。若い時はよく行ったものよ。」

魔女界の女王様『どれみちゃん達、出発する前にお知らせがあります。マジヨリン、例の物を。』

マジヨリン

「はい。どれみちゃん達、コロンタップを出して下さい。」

どれみ達はタップを差し出す。

マジヨリン

「エレメントの力よ、どれみちゃん達のタップに宿れ!!」

パアアアア・・・

魔女界の女王様

「これでどれみちゃん達も、新しい力が使えます。その力は、今からマジヨリカに渡すペンダントと連動して力が発動します。」

マジヨリン

「マジヨリカ、このペンダントを渡します。力を使う時は、『どれみ達に力を』と叫んで下さい。」

マジヨリカ

「わかりました。」

魔女界の女王様『恐らくまた、マジヨボルトの刺客が襲ってくるでしょう。気をつけて下さいね。』

どれみ

「はい!!」

どれみ達は、深海城を探していた。

どれみ

「マジヨスローンによれば、この辺りだって言っただけど・・・」

のぞみ

「！この気配は・・・」

突然海から、光が伸びてきた。

カツ！！

さつき

「この光って、まさか！！」

ほのか

「間違いあらへんな・・・」

次の瞬間、城の頭が顔を出した。

ズズズズズ・・・

徐々に城がせり上がり、ついに城が出現した。

ズズズズズ・・・

ズン！！

はづき

「これが、深海城・・・」

どれみ達は深海城の入口に降り立つ。

トッ！

あいこ

「青い水・・・アタシやな。」

あいこがポロンをかざすと、扉が開いた。

ゴゴゴゴゴ・・・

ガシャン！！

のぞみ

「行きましょう！」

どれみ達は、深海城へと入って行った。

深海城 内部

おんぷ

「流石は深海城って名前だけあるわね。珍しい動物がいっぱいだわ！」

りずむ

「シーラカンスにオウムガイ、カブトガニにウミユリ・・・生きた化石がたくさんいるわね。」

ももこ

「知ってた？ウミユリって植物みたいな名前だけど、実は動物なのよ。」

みすず

「確かウニやヒトデの仲間なんだよね？」

ももこ

「そうだよ。」

ほしみ

「絶滅したハズのアノマロカリスもいるわ・・・どっという生態系なのかしら、この城。」

どれみ達は城の最奥部にたどり着いた。

どれみ

「あったわ、サファイアスター！」

のぞみ

「早く回収しましょう。」

「そうはいかねえぜ?」

どれみ達が振り向くと、そこにはタコスとナナコがいた。

はづき

「タ、タコス!!」

さつき

「ナナコまで・・・」

ナナコ

「いくらオレでも、神聖なるこの城を破壊するのはダメだ。場所を移すぞ。ペルタンペットンパラリラポン!この場所にいるヤツ全員を、外へ!!」

カツ!!

どれみ達は、深海城の外にワープした。

ナナコ

「さあ、存分に戦おうぜ!!」

のぞみ

「最初から全力でいくわよ、みんな!!」

のぞみ達はフルーレを出現させる。

のぞみ

「ナナコはアタシ達が相手するわ。どれみちゃん達はタコスを！」

どれみ

「うん！」

ナナコ

「オレもナメられたもんだな。ストーンフルーレ！ストロングボデー！！」

ナナコは岩石の鎧を体にまとった。

ナナコ

「喰らいな！ロックブラスト！」

ナナコは両手の砲台から岩石を連射する。

ズドドドドドドドドドド！！

のぞみ

「キャアアア！」

さつき

「このお！」

さつきは木刀でナナコを攻撃した。

ガキイ！！

ナナコ

「イッテ！！なかなかやんじゃねえか！戦いはこうでなくっちゃな

「!!」

どれみ

「タコス、覚悟!!」

どれみはエレメントでタコスを攻撃する。

ボオオオオオ!!

タコス

「ウオオオオオ!!やるな・・・オレは負ける訳にはいかん。だから・・・最後の手段を使うしかねえな・・・ハアアアア!!」

タコスは叫ぶと、巨大化し超獣化した。

ズン!!

ナナコ

「スゲエ・・・スゲエよタコス!これならどれみ達に勝てる!オレと一緒に倒そうぜ!!」

タコス『・・・ダメだ。』

ナナコ

「え?」

タコス『超獣化は理性を失っちゃったんだ。今は何とか理性を保てるが・・・オマエまで攻撃しちまうかもしれない。・・・ソング、いるんだろそこに・・・』

タコスが呼ぶと、ソングが現れた。

ソング

「あら、バレた？」

タコス『別に構わん。それよりナナコを連れて逃げろ・・・このままではナナコを巻き込みまう・・・』

ソング

「・・・了解。」

ナナコ

「ちよつと待てよ、ソング！オレはタコスと一緒に・・・」

ソング

「あなた死ぬ気！？超獣化がどんなものかわかってるでしょ！！プルンプルンファミファミファァー！私とナナコをここから移動させて！！」

ソングはナナコをひつつかみ、呪文で消えた。

ナナコ

「タコス！ッ！！」

パシュン・・・

タコス『ギャオオオオオ！！』

タコスは暴れ始めた。

どれみ

「この威圧感・・・スコールの時と同じだわ!!」

のぞみ

「このままじゃまずいわね・・・マジョリカ、あれを!!」

マジョリカ

「わかった!どれみ達に力を!!」

マジョリカが叫ぶと、空からどれみ達目掛けて何かが飛んできた。

どれみ

「ファイアフルーレ!のびやかな光!!」

はづき

「グラビディフルーレ!しなやかな光!!」

あいこ

「ウオーティフルーレ!高らかな光!!」

おんぷ

「アイシクルフルーレ!涼やかな光!!」

ももこ

「エレクトロフルーレ!爽やかな光!!」

ぽっぷ

「スパイラルフルーレ!ほがらかな光!!」

どれみ

「6つの光に、勇気を乗せて!!」

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ

「おジャ魔女・レインボースター・エクスプロージョン!!」

ザッ!!

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ
「ハアッ!!」

ドン!!

タコス『グオオオオオ!!』

タコスは触手で攻撃を受け止める。

ギギギ・・・

しかし、程なくして触手は弾かれた。

バチィ!!

ズン!!

タコス

「ここまでか・・・ナナコ・・・愛してた・・・ぜ・・・」

タコスはその言葉を最後に、完全に浄化された。

ゴオオオオオ・・・

パン！！

ソング

「タコスの魔力が・・・消えたわ・・・」

ナナコ

「そんな・・・タコス・・・何でだよぉっ！！」

ナナコは泣き崩れる。

ソング

「ナナコ、元気出して・・・今日は私が何か奢ったげるから・・・」

ナナコ

「わかったよ・・・その代わり、うまいのじゃねえとヤダからな！！」

ソング

「ハイハイ・・・」

タコスを撃退し、サファイアスターを手に入れたどれみ達。

次なる宝石は、どこにあるのか・・・！？

第38の呪文：水のサファイアスター！どれみ達の新たな力！！（後書き）

どれみ「タコスを倒してサファイアスターを回収したね。」

はづき「マジョボルトの部下の攻撃も激しさを増してくるでしょうね。」

あいこ「新しい宝石を探しに行ったら、ギイルとガイルが現れよった！」

おんぷ「2人の合体攻撃に、次第にアタシ達は追い詰められてしまふの！」

ももこ「もうダメだよってなったその時、奇跡が起こったんだ！」

のぞみ「次回、おジャ魔女どれみドッカ〜ン！『風のエメラルドスター！どれみ・のぞみ・ハナ3人の力！』」

さつき「次回も、必ず見て下さいね！！」

第39の呪文：風のエメラルドスター！どれみ・のぞみ・ハナ3人の力！！（前

キャラクター・ファイル14

巻機山ハナ／セインティローズ

魔女界の特別な花、ウィッチークイーンローズから生まれた女王様候補の女の子。

本当は2歳だが、魔法の力により小学6年生の姿になっている。どれみ達が生まれる場に立ち会ったため、どれみ達が母親代わりとなり面倒を見られる事に。

期は王の言葉を勘違いしたオヤジデ達に狙われた事もあった。

もつと期には先々代の女王様によって野菜嫌いの呪いをかけられたが、どれみ達の助力により克服する。

今作では闇の魔女に対抗するためマジョリンから直々の訓練を受け、聖なる戦士セインティローズとなった。

セインティローズになった事により飛躍的に魔力は伸び、ハナ自身の思考力も大人びたものになっている。

名乗りの口上は『青き白薔薇は聖なる印』。

第39の呪文：風のエメラルドスター！どれみ・のぞみ・ハナ3人の力！！

マナ

「タコスもやられたか・・・これは少しまずいわね・・・ソラミ、ギイルとガイルはどこ？」

ソラミ

「今は散歩に出ているそうです。」

マナ

「ソラミ、ギイルとガイルに連絡しなさい。どれみ達を倒し、宝石を奪えとね。」

ソラミ

「ハッ！！」

ソラミは魔法でワープした。

ギイル

「寒いな。」

ガイル

「寒いぞ。」

ギイル

「眠いな。」

ガイル

「眠いぞ。」

ギイル

「一休みするか？」

ガイル

「・・・待て。何か来る。」

ヒュパッ！

ギイル

「・・・ソラミか。」

ガイル

「何の用だ？」

ソラミ

「タコスが倒されたわ。」

ギイル

「タコスがか？」

ソラミ

「ええ。マナ様も焦っている。あなた達に指令よ。どれみ達を倒し、宝石を奪え・・・とね。」

ギイル

「マナ様が焦っておられるという事は・・・我らにとっても最後のチャンスという事になるな。」

ガイル

「ギイル、行くぞ。おジャ魔女共を倒すのだ。」

ヒュパッ!!

魔女界

魔女界の女王様『次の宝石は、エメラルドスターですね。エメラルドスターがあるのは、風の楽園です。』

どれみ

「風の楽園・・・」

はづき

「どんな所なんですか？」

のぞみ

「風の楽園は、空に生息してる魔獣人達が暮らしている所よ。」

さつき

「かつて私達が子供の頃、そこで暮らしていたの。でもまさかそこに宝石があつたなんて・・・」

魔女界の女王様『宝石が安置されているのは、村の中央にある塔です。気をつけていって下さいね。』

どれみ

「はい!!」

風の楽園

どれみ達は、風の楽園へとやって来た。

どれみ

「これが、風の楽園・・・」

はづき

「とてものかな村ね。」

「あ、のぞみ姉ちゃん、さつき姉ちゃん!」

さつき

「ジェフ、フィオ!」

のぞみ

「久しぶりね。」

ほのか

「さつきちゃん、知り合いか?」

さつき

「ジフタス族の子ジェフと、フィニティ族のフィオよ。」

のぞみ

「ジェフ、フィオ。長はいるかしら？」

ジェフ

「おばあちゃんなら、今教会にいるよ。」

フィオ

「呼んで来るー。」

数分後、風の楽園の長である2人が現れた。

イヴァローラのローラと、ザヴェルのヴェルだ。

さつき

「お久しぶりです、ローラさん、ヴェルさん。」

ヴェル

「大きくなったのお、のぞみ、さつき。」

のぞみ

「ローラさん、宝石の事なのですが・・・」

ローラ

「ええ、エメラルドスターね。エメラルドスターはこの先にある塔の屋上よ。」

どれみ達は、村の中央にある塔へとやって来た。

のぞみ

「着いたわ、中央の塔よ。」

りずむ

「緑の風・・・のぞみね。のぞみ、早くポロンを・・・」

さつき

「待て・・・」

のぞみ

「何か、来る。」

ズン！！

ギイルとガイルが現れた。

みすず

「ギイル、ガイル！！」

ほしみ

「気迫が今までと違う・・・本気って事かしら。」

のぞみ

「みんな、最奥部に行くわよ。あそこには湖があるの。あそこですら思う存分戦える!!」

どれみ達は、最奥部にある湖へとやって来た。

ギル・ガイル

「・・・合体。」

ギルとガイルは合体し、イソ・ガンとなった。

のぞみ

「一気に行くわよ、みんな!!」

マジョルカ

「のぞみちゃん達に力を!!」

のぞみ

「ウインディフルーレ、静やかな光!!」

さつき

「フォレストフルーレ、淑やかな光!!」

ほか

「ボルケーノフルーレ、麗らかな光!!」

りずむ

「グレイシャフルーレ、艶やかな光!!」

みすず

「ティンクルフルーレ、鮮やかな光!!」

ほしみ

「レインボーフルーレ、輝かな光!!」

かげみ

「シャドウムフルーレ、秘めやかな光!!」

のぞみ

「7つの光で、闇を貫け!!」

のぞみ・さつき・ほのか・りずむ・みすず・ほしみ・かげみ
「おジャ魔女・レインボースター・ダストクラッシュ!!」

ドン!!

イソ・ガーン

「ムッ!!」

ドゴォ!!

イソ・ガーン

「グオオオオオ!!」

イソ・ガーンは湖に落ちた。

バシャアアアアン!!

のぞみ

「やった、これで・・・」

シュルルル・・・

のぞみ

「え・・・キヤア!!」

突然伸びてきた触手が、のぞみの足に巻きついた。

グイッ!!

のぞみ

「キヤアアアア!!」

バシャン!!

のぞみは湖に引きずり込まれる。

その後も次々に湖に引きずり込まれていき、30秒後、イソ・ガー
ンは湖から顔を出した。

ズズズズズズズズ・・・

その触手には、ハナを除く全員が捕まっている。

ローズ

「みんな!!」

イソ・ガーン

「だいぶ手こずったが、これまでだ・・・全員、始末してくれる・・・」

ローズ

「クツ・・・」

その時、空から真空の刃が飛んできて、どれみとのぞみを拘束している触手を叩き斬った。

ザシュツ！！

ローズ

「え！？」

そこにいたのは、江川ソングだった。

イソ・ガーン

「ソング、なぜここにいる！！そしてどういっつもりだ！？」

ソング

「アタシは気紛れだと言ったでしょ？彼女達も助けたのもただの気紛れよ。」

イソ・ガーン

「おのれ、裏切りやがって！捕まえてマナ様に引き渡してくれる！！」

ソング

「無理ね、あなた達には。」

イソ・ガーン

「何!？」

ソング

「だって、既にどれみ達が構えているもの。」

イソ・ガーン

「んなっ・・・!？」

イソ・ガーンが振り向くと、そこにはマジョフルーレを構えたどれみとのぞみ、セインティソードを構えたローズがいた。

どれみ

「炎の力!」

のぞみ

「風の力!」

ローズ

「聖なる力よ・・・3つの力で、闇を浄化せよ!!」

どれみ・のぞみ・ローズ

「おジャ魔女・トライアングル・インパクト!!」

どれみ達は武器を前に突き出し、強烈な波動を放った。

ドンッ!!

イソ・ガーン

「又オオオオオ!!」

イソ・ガンは両手を前に出し、波動を受け止める。

しかし、程なくして波動に両手を弾かれた。

バチィ!!

イソ・ガン

「!!!」

ドゴォ!!

ギール

「ダメっばい・・・」

ガイル

「無理っばい・・・」

ギール・ガイル

「グギャアアアア!!」

ギールとガイルは波動に押し潰され、大爆発した。

ドゴォオオオオン!!

その後、どれみ達はエメラルドスターを回収したのだった。

ギールとガイルを遂に倒したどれみ達。

しかし、疑問が残った。

江川ソングはなぜどれみ達を助けたのか！？

彼女達の疑問は、もうすぐ解ける事になるだろう・・・

第39の呪文：風のエメラルドスター！どれみ・のぞみ・ハナ3人の力！！（後

どれみ「ギイルとガイルを倒して、宝石を回収できたね。」

はづき「ソングはどうして私達を助けたのかしら・・・」

あいこ「もしかして、何か理由があるんとちゃうか？」

おんぷ「かもしれないわね。次の宝石を探しに来たアタシ達だけど、そこでレイアと戦う事になったわ。」

ももこ「彼女の気迫もひと味違う・・・心してかからないといけな
いね！」

のぞみ「次回、おジャ魔女どれみドッカ〜ン！『火のガーネットス
ター！ペンは剣よりも強くあれ！！』」

ほのか「どれみちゃんのやりたい事、見つかるかもな！！」

第40の呪文：火のガーネットスター！ペンは剣よりも強くあれ！！（前書き）

キャラクター・ファイル15

スコール

サソリの魔獣、ジガピオンの人間体。

マナが雇った魔獣人の1人。

冷静沈着な性格で、ラムダとは当初折り合いが悪かったが打ち解ける。

宝石を奪うべくどれみ達と戦うが返り討ちに遭い、2回目の戦いで真の姿を表してどれみ達を追い詰めた。

しかしハナが変身したセインティローズに圧倒され、最期はセインティローズ・メタルバニシードで浄化された。

第40の呪文：火のガーネットスター！ペンは剣よりも強くあれ！！

マナ

「レイア、今日は話があるの。」

レイア

「わかってますわ。ドルーズ、スコール、タコス、そしてギイルと
ガイル・・・もう5人もやられてしまいましたわね・・・」

マナ

「レイアの強さはアタシが一番わかってる。ただどおジャ魔女達も
日に日に強くなってるわ・・・」

レイア

「マナ様、お任せ下さい。アタクシにはとおきの本があります。
必ずおジャ魔女達を倒してみせますわ。」

マナ

「わかった、期待しているわよレイア。」

レイア

「はい！！」

レイア

「アタクシのとおきの本・・・『西遊記』！！おジャ魔女・・・
覚悟しなさい・・・」

魔女界

魔女界の女王様『宝石も遂に残り2つです。11個目の宝石は、ガーネットスター。ガーネットスターがあるのは、炎獄鬼岩城です。』

ほか

「また暑そうな名前やなあ。」

りずむ

「マジョボルト達も焦ってる。これからは更に強くなりそうね。」

MAHO堂

どれみ

「さ、出かけましょう!」

さつき

「みんな、先に行つて。私、やる事があるから。」

のぞみ

「アタシがさつきを連れてくから、どれみちゃん達は先に行つて。」

」

どれみ

「わかったわ。」

どれみ達が出かけた後、M A H O 堂

さつき

「のぞみゴメンね、つき合わせちゃって。」

のぞみ

「良いのよ。あなたの夢なんですよ？それ。」

さつきが書いているのは、小説だった。

さつき

「剣道場の師範代も良いかなーって思ったけど、小説も書きたいし・
・・」

のぞみ

「さつき、アタシも手伝うわ。幼なじみだもの。」

さつき

「のぞみ・・・ありがとう。」

炎獄鬼岩城

どれみ達は、炎獄鬼岩城に辿り着いた。

どれみ

「桃の炎・・・アタシか・・・」

どれみがポロンをかざそうとした、その時・・・

「そこまでよ。」

どれみ達が振り向くと、そこにはレイアが立っていた。

ほのか

「レイア!!」

レイア

「あら？2人いませんわね。」

りずむ

「のぞみとさつきはちよつと用事でね。」

みすず

「アタシ達だけであなたを倒してみせるわ!!」

レイア

「アタクシもナメられたものね・・・アタクシには、とっておきの本があるのよ?」

ほしみ

「とっておき・・・？」

レイア

「出でよ！『西遊記』の本！！」

ボウン！！

バラッ！

西遊記の本が開くと、どれみ達の中に吸い込んだ。

ギョオオオオオ・・・

パタン！

レイア

「アタクシの最後の切り札・・・お楽しみあれ。」

ドサドサッ！

どれみ

「ここは・・・？」

ほのか

「どうやら、西遊記の本の世界らしいな。」

りずむ

「レイアはどこにいるのかしら？」

『聞こえますかしら、お嬢ちゃん達。』

みずず

「この声・・・」

ほしみ

「レイア！！」

レイア

『今からアタクシの作った城に招待しますわ。ありがたく思いなさい。』

ヒュパッ！

どれみ達は、レイアの城に瞬間移動した。

かげみ

「レイア・・・」

レイア

「マナ様の願いを叶えるためには、あなた達の存在は疎ましい・・・アタクシの真の姿で、あなた達を倒して差し上げますわ！！ハアアアアア・・・」

レイアは魔力を込め始める。

レイア

「ハアッ!!」

ピシャアアアン!!

次の瞬間、レイアは数多の花飾りをつけた舞姫の姿になっていた。

レイア

『アタクシの一族は、食人植物ガブレシア・・・この意味がお分かりになって?』

ぽっぷ

「まさか・・・アタシ達を食べる気なの!?!」

レイア

『そのつもりですわ。ですがあなた達は全員揃っていませんから・・・あなた達を先に動けなくしておきますわ!!』

どれみ

「そうはいかないわ!!みんな!!」

どれみ達はフルーレを構える。

どれみ・はづき・あいこ・おんぷ・ももこ・ぽっぷ

「おジャ魔女・レインボースター・エクスプロージョン!!」

ほのか・りずむ・みすず・ほしみ・かげみ

「おジャ魔女・ペンデュラムスター・ダストクラッシュ!!」

どれみ達はフルーレから一撃を放った。

ゴォッ!!

しかし・・・

レイア

『甘いすわよ。ハアッ!!』

レイアは巨大なラフレシアの花を盾にし、どれみ達の技を両方防いだ。

ドゴォ!!

シュウウウウ・・・

どれみ

「そ、そんな!!」

ほのか

「うちの攻撃が効かへん!!」

レイア

「アタクシの本気だと、言ったでしょう? エネルギーボール!!」

レイアはラフレシアの花にエネルギーボールをつけ、巨大化させた。

レイア

『終わりにしましょう、おジャ魔女・・・あなた達の物語は、ここで終焉を迎えますのよ!!』

「それはどうかしら?」

レイア

『!!!』

レイアが声のした方に向くと、のぞみとさつきが立っていた。

のぞみ

「みんな、遅くなってゴメン。」

さつき

「覚悟しな、レイア!!」

レイア

『クツ・・・ここまでなのかしらね・・・』

のぞみ

「え？」

レイア

『アタクシはマナ様が生まれた時から側に仕えてきたの。ドルーズもそうよ。アタクシはマナ様を喜ばせようと、たくさんの童話を作り読み聞かせたわ。でもマナ様の心は開かなかった・・・だからアタクシは感じたの。人の心を動かすには、力じゃなきゃいけないの。かなって・・・』

さつき

「そんな事ないわ。あなたは怖かったのよ、彼女に拒絶されるのが。本当にマナの事が大切なら、彼女と真正面から向き合ってみなよ！」

レイア

『・・・そうね、ありがとう。でも、もう遅いのよ・・・』

巨大ラフレシアの魔獣が、のぞみとさつきに迫る。

ローズ

「させない！セイntyローズ・メタルバニード！！」

ローズはラフレシアの魔獣を消し去った。

のぞみ

「さつき。」

さつき

「ええ。レイア、来なさい。私達が浄化してあげる。」

レイア

『和久のぞみ・・・京極さつきイーツ！！』

のぞみ

「風の力！」

さつき

「草の力！」

のぞみ

「2つの力が1つになる時、」

さつき

「悪しき心を包み込む！！」

のぞみ・さつき

「デュアル・フォレストストリーム!!クロスハートツ!!!!」

バツ!!

のぞみ・さつき

「ハアッ!!」

ドンッ!!

レイア

『グ・・・アアアアアア!!』

レイアは両手で攻撃を受け止める。

しかし、程なくして手を弾かれ、草花の風に包み込まれた。

レイア

「心地よい風・・・あなた達なら、きっとマナ様を救えますわ・・・
マナ様・・・一足先に、行ってますから・・・」

その言葉を最期に、レイアは浄化された。

パアアアア・・・

マナ

「レ・・・レイア・・・」

レイアを倒し、ガーネットスターを手に入れたどれみ達。

残る宝石は、遂に後1つ・・・

第40の呪文：火のガーネットスター！ペンは剣よりも強くあれ！！（後書き）

どれみ「遂に宝石も後1つだね！」

はづき「次に来る刺客は本気でかかって来るかも。」

あいこ「気を引き締めなアカンな。」

おんぷ「そう言ったら、今度来たのはあのラムダ！」

ももこ「何か様子がおかしいような・・・」

ぼっぷ「次回、おジャ魔女どれみドツカ〜ン！『聖なるクリスタル

スター！ラムダ、衝撃発言！？』」

ラムダ「衝撃発言は次回をお楽しみに！！」

のぞみ「最後のとりを持つてかれた・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4930a/>

おジャ魔女どれみドッカ～ンレジェンド！！

2012年1月10日02時52分発行